

酔拂ひのコサック中尉の話などはもうトーニヤの耳には入らなかつた。かの女はたゞ一つの想ひで一杯だつた、——「ヴィクトル・レシチンスキイが襲撃した男を知つてゐる。なんだつてリーザはあんな奴に話したんだらう？」そして思はずこの文句を聲に出して云つてしまつた。

——なにを話したつて云ふの？——リーザには判らかつた。

——なんだつてレシチンスキイに、パヴルーシャのこと、つまりコルチャーギンのことを話したりしたのよ？ あの人、裏切るかも知れないぢやないの……

リーザは答へ返した、

——あら、そんなことないわ！ そんなことないと思ふわ。一體全體なんでそんなことをするつて云ふの、あの人が？

トーニヤは荒々しく坐ると、両手で痛くなるほど膝を握りしめた。

——あなたには何も判らないんだわ、リーザ！ あいつとコルチャーギンとは仇同志なのよ、それにもう一つ或るわけがあるの……だからあなた、大變なことをしてくれたわね、ヴィクトルにパヴルーシャのことを話しちまつたりして。

リーザは今になつて漸く、トーニヤの興奮してゐるのに気がついた。パーヴェルと云はずに、思はず口から滑り出たこの「パヴルーシャ」と云ふ優しい言葉によつて、かの女はたゞぼんやりと察し

てゐた事柄に對してはつきりと眼を見開いた。

思はずも悪いことをしたと感じたかの女はどぎまぎして黙り込んだ。

「ぢや、やつぱり本當だつたんだわ」とかの女は考へた。

判らないものだ。トーニヤが突然こんなに夢中になる。——しかも相手は？ たゞの労働者だ

……かの女はそのことを話題にしないでなくてはならなかつたが、細い心使ひからそれを我慢した。なにかで自分の罪を償はうと一生懸命になりながら、かの女はトーニヤの両手を捉んだ。

——そんなに氣になるの、トーニェチカ？

トーニヤは放心したやうに答へた。

——いえ、殊によると、ヴィクトルはあたしが考へてゐるよりも誠意のある人かも知れないわ。

間もなく二人の同級生でデミヤノフトといふおとなしいおづ／＼した若者がやつて來た。

かれがやつて來る實際まで娘たちの話はうまく運ばなかつた。

友達をおくつて行つたトーニヤは一人きりで永いこと立つてゐた。かの女は潜り戸に身を寄せかけて、町に向つてゐる道の暗い竊を眺めた。冷い濕氣と春のむつとする臭に飽滿した永遠の流浪者、風がその上に息づいてゐた。遙か彼方には町の屋敷々々のちつぽけな窓がどんよりと赤い瞳子で睨いてゐた。そら、あそこに町があるのだ、かの女にとつて親しからぬ小さな町が。あの中の一つの



屋根の下にはかれが、かの女の叛逆心に燃えた仲間が降りかゝつて来る危険も知らずにゐるのだ。そしてかの女のことなどは忘れてゐるかも知れない。二人が最後に逢つてから、幾日が次々と過ぎ去つて行つたことだらう？ あの時のかれの振舞ひは正しくなかつた、しかしもうとつくに何もかも忘れられてゐた。明日になれば會ふことが出来る。さうすれば又わく／＼するやうな美しい友情が再び甦つて來ることだらう。甦つて來るに違ひない、トニーはそのことを知つてゐる。たゞ夜が裏切つてくれさへしなければいゝが。なにか、よからぬ夜だ、まるで隠れて待伏せでもしてゐるやうな……寒い。

最後の眼差しを通りに投げかけてトニーは家の中に入つた。寢臺の中で、蒲團に身をくるむと一つの想ひを抱きながら眠りについた、——夜が裏切つてくれさへしなければいゝが！……

朝早く、まだ家のものが眠つてゐる中にトニーは眼を覺し、素早く着物をきた。だれも起こさないやうにソツと中庭に出て、モジャ／＼の毛をした大きな牝犬のトゥレゾールを鎖から放して一緒に町に向つた。コルチャーギンの家の向ひ側で一寸の間ためらつて立止つてゐたが、やがて潜り戸を押して中庭に入り込んだ。トゥレゾールは尻尾を振り／＼前方に馳けて行つた……

丁度その朝早く、村からアルチョムが戻つて來た。かれは自分が働いてゐた鍛冶場のおやちと一緒に荷車でやつてきた。稼いできた小麦粉の袋を肩にドッカとかついで中庭を歩いて行つた。つゞいて

鍛冶屋が、その外に儲けてきたものを運んだ。開け放された扉口で、肩から袋を投げ下したアルチョムは聲をあげて呼んだ、

——パフカ！

しかし答へは得られなかつた。

——家んなかに引張りこみなよ、なにを愚圖／＼してゐるんだ！——そばまで來た鍛冶屋が云つた。

稼いで來たものを臺所に置いたアルチョムは部屋に入つて見て棒立ちになつた。何から何までまぜ返され、ひつくり返され、床には古いボロ片が散らばつてゐた。

——なんてえざまだ！——アルチョムが鍛冶屋の方を向いていぶかしげに唸つた。

——うん、滅茶苦茶だな、——かれは合點した。

——小僧め、どこに隠れやがつたんだ？——アルチョムが疝癢を起し始めた。

しかし家の中はガランとしてゐて、だれに聞き訊しやうもなかつた。

鍛冶屋は別れをつげて、荷車に乗つて行つてしまつた。

アルチョムは中庭に出て邊りを眺め廻した。

「わけが判らねえ、いつてえ何てえ騒ぎなんだ！ 家は開けつばなし、パフカは居ねえ」。



背後に足音がした。アルチョムは振り返つて見た。かれの眼の前にはでかい犬が耳を突立てゝゐた。潜り戸から家の方へ見知らぬ娘が歩いて来た。

——わたし、パーヴェル・コルチャーギンに會はなければならぬことがあるんですけど、——かの女はアルチョムを見廻しながら大きくない聲で云つた。

——あしも奴に會はなけりやならねえんだがね。どこに隠れやがつたのか、てんから判りやしねえ！ たつた今戻つて来て見ると、家は開けつばなし、奴は居ねえ、ところであんたは奴のどこに來なかつたのかね？——かれは娘に向つて云つた。

かれは答へのかはりに問ひを耳にした。

——あなたはコルチャーギンのお兄さんの——アルチョムさんですか？

——その通りだが、それがどうかしましたかい？

しかし娘はかれには答へずに、不安げに開いた扉口を見てゐた。「どうして昨日やつて來なかつたんだらう、このあたしは？ まさか、まさか？……」すると胸の重みは一しほ強くおつ蔽つて來た。

——あなたがいらした時は扉が開いてゐて、パーヴェルは居なかつたんですか？——かの女は自分に見入つてゐたアルチョムに尋ねた。

——あんたはパーヴェルに一體どんな用事があるんです？

トニーヤはかれの方に近づいて行き、邊りを見廻しながら、語調も荒々しく話し出した。

——はつきりは判りませんが、パーヴェルが家にゐないとなれば、捕つたんです。

——なんで、また？——アルチョムはいらくして身を慄はせた。

——部屋に入りませう、——トニーヤが云つた。

アルチョムは黙つてかの女の云ふことを聞いてゐた。かの女の知つてゐるいちぶ始終を聞き了つたかれは絶望に墮つた。

——え、糞喰ひやがれ！ まだ嘆きやうが足りねえつて云ふのか、とんでもねえことをしでかしやがつて……——壓しつけられたやうにかれは囁言を云つた。——家んなかがこんなにごつた返しになつてゐる譯もそれで判つた。小僧め、偉え卷き添へを喰つたもんだ……これから何處に探しに行きあいゝんだ？ で、あんたは、お嬢さん、だれのお子さんですかい？

——あたし、營林所長トーマーノフの娘です。パーヴェルとは知り合ひなんですの。

——あ、——アルチョムは曖昧な調子で長く引き伸して云つた。——ほれ、小僧を肥してやらうと思つてこの小麦粉を持ってきたんだが、こゝちあこの通りの始末だ……

トニーヤとアルチョムは黙つたまゝ互に眺め合つてゐた。



——あたし行きますわ。あなたなら見付けさせるかも知れませんね、殊によると、——アルチョムに別れを告げながら、トニーはもの靜かに云つた。——夕方やつて來ますから様子をきかせて下さい。

アルチョムは黙つて頷いて見せた。

窓の片隅で、瘦せ衰へた一匹の蠅が冬眠から眼覺めてブーンと唸り聲を立てゝゐた。古いすれすれになつた長椅子のはじめに腰掛けてゐた若い百姓娘は穢らしい床を當てどもなく見つめてゐるのに疲れてしまつた。

司令官は口はじで巻煙草をかみながら、スラクと紙片を書き終ると、シェベトフカ町司令官コサック騎兵少尉といふ肩書きの下に、終りに洒落れたグル／＼巻きのついた達筆な署名を得意になつてやつてのけた。扉口に拍車のカチャ／＼いふのが聞えた。司令官は頭をもたげた。

かれの前にはサロムイガが片手に繻帶をして立つてゐた。

——どうした風の吹き廻しでやつて來たんだ？——司令官がかれを歓迎して云つた。

——結構な風の吹き廻しぢやよ、脱走兵に片手を骨までやられるし。

サロムイガは女がゐるのに眼も呉れずに、ひどい悪體をついた。

——貴様なにか、こゝに治療しにやつて來たんか？

——治療はあの世に行つてからやるさ。戦線は壓迫されちよる、ぢり／＼押しにされてのッ。

司令官は頭で女の方を指してかれを押し止めた。

——話は後にしやう。

サロムイガは脚臺の上にドカンと腰を下すと、ウクライナ人民共和國の徴しであるエナメル塗りの三叉槍を刻み込んだ徽章つきの帽子を脱いだ。

——實はグループに派遣されて來たんだが、——かれは小聲できり出した、——もう直き近衛狙撃師團がこつちにやつて來るんぢやて。こゝはまあごた／＼があるやうぢやから、わしが秩序を保つやうにせんければならんだ。「大」頭梁<sup>アッペン</sup>がやつて來るかも知れんし、どつかの外國の鷲鳥どもが一緒について來るで、こゝぢや樂にした話をするものが一人もないやうにな。ときに、なに書いとるんだ、貴様？

司令官は口にくはへてゐた巻煙草を片方の隅に移した。

——こゝに斃りぞこなひが一人叩きこんであるんだがな、小僧ツ子だ。そのなア、ホラ、おれ達に向つて鐵道従業員をけしかけたジュフライつてえ奴が居つただらうが、……奴め、停車場でふん



捕つたんだ。

——うん、それで？——サロムイガは面白がつて乗出してきた。

——うん、それでだ、停車場の司令官のオメリチェンコの頓馬め、たつた一人コサに奪ひ返されちまつたんだ。コサック兵の武器をふんだくつて齒を叩き折つて後白浪さ。ジュフライは行方をくらましやがつたが、小僧の方はふん捕へたよ。これを読んで見い、参考資料だ、——かれはぎつちり書き込まれた書類の束をサロムイガの方に押しやつた。

かれは左の丈夫な方の手でそれをめくりながら大急ぎで眼を通したが、よみ了つてしまふと司令官に眼を注いだ、

——で、奴になに一つ吐かすことがでけんのか、貴様？

司令官はいら／＼して軍帽の庇を引張つた。

——五日間、掛りきつとるんだがな。「何も知りません、私が逃がしたんぢやありません」の一天張りで、口を割り居らんわい。全く手に負へない斃りぞこなひだ。そいでな、護衛兵め、奴だと判つたもんだで、まちつとのとこでわしの眼の前で、虫けらを絞め殺さうとしやがつたつけ。わしが無理矢理ひき離れた始末ぢあ。コサック兵の奴、犯人を逃がしたかどで停車場に連れて行かれてオマルチュン

コに二十五叩きを喰ひ居つてのオ、だもんで、小僧の面を見たら、いきなりふん捉へて殴りつけたんぢやよ、この上ぶち込んでおくこともなか、勘定をつけてしまふために本部に送る積りである。

サロムイガは輕蔑するやうにペツと唾をはいた。

——おれが手掛けたんなら、口を割らして見せるがな、貴様は坊主の伴だけあつて取調べも下手だよ。神學生から司令官になる奴もないもんだ。野郎に柵杖を喰はして見たんか？

司令官は怒りだした。

——おい、餘り偉さうにぬかすな。人を笑ふのはおあづけにしといてくれ。わしはこゝの司令官だ、おせつかいは止めにして貰ほう。

サロムイガはカン／＼になつて司令官を眺めて大聲で笑ひ出した。

——ハッ、ハッ……、坊主の伴、膨れるなつてことよ、はちきれたらどうする？ 貴様や貴様の仕事のこんなんぞはどうでもえ、それよりも貴様、密造ウオッカを二三本手に入れるにや何處に行つたらいゝか教へろよ。

司令官はにやつとした。

——そりや教へてやらんこともないさ。

——ときに、こいつだな——サロムイガは指で書類を突つた。——始末してしまひたければ



だ、十六歳の替りに十八歳と書き込んでおくんだ。こゝんどこをごまかしておけ、さもないと通らんかも知れんぞ。

倉庫にぶち込まれてゐたのはみんなで三人だつた。着古した百姓外套をきた鬚もぢやの老人が幅の廣い布ズボンをつけた細つこい足を折り疊んで、板寢床の上に横になつてゐた。かれは自分のところの納屋から、借主のペトリューラ兵の馬が行方不明になつたといふかどで、投げ込まれてゐた。床の上に坐つてゐた顎のとがつた、狡るさうな泥棒眼をした年老つた女の密造ウオッカ造りは時計やその他の貴重品の窃盗犯として入れられてゐた。窓下の片隅にはパフカがクシヤ／＼の鳥打ち帽の上に頭をのせて、半ば意識を失つて横つてゐた。

色のついた布を百姓風に結んだ若い女がオド／＼した大きな眼をして倉庫につれて來られた。女は一寸の間立つてゐたが、やがてウオッカ造りの女の傍らに坐つた。

おかみさんは物すきさうに新入りの女を眺め廻してから口ばやに投げかけた。

——くつたのかい、ねえさん？

返事はなかつたがそれでも止めなかつた。

——なんで入れられたんだよ、え？ 事件はなんだい、密造ウオッカぢやねえのかね？

百姓女は立上つて、しつこい女を打眺め、しづかに答へた。

——いんや、兄さんのこんで連れて來られたぞ。

——で、兄さんがどうしたんだよ？——おかみさんはうるさく附纏つた。

爺さんが口をはさんだ。

——なんだつて人騒がせをするんだな？ その仁は世の中がいやなんかも知れねえに、てめえと

來たら、ベシヤクシヤきゝ立てやがつて。

おかみさんは咄嗟に板寢床の方を振り向いた。

——おめえこそなんだつておらにお説教してけつかるんだ？ おめえと話してでも居るかつてえんだ？

爺さんは唾を吐いた。

——その仁にしつこくするなつてえことよ。

倉庫の中は靜かになつた。女は頭にかぶつてゐた大きな布を下に敷き、片手に頭をのせて横になつた。

ウオッカ造りは食事に取かゝつた。爺さんは兩足を床の上におろし、ゆる／＼と新聞紙で紙巻き



をつくつて喫らし始めた。臭い煙りの輪が倉庫中にひろがつて行つた。

一杯に頬張つた口をもぐ／＼させながら、おかみさんはぶつ／＼云つた。

——せめておまんまぐらゐは臭い匂もかがずにゆつ／＼くらたべさして戴きたいもんだね、のべつ幕なしにのみ散らかしやがつて。

爺さんは毒々しくヒヒ、と笑つた、

——瘠せるのが氣になるのか？ あの戸口もすぐにや這ひ抜けられねえくせしてよ。おめえ、若いのに喰べさしてやつたらどうだ、さう自分でつめ込んでばつか居ねえで。

おかみはブンとして手を振つた。

——あたしやおたべつて云つてるんだがね、喰ひたくないんだとき。あたしのこたア差出口おしでないよ、お前さんのもんを喰べさして貰つてゐるわけぢやあんめえし。

若い女はウォッカ造りに向ひ、コルチャーギンの方を頭でさして尋ねた。

——あの人何で入れられてるんだか、知りなさらんかね？

おかみさんは話しの糸口が出来たのを喜んで、乗出してきて教へてくれた、

——ありや土地の若えもんで、コルチャーギンつてえ臺所女の末っ子だよ。

耳もとに身をかがめて女は囁いた。

——ポリシェヴィキを逃がしてやつただよ。おらんちの隣りのゾズリーハんとこに水兵さんが一人とまつてゐたんだがね。

女は想ひ出した、

「勘定をつけてしまふために本部に送る積りでをる。……」

停車場は次から次へと軍用列車で一杯になつた。近衛狙撃大隊が亂雑な群れをなして列車から轉り出て來た。鋼鐵をうちつけた車輛、四臺からなる装甲列車「コサツク」がのろ／＼と線路を匂つてゐた。無蓋車から大砲が引張り出された。貨物列車から馬を曳出し鞍をおいてとび乗ると、列を亂した歩兵の群れを追散らして、停車場の庭に辿りついた。そこには騎兵部隊が集合してゐた。

頭目たちが自分々々の受持ち番號を怒鳴りながら飛び廻つた。

停車場は胡蜂の群れのやうに鳴り響いた。いろんな聲をした人々のごつた返した塊りから、次第次第に四角い形をした小隊が接ぎ合はされてゆき、間もなく武装した人々が雪崩をうつて町に流れ込んだ。日暮れ眞際まで荷馬車が舗道を震動させ、町に入りこんだ近衛狙撃師團の後方部隊が揺れ



て行つた。

そして最後に行列のしんがりやをうけたまわつた本部中隊が百二十の口を揃へて怒鳴り／＼歩いて行つた。

何の騒ぎぞ、何の聲

とどろき渡るウクライナ

あらはれ出でし頭梁は

これぞ名高きベトリューラ

コルチャーギンは窓際に立上つた。かれは更けやらぬ宵の薄闇を通して、街路を行きすぎる車輪のどろきや、數知れぬ人々の足踏みや、大勢の歌聲をきいた。

後からだれかゞ小聲で話しかけてきた。

——なんだか、軍隊が町に入り込んでるやうだナ。

コルチャーギンは振返つて見た。

口をきいたのは昨日連れて來られた娘だつた。

かれは娘の物語りをきいた。ウォッカ造りは本望を達した。かの女は町から七露里はなれた村のものだつた。兄のグリツコは赤色パルチザンで、會議のときには貧農委員會を牛耳つてゐた。

赤軍が立去つたとき、グリツコも機關銃の保彈帯をしめて一緒に立去つた。で今では家のものは生きてゐる想ひもなかつた。一匹しか居なかつた馬も取上げられた。父親は町にしよびいて行かれ、暗いところに入れられて長いこと苦しめられた。グリツコから痛い目に合はされた手合の一人である頭目は、意趣返しにいつもかれらの家に大勢のものを宿泊させた。家族はとことんまで費ひ果してしまつた。昨日司令官が驅立てをしに村に現れた。頭目はかれをグリツコの家以案内した。司令官は娘を見飽るほど眺めてゐたが、朝方「取調べ」たいことがあるからと云つて連れて來られたのだつた。

コルチャーギンは寝つかれなかつた、やすらひは跡方もなく消え去つてしまつた。そしてたゞ一つの想ひ、「この先どうなるのだらう？」といふ振り切らうにも振り切りきれない想ひがうるさく附纏ひ、頭の中をとび廻つた。ぶちのめされた身體がひどく痛んだ。かれは獸物のやうな怨みを抱いた護送兵にいやと云ふほど殴りつけられたのだ。

いやな想ひから逃れやうとして、かれは隣りの女がヒソ／＼喋舌るのを聞きはじめた。

娘が聞えるか聞えないやうな聲で話したところによると、司令官はかの女にいやらしいことを云



つて、嚇したりすかしたりした揚句、肘鐵砲を喰ふとムキになつて怒つて、かう云つた、「穴藏にぶちこんでやるぞ、泣いたつて喚いたつて出られるもんか」。

闇が隅々を蔽ひかぶせた。息苦しい不安な夜が待つてゐた。又もや測り知ることのできない明日のことを考へた。七日目の晩だったが、まるで幾月も幾月もが過ぎ去つたやうに思はれた。横になつてゐるのは堪らない。痛みは止まなかつた。倉庫には今たつた三人しか居なかつた。爺さんは板寢床を自分の家の煖爐とでも心得てゐるのか、ぐう／＼鼾をかいてゐる。爺さんは哲學者のやうに落付きはらつてゐて、毎晩ぐつすり眠る。密造女はコサック少尉の云ひつけでウォットカを手に入れに出て行つた。フリステーナとパーヴェルは殆ど隣り合つて床の上にもた。昨日かれは小さな窓口からセリョーシカを見かけた。長いことおもてに突立つたまゝ、建物の窓を愁はしげに見てゐた。「おれが此處に入れられてゐるのを知つてると見えるな」。

三日の間、酸つばい黒パンのかけらが渡された。二日の間、司令官から取調べをうけておどかされた。

「一體どうしたといふんだ？」

取調べをうけても何一つ云はず、いつさい知らぬ存ぜぬで押し通した。どうして黙つてゐたのかは自分自身でも判らなかつた。本でおなじみの人々のやうに勇敢な男になりたかつた。頑強な男に

なりたかつた。しかし捕つて夜中に引張つて行かれ、大きな蒸氣製粉所のそばまで来たとき、連れて行く男の一人に、——「なんだつてしよびいてくんだね、少尉さん？ 背中に一發ぶち込めば——それでかた濟みだ」と云はれたときにはうす氣味悪くなつた。さうだ、恐しいことだ、十六歳で死ぬといふことは！ 死ぬといふことは——永遠に生きるのを止めることではないか。フリステーナも考へこんでゐる。かの女はこの若者よりも澤山のことを知つてゐる。かれは恐らくまだ知らないでゐるのだらう……だがかの女は聞いてしまつたのだ。

かれは寢もやらずに一晩中轉々としてゐる。フリステーナはかれが可愛いさうでく／＼ならなかつた、だが、かの女にも自分の歎きがあつた、司令官のぞつとするやうな言葉を忘れるわけには行かない。——「明日はかたをつけるからな。わしが相手にとつて不足なら番兵小屋に行くがいゝさ、コサック兵がいやとは云はんよ。二つに一つだ」。

おゝ、なんと辛いことだらう、どちらも容赦してくれる筈はない！ グリツコが赤軍に入つたからと云つて、かの女になんの罪があるのだ？「あゝ、世の中あ辛えもんだ！」

鈍い痛みが喉下をしめつけ、救ひやうのない絶望と恐怖とがかの女を鞭つた、やがてフリステーナは低く啜り泣きはじめた。

若々しい肉體は氣も狂はんばかりの悲歎と絶望に身もだえてゐた。



壁際の片隅で人影がうごめいた。

——どうしたんだ、一體？

フリスチーナの炎のやうな囁き、——かの女は口數の少いとなりの若者に自分の歎きを注ぎかけた。かれは黙つたまゝきいてゐる。そしてたゞその片手がフリスチーナの手の上に置かれてゐるだけだった。

——わしを責め立てやがつて、畜生めら、——涙を呑みこみながら、見究めることのできぬ恐怖を抱いて、かの女は囁いた。——もうおしめえだ、あいつらの思ひ通りにされちまふだ。

かれパーヴェルはこの娘になにを云ふことが出来ただらう？ 言葉はなかつた。何も云ふことはない。生命がめり／＼と緊めつけた。

明日かの女をやるまいとして闘はうか？ 死ぬほどどやしつけられるか、サーベルで頭を削られるのが落ちだ。かれはこの悲しみに毒された娘を僅かなりとも慰めやうとして、その手を柔しく撫でさすつた。娘の啜り泣きは鎮つた。入口に立つてゐる番兵が時たま通行人に向つてきまつて、「だれだ？」と呼びかけたが、やがて又静かになつた。爺さんはぐつすり寝込んでゐる。一分一分が知らぬ間にジリ／＼と匍つて行つた。かれはいつの間にか両手でしつかりと抱きしめられ、引寄せられてゐるのに気がついた。

——きいてくんろ、おめえさん、——燃えるやうな唇がさゝやく、——わしはどつち途もうおしめえだ、將校か兵隊か、どつちかの颯りもんにされちまふだ。わし、おめえのもんにしてくんろ、あにさん、せめてあの犬畜生に操を破られねえうちによ。

——なにを云ふんだ、フリスチーナ？

だが、しつかりと抱きしめた両手は放れなかつた。燃えるやうな唇、ふつくらした唇から逃れることは容易でなかつた。娘の言葉は素直で、やさしかつた。どうしてそんな言葉が出るのか、かれは知り過ぎるほど知つてゐた！

そして今日といふ日はどこか片隅にみる／＼逃げ去つてしまつた。扉に錠のかゝつてゐることも、緒毛のコサツク兵も、司令官も、野獸のやうな拷問も、息苦しい眠りのない七夜も忘れはててしまひ、たゞ／＼燃えるやうな唇と涙にほんのり濡れた顔が一瞬の間残されてゐるだけだった。

突然、トーニャのことが頭に浮んできた。

「どうしてトーニャを忘れて居られたのだらう？……うつとりするやうな、なつかしい眼」

やつとの想ひで振り放すことが出来た。かれは酔拂ひのやうに立上ると、片手で鐵格子をつかんだ。フリスチーナの手がかれをさぐり當てた。

——どうしたぞね？



この問ひの中には、どれだけの感情が含まれてゐることか？ かれは娘の方に身を屈めて、強く兩手を握りしめながら云ふ、

——おれには出来ないよ、フリスチーナ、お前さんは——いゝ人だ、——そしてまだなにか自分でもわけの判らぬことを喋舌つた。

耐えきれない静けさを破らうとしてスツクと立ち上ると、かれは板寢床の方に歩いて行つた。端つこに腰をおろし、爺さんを引張り始めた。

——ぢさま、タバコを呉れねえか、頼むから。

片隅では布に身をくるんだ娘が啜り泣いてゐた。

夜が明けると司令官がやつて来て、コサツク兵たちにフリスチーナを連れて行かせた。かの女は眼でパーヴェルに別れをつげた。その怨めしさうな眼差し。そしてかの女が出て行つた後から扉がボタンと閉められると、かれの心の中は一層苦しく暗鬱としてきた。

爺さんは夕方までかゝつて若者から一言も聞き出すことが出来なかつた。歩哨と司令部とが交替した。日が暮れてから、新しい男が連れて來られた。パーヴェルはそれが砂糖工場で木工をしてゐるドリニンニクだといふことに氣がついた。づんぐりした男で、着古した上衣の下に色褪せた黄色いシャツを着込んでゐた。かれは倉庫の中をチツと見廻した。

パーヴェルがかれを見掛けたのは一九一七年の二月のことで、革命はこの町にまで押寄せて來てゐた。騒然たる示威運動の中でかれはたゞ一人のポリシェヴィクの演説を聞いた。それがドリニンニクだつた。かれは道ばたの柵の上によち登つて、兵士に向つて、演説した、

——兵士諸君、ポリシェヴィキを信頼してくれ、ポリシェヴィキは裏切るやうなことはないぞ！

そのとき以來、この木工と顔を會はせた事はなかつた。

年寄りには新入りの仲間が増えたので嬉しがつた。一日中黙りこくつて坐つてゐるのが辛かつたのだらう。ドリニンニクはかれの傍らの板寢床の上に坐つて一緒にタバコをふかしたり、いろんなことを訊いたりした。

やがてコルチャーギンのそばに腰をおろした。

——なんかいゝ話はねえかね？——かれは若者に尋ねた。——なんして此處にやつて來たんだ。ぶつさら棒な返答をされたドリニンニクはこの話相手は疑ひ深いので、そのやうに言葉惜みをするのだと感付いた。しかし若者がどんな罪に問はれてゐるのかを知つた木工は愕いてその伶俐な眼をコルチャーギンの上に釘づけにした。かれは並び合つて坐つた。

——ぢあなにか、ジュフライを助け出したつてえのか、ふーん、さうか。おめえが引張られたと



はまるで知らなかつたよ。

パーヴェルは思はず肘をついた起き上つた。

——ジュフライだなんて、おれはなんにも知らねえ。濡れ衣を着せられてるんだよ、おれは。だがドリンニクはにつこり笑ひながらかれの方にすつと身を寄せた。

——よせ、兄弟、おれの前で隠し立てするなあ。こつちの方がたんと知つてるよ。そして爺さんに聞えないやうな小聲で、

——おれは自分でジュフライを送つて行つたんだ、奴は多分もう部署についてゐるよ。あの事件はフォードルから何もかも聞いて知つてるぜ。

何ごとか考へながら少し黙つてゐてから附け加へていつた、

——おめえはどうやら役に立つ者だ。だが、ぶち込まれた上に、何もかもばれてるたあ畜生ッ、ひどくまづいことになつたものだ。

かれは上衣を脱ぎすて、それを床の上に敷いて寢床替りにすると、背中を壁にもたげて坐り、又もやタバコの輪を描き始めた。

ドリンニクの最後の言葉はパーヴェルにすべてを物語つてくれた。疑ひの餘地はなかつた、

——ドリンニクは仲間の一人だ。ジュフライを送つて行つたと云ふからには……

日暮れまでの間にかれが聞き知つたところによると、ドリンニクはベトリューラ軍のコサック兵を煽動した廉で逮捕されたのだつた。降服して赤軍に加はれとアッピールした縣革命委員會のアヂピラを兵士に手渡ししてゐるときに、證據物件ごと捕縛された。

用心深いドリンニクはパーヴェルに僅かのことしか話してくれなかつた。

「年齒も行かないものを柵杖で殴りつけるなんて！ まだ若い身空で」とかれは考へた。

夜も更けて床に就きながらかれは自分の不安をそれとなく言葉少く話した。

——おれ達二人の置かれてゐる状態は知事様やなんかのとは譯けが違ふんだ。どんなことになるか、まあ見て居やう。

翌る日、細い頸にとつともなく大きな耳をした、町でも有名な床屋のシュレーマ・ゼリツェルが捕縛されて倉庫の中に入つて來た。かれは興奮して身振り手振りよろしくドリンニクに話しをした。

——で、さう云ふわけ合ひで、そのフックスやブルフシュテインやトラハテンベルクは奴さんのところへ御馳走を持つて行きますさ。わしはね、こう云ふさア、持つて行きたけりや、——持つてくよろしい、だがユダヤ人部落で奴らに賛成して署名するものがどこにあるものか。憚りながら、一人も居らんわ。そりや奴らには思はくがあるさ。フックスは店持ちだし、トラハテンベルクは製粉場



の主人だからな。だがわしは何を持つとる？ 外の食ふや食はずの連中は何を持つとる？ あの貧乏人どもは何も持つとらんですわな。ところが、わしには長い舌があります。今日も、ついこなひだ派遣されてきた新顔のコサック士官の一人をあたりながらこう云つたものでさ。——「なんですか、ペトリューラ頭梁はユダヤ人掠奪のことを御存知でせうかな、いかゞでがせう？ 頭梁は代表者に會つて下さるでせうかな？」つてな。いやはや、この舌めの御蔭で、どれだけ迷惑したか知れませんよ！ そのコサック士官の顔を刺り了へて、粉をふりかけて、何もかも別格にしてあげた揚句に一體何をされたと思ふね、あんな？ 奴さんめ立上ると、勘定を拂ふどころか、政府反對の煽動をした廉でこのわしをふん縛るつてえんだからね。

ゼリツェルは拳固で自分の胸を叩いた、

——煽動がきいてあきれよ。わしが一體なにを喋舌つたと云ふんだね？ その男に尋ねごとをしただけぢやないか……しかもそれだけのことでぶち込まれるなんて……

夢中になつてゼリツェルはドリンニツクのシャツのボタンをぐる／＼廻したり、かれの両手をかはる／＼捉んでは引張つたりした。

ドリンニツクは興奮してゐるシュレーマの話の聞きながら想はず微笑を浮べてゐた。

床屋が黙り込むと、ドリンニツクは眞顔になつて話した。

——おい、シュレーマ、剛巧な男がばかな眞似をしたもんだな。わざ／＼喋舌るのにもこと缺いてよ。こゝは餘り感心したところぢやないぜ。

ゼリツェルは納得したやうにかれを眺めてゐたが、やがて絶望して腕を打振つた。扉が開いて、パーヴェルには御なじみのウォッカ造りが倉庫の中に投げ込まれた。かの女は自分を引張つて來たコサック兵に向つて口汚く毒づいた。

——おめえさんも司令官と一緒に火炙りにでもされつちまへ。野郎、わしのウォッカを喰つて斃つちまふがいつだ！

歩哨はかの女の後からバタリと扉をしめた、つゞいて錠をさし込む音が聞えた。

おかみが板寢床の上に腰をおろすと、爺さんはふざけて挨拶をした。

——なんだ、また御出ましかい、金棒曳き？ いやさ、まあゆつくら遊んで行きなよ。

ウォッカ作りはむっとして爺さんを眺めてゐたが、やがて包みを手にとるとドリンニツクと並んで床の上に坐をかへた。

かの女はウォッカを五六本ぶんどられると又もやぶち込まれたのだつた。

扉の向ふ側にある哨舎で叫び聲や人々の動く氣配が聞えた。だれかの鋭い聲が命令を發した。倉庫に監禁されてゐる者たちは一勢に頭を扉口に向けた。



古ぼけた鐘樓のついた汚らしい貧弱な教會わきの廣場で、この町にとつてたゞならぬ事件が起つた。正規の軍裝を整へた近衛狙撃師團の各部隊が正確な三角形をなして三方から廣場を圍んで整列してゐた。

前方には、教會の玄關口から學校の柵に至るまでの間、三歩兵聯隊が將棋盤のくぎりのやうにぎつしり並んで伸び擴つてゐた。

最も強大な戰鬥力を持つた「執政」師團に屬するペトリューラ兵達は南瓜を半分に分つた様なおかしな形のロシア式鐵兜に火藥を一杯浴びた儘、銃を足下に立てて、汚れた群をなして突立つてゐた。

もとのツァーリ軍の貯藏してゐた被服、靴類で立派に見なりを整へたこの師團は、その半分以上が意識的にソヴェートと闘つてゐる富農の出身であつたが、今度戰略上もつとも重要な鐵道分歧點を擁護するためにこの町に移動してきた。

シェペトフカからは五つの方向にそれ／＼立派な道が縞狀をなして飛び散つてゐた。ペトリューラにとつてこの地點を失ふことはすべてを失ふことだつた。かうして狭い地域が「執政」師團に残された。ヴァインニツツアのさゝやかな町がペトリューラ軍の首都となつた。

大頭梁アタマンは自ら進んで部隊を點檢することに決めた。萬事かれを迎へる用意は整つてゐた。

眼も届かないくらい遠い後列の廣場の隅には、新たに動員された聯隊が並んでゐた。そこにはまぢ／＼の服裝をした若者たちが靴もはかないで立たされてゐた。夜の驅り立てを喰つて爐端から引ッ立てられたか、通りでふん捕つたかして連れて來られたこれらの村の若ものたちは誰一人戰ひに行かうなどとは考へてゐなかつた。

——莫迦な奴も少くねえもんだ、——とかれらは云つた。

ペトリューラ軍の士官たちがやつてのけた最大のお手柄は動員したものを護送兵つきで町に連れてきて、中隊と大隊に別けて銃を分配したことだつた。

しかしその翌日には連れて來られた連中の三分の一が行方をくらましてしまつたし、それから一日と數が減つて行つた。

かれらに靴を給與したのは輕卒の極みだつた、それに靴も山ほどあつたわけではなかつた。命令が發せられた、——召集セラレタルモノハ履物ヲ持參スベシ。この命令の結果、とてつもないことがもち上つた。あのやうなボロともなんと云ひやうのないものを一體どこで手に入れて來たのだらうか？ 針金か繩の助けをかりなければ足にくつついてゐないやうな代物を？

かれらは裸足のまゝ閱兵式に引張り出された。



歩兵につゞいてグループ騎兵聯隊が蜿々として伸びてゐた。

騎兵がおすな、へすなの野次馬の群を制止した。だれもかれもが閱兵式を見たがつた。

外ならぬ大頭梁<sup>アタリ</sup>がやつて来るのだ！ 町ではこのやうな出来事は滅多になかつたので、このお代の要らない見世物を見逃すやうなものは一人もなかつた。

教會の階段には聯隊長、副官、僧侶の二人娘、ウクライナの教師團、「自由」コサツクの群れ、心もちせむしの町長、——一口に云へば選りぬきの「社會」の代表者たちが集つて居り、その中にはチエルケス服を着た歩兵總監も交つてゐた。かれは閱兵式を指揮した。

教會では神父ワシリイが復活祭の衣裳を着こんでゐた。

お祭り騒ぎでベトリューラを迎へる用意がと、のへられてゐた。黄に青の旗が持ち運ばれて、打建てられた。動員された者たちはその旗に宣誓しなければならなかつた。

師團長は肺病やみの様にノロ／＼したフォードでベトリューラを迎へに停車場に向つた。歩兵總監は口髭を洒落れた具合に捩廻し、キチンとした身なりをした聯隊長チエルニヤックを呼びつけた。

——だれかを連れて行つて、司令部と後方部隊を調べて来てくれ給へ、何もかも綺麗さつぱり整頓しておくやう、拘留者がゐるやうだつたら取調べの上、ごろつき共は追ッ拂ふがい。

チエルニヤックは靴の踵を鳴らし、出喰はした副官の腕をとつて疾り去つた。

總監が僧侶の姉娘に向つて丁重な口つきで尋ねた。

——お宅の御食事の方はいかにです。萬事うまく行つておいでですか？

——ハア、お蔭さまで、司令官のお骨折りで、——僧侶の娘は美男の總監を喰入るやうに見つめながら答へた。

突然みんなが動き始めた——一人の騎手が馬の頭にしがみついて舗道を疾驅して來た。かれは片手を振つて叫んだ。

——到着ッ！

——集れーッ！——總監ががなり立てた。

士官たちは隊列に疾せつた。

フォードが教會堂の入口の前で噓を始めると、軍樂隊は「未だ滅びずウクライナ」を奏で出した。

自動車から師團長につゞいて「外ならぬ大頭梁<sup>アタリ</sup>ベトリューラ」が不細工な様子で匍ひ出して來た。赤くなつた頸の上にゴツ／＼した頭をどつしり据ゑつけた中背の男で、近衛兵の上等な青羅紗でつくつた小ロシヤ風の上衣を着、その上に黄色いバンドをしめ、轟立つた皮のケースに入つた豆粒ほどのブラウニング拳銃をつけてゐた。頭上には防護色をほどこした「ケレンスキイ帽」、そのまゝの上にはエナメルのスズ鍔のついた徽章がのつかつてゐる。



シモン・ペトリューラの風采には戰鬪的なものは一つもなかつた。かれは打見たところ、まるで軍人のやうではなかつた。

なにか不氣嫌さうな様子でかれは總監の簡単な報告を聴いてゐた。それが了ると今度は町長が歡迎の辭を述べた。

ペトリューラはかれの頭越しに、整列した聯隊を眺めながら、ぼんやりとそれを聞いてゐた。

——閱兵を始めやう、——かれは總監に領いて見せた。

軍旗の傍らにおかれた小さな臺に登つてペトリューラは兵士に向つて十分間ほど演説をした。

人なるほどと思はせるやうな演説でもなかつた。ペトリューラは旅の疲れのせい、特別活氣もなくやつてのけた。終りしなに兵士たちは上官から決められてゐた通り、「榮譽あれ！ 榮譽あれ！」と叫んだ。かれは臺から下りハンケチを取出して汗ばんだ額を拭つてゐたが、やがて總監と師團長とを引連れて各部隊を通り過ぎて行つた。

動員されて來た連中の隊伍に沿つて歩いて行つたとき、かれはイラ／＼して唇を噛みしめながら、蔑むやうに眼を細めた。

閱兵の終り際に、動員されて來た若者たちが一小隊、一小隊、バラ／＼な列を組んで、軍旗の下に近づき、まづ傍らに立つてゐるワシリイ神父の福音書に、つゞいて軍旗の片隅に接吻してゐると

きに、ある思ひ掛けないことが起つた。

どうしてやつて來たかは知らないが、代表團が廣場に現れてペトリューラの下に向つた。金持ちの林業家ブルフシュテインが兩手にもてなしの品をのせて進み出で、雜貨商のフックス外三人の相當な商人たちがそれに續いた。

ブルフシュテインは従僕のやうに身を屈めてペトリューラに盆を捧呈した。傍らに立つてゐた士官がそれを受取つた。

——國家の頭であらせられる閣下に對し、ユダヤ人一同は心からの感謝と尊敬を捧げるものであります。どうぞ、これが祝賀状でございます。

——結構ぢや、——そ／＼と書類に眼を通しながらペトリューラがそつげなく云つた。だがその時フックスが進み出た。

——幾重にも閣下にお願ひいたしますが、事業を開始出來ますやうお取りはからひ願ひたいと存じます。それから私どもを……ユダヤ人掠奪からお護り下さいませやう、——フックスはやつと思ひでその言葉を口に出した。

ペトリューラはムツとして顔をしかめた。

——我輩の軍隊は掠奪などはせん。その事をよく覚えておいて貰ひたいもんぢや。



フックスはだれに助けを求めるすべもなく、両手を擴げた。

ペトリューラは苛立つて肩を軽く引張つた。かれはこのやうな下らぬことでやつて來た代表團が癢に障つてならなかつた。振返つてみると、グループが黒い口髭を嚙みながら背後に立つてゐた。

——ここで君んとこのコサツク兵の不平をこぼしてゐるんだが、聯隊長。事情をしらべて適當に處理してくれたまへ、——ペトリューラはさういひ了ると、總監の方を向いて命令した、

——閱兵式を始めよう。

運の悪い代表團はまさかグループと鉢合はせしやうなどとは思ひもよらなかつたので、コソ／＼逃げ去らうとした。

觀衆のすべての注意は正に始まらうとしめる儀裝行進に向けられてゐた。鋭い號令が響き渡つた。

グループは表面は何氣ない顔を粧ひながら、ブルフシュテインの方に身を寄せて、小聲でしかもはつきりと云つた、

——サツサと行かないとカツレッツにしてくれるぞ、この洗禮も受けない異教徒め。

軍樂隊が鳴り響き、最初の部隊が廣場を横切り始めた。ペトリューラの立つてゐるところまで來ると兵士たちは取つて付けたやうに「榮譽あれ」とがなり立て、やがて鋪道を折れて横町に入つて行つた。新しいカーキー色の服裝をした各中隊の先頭にはコサツク頭目たちが散歩でもしてゐるよ

うに、小杖を打振りながら呑氣な恰好で歩いて行つた。この小杖を振つて行進することは、兵卒に柵杖を喰はすのと同様、近衛兵たちが最初に流行らせた。

後尾にくつついて、動員されてきた連中が歩調をみだし、互にぶつかり合ひながら、バラ／＼と歩いて行つた。

跣足なので足音はひつそりしてゐた。頭目たちは大童になつて秩序を保たうとしたが、そんなことは不可能だつた。第二中隊が近づいて來たとき、右翼の面にゐた布製シャツを着た一人の若者がポカンと口をあけて大頭梁を眺めてゐたが、窪みに片足を突込んだ拍子にハズミを喰つて鋪道の上にドオとばかりにぶつ倒れた。

銃が高い響きをたて、石の上に轉つた。若者は懸命に起上らうと努めたが、後からきたものにくまた打倒されてしまつた。

觀衆の間に大きな笑ひ聲がきこえた。小隊は隊伍をみだした。後はてんでんバラ／＼に廣場を通つて行つた。しくじつた若者は銃を拾ひあげると仲間の後を追つかけて行つた。

ペトリューラはこの不愉快な光景を見まいと脇の方に身を向け、縦隊行進の終るのも待たずに自動車の方に歩いて行つた。總監はその後を追ひながら恐る／＼尋ねた、

——午餐にお止り願へませんでせうか、頭梁閣下？



——いや、——ぶつきら棒にベトリューラが投げつけた。

教會の高い圍ひごしに閱兵式を見てゐる群衆に交つて、セリョージャ・ブルジャック、ワーリヤ、クリムカの三人も見物してゐた。

セリョージャは柵の鐵棒をしつかり両手で握りしめ、憎惡にあふれるやうな眼差しで、下に立つてゐる人々の顔に見入つてゐた。

——行かう、ワーリヤ、店じまひだ、——かれは鐵柵から離れながら、みんなに聞えよがしに大聲で挑むやうに云つた。みんなは吃驚りしてセリョージャの方を振り返つた。

かれは誰にも眼もくれずに潜り戸の方に歩いて行つた。姉さんとクリムカがそれに續いた。

司令部まで乗りつけたチェルニャックと副官とは馬から飛び下りた。傳令に馬を引渡すと二人は足早やに哨舎に入つて行つた。

——司令官はどこにゐる？——チェルニャックが激しく傳令にきいた。

——知りやせん、——かれはもぐ／＼云つた、——どつかに出掛けやしたぜ。

チェルニャックは穢らしい亂雜を極めた哨舎を眺めまはした。ばら／＼の寢床の上にだらけきつ

て横になつてゐた司令部づきのコサック兵どもは頭目が入つて來たのを見ても起上らうともしなかつた。

——なんてえぎまだ、まるで畜生小屋だ、——チェルニャックが吼え立てた。——お前たちはなにをゴロ／＼してるんだ、豚の子ぢやあるまいし？——かれは横になつてゐる連中に飛び掛つた。

コサック兵の一人が起き上がり、たら／＼喰ひすぎたのか、ゲップをしてから、愛想もない調子で吠えるやうに云つた、

——なにをガ／＼云つてるんだね？ かなり屋ならおれ達んどこにもゐるぜ。

——なんだとオ？——チェルニャックは走りよつた。——だれと話してると思ふんだ、牛ッ面め。

おれはチェルニャック聯隊長だ！ 判つたか、ちんころ？ キリ／＼立たんと、柵杖のお見舞ひだぞ！——カン／＼になつた聯隊長は哨舎の中をかけめぐつた。——一分間の猶豫を與へるから、汚れたものをすつかり掃きだし、寢床を片づけ、人間らしい面つきを拵へ上げるんだ。だれに似てると思ふ、貴様ら？ コサック兵どころか、大道に出没する強賊だぞ。

かれの激怒には際限がなかつた。かれは氣狂ひのやうになつて道ばたにおいてあつたスूपの汁入れを足蹴にした。

副官もかれに負けてはなるものと矢鱈に顔の赤くなるやうな悪口を吐き散らし、威張りくさつ



て三つに先の割れた鞭繩を振りまはしながら懶けものを寝臺から逐ひだした。

——大頭梁アケビが閱兵式をして居られるんだ。こつちにやつて來られるかも知れんぞ。サッサと動け！

事態は冗談ごとでなくなつて來て、實際柵杖のご馳走を頂戴しなければならぬと見てとつたコサック兵たちは熱湯をぶつかけられたやうに走り廻りはじめた。チュルニヤックの名前はみんな知り過ぎるほど知つてゐた。

仕事が湧き立つた。

——監禁者を見てみなければならぬのだが、——副官が提案した、——どんな奴らが捕つてゐるのか知つてるものはないか？ 親分が覗いてみたら祿でもねえ奴ばかり入つてゐたつてえ事が起らないでもねえからな。

——だれが鍵を持つとる？——チュルニヤックは歩哨に尋ねた。——すぐに開ける。

古參兵があはて、馳せよつて、錠をはづした。

——ときに、司令官はどこに居るのだ？ え、長いこと待つてゐるとでも思ふのか、このおれが？ 早速見付けたしてこゝに送りつける、——チュルニヤックが命令を發した、——警備隊を中庭に引ツぱり出して、チャンと整列させるんだ、——なんだつて銃劍をつけてないのか？

——昨日交替したばかりでありまして、——古參兵が辯解した。かれは司令官を探しに扉口に飛んで行つた。

副官は片足で倉庫の扉を蹴飛した。床から僅かに起立つたものも少しは居たが、残りのものは横になつた儘でゐた。

——扉をみんな開ける、——チュルニヤックが命令した、——こゝは暗くていかん。

かれは監禁者の顔を覗きこんだ。

——なんで入れられたんだ？——床の上に坐つてゐた爺さんに鋭く尋ねた。

爺さんは起上つてズボンを引き締めてから、激しい叫び聲にびつくりしたのか、少しどもり乍ら、もぐもぐ云つた。

——わしゝ自分でも知らねえんで、ぶち込まれたから坐つてゐるやうなもんでさあ。馬が一匹、中庭から見えなくなつたてえんだが、そんなこたゝわしの罪ぢやござんせんよ。

——だれの馬だ？——副官が口をはさんだ。

——へえ、お上かみんで。わしが部屋を借しといた奴らが馬を飲んちまつたんだに、こちらが尻ぬぐひさせられてる始末でさ、

チュルニヤックは我慢できなさうに肩をすぼめ、爺さんを頭の天邊から足の爪先きまですばやく



見まはした。

——自分の外套を持つて……トットと出て行け！——かれはウォッカ造りの方に向き直りながら、さう怒鳴つた。

爺さんは放免して貰へるのだとは直ぐには信じられなかつた、で副官の方を向いてしよぼくした眼をパチクリさせた。

——んちや、わしは出て行つていゝんでござんすかい？

こちらは頷いて見せた、——出て失せろ、出て失せろ、トットと。

爺さんは板寢床に結びつけた自分の麥粉入りの袋をそくさとはどくと、樽のやうに扉口にすつ飛んで行つた。

——お前はなんでくらつてるんだ？——チェルニヤックはもうウォッカ造りを取調べてゐた。女は食ひかけの肉饅頭をムシヤ／＼やりながら喋くりだした。

——あたしをぶち込むなんて、こんな不公平な話はござんせんよ、上官さん。あたしはやもめ暮しをしてゐるもんでござえますが、自分でこしらつたウォッカを飲まれちまつた揚句の果てが、まあ入つて居ると、かうですからね。

——でなにか、密造ウォッカを商賣にしとるんか？——チェルニヤックが尋ねた。

——商賣どころちやござんせんよ——おかみさんは憤慨した、——司令官さんと來たら四本も持つてつた癖して、鏢一文だつて拂つちや下さらねえだ。つまりそれだけのことでがさ、ウォッカは飲む、お鳥目は拂はねえ。一體これが商賣ちうもんでござんすかい？

——もう澤山だ、どこへなと勝手に失せやがれ。

おかみさんは命令をもう一度くり返されることもなく、バスケットを引提んでありがたさうに頭を下げ／＼、扉口に後しがりして行つた。

——神様のお恵みでおたつしやにお暮しなせえますやう、上官様がた。

ドリンニックは眼を見開いてこの茶番を見てゐた。一體どうしたのか、わけの判つたものは監禁者の中に一人も居なかつた。たゞこの事だけは、はつきりして居た。監禁者を自由にする權能を持つたどこかの上官がやつて來たのだ。

——お前はどうした？——チェルニヤックがドリンニックに向つて云つた。

——立てッ、聯隊長閣下だ！——副官がどなつた。

ドリンニックはのろ／＼と退儀さうに床から立上つた。

——なんで入れられとるのか、あゝ？——チェルニヤックは問ひを繰り返した。

ドリンニックは數秒間、聯隊長の捻り上げられた口髭、すべ／＼に剃り上げた顔、つゞいてエナ



ネル塗りの三叉槍のついた新しい「ケレンスキイ」帽の庇に眼をやつてゐたが、突然ふら／＼するやうな考が閃いた。「もしかして出れるかも知れない？」

——夜の八時すぎに町を歩いてたもんですから、捕へられました、——かれは口から出まかせを云つた。

堪らない想ひで身體中緊張させながら今やおそしと様子を見てゐた。

——夜中にぶらつくのか、お前は？

——いえ、夜中ちありません、十一時頃です。

さうは云つたものゝ、まさか甘く行かうとは思ひもかけなかつた。

——行け

とあつさりした言葉を耳にした時には兩膝が打慄へた。

ドリンニックは上衣も忘れたまゝ、扉口に向つて歩いて行つた。だが副官はもう次の番を問ひたゞしてゐた。

コルチャーギンはどん終ひだつた。かれは眼の前で見たすべての出来事にたゞ茫然として床の上に坐つてゐた、そしてドリンニックが釋放されたのを見きはめる豫裕さへなかつた。かれはそこで起つてゐる事柄を理解することが出来なかつた。誰も彼も釋放される。だが、ドリンニックが、ドリンニ

ックが……かれは夜歩きをして捕つたと云つたのだ……やつとの事でかれはそのことを理解した。

聯隊長は例の調子で、ヒョロ／＼のゼリツェルを訊問し始めた。

——なんで入れられとるのか？

興奮して眞蒼な顔をした床屋は烈しい調子でこたへた。

——わしは煽動をやつたと云はれとるんですが、なにが煽動なのかわしには判りませんやうな始末でして。

チェルニヤックは緊張した。

——なんだ？ 煽動だ？！ なんの煽動をやるといふのか？

ゼリツェルは當惑した様子で両手をひろげた、

——存じません、たゞユダヤ人仲間から大頭梁アタゴにさし出す歎願書の署名を集めてゐると申しましただけなんでして。

——なんの歎願書だ？——副官とチェルニヤックとがゼリツェルに詰めよつた。

——掠奪をやめて頂きたいといふ歎願書でございますよ。御存知でがせうが、わたくし共は恐ろしい掠奪にあひましたもので、仲間のものがビク／＼して居ります次第で。

——わかつた、——チェルニヤックがかれを遮つた、——歎願書はこつちで書いてやる、なんだ



ジュウ面しやがつて。——そして副官の方を向いて吐き出すやうに云つた。——この水菓子、はもつと奥の方にしまひ込んで置かんけりや。本部に引張つてけ。向ふでわしが奴と二人きりで話しをつけることにしよう、だれが歎願書を出さうとしてゐるのか判るだらう。

ゼリツェルは懸命に抗辯した、しかし副官は片手で激しく鞭を振つて、かれの背中をどやしつけた。

——だまれ、斃りぞこなひ！

苦痛に顔をしかめたゼリツェルは片隅に退いた。かれは唇をうち振はせながら、せきあげて来る咽び泣きを辛うじて耐へてゐた。

どん詰りの場に来て、コルチャーギンは立上つた。監禁されてゐたもので倉庫の中に残つてゐるのはかれとゼリツェルきりだつた。

チェルニャツクは若者の前に立ち塞つて、その黒眼をパチクリさせた。

——おい、お前はなんだつてこゝにゐるんだ？

聯隊長は自分の質問に對して鸚鵡返しに返事するのを耳にした、

——鞍の端つこを切りとつたです、靴底にしやうと思つて。

——鞍の？——聯隊長には呑み込めなかつた。

——うちにコサツク兵が二人泊つてゐるんだけど、僕、靴底にしやうと思つて舊い鞍の端つこを切りとつたんです、だもんで僕、コサツク兵にこゝへ連れて來られちまつたんです。——そして自由な身になれるのだといふ氣も狂ひさうな望みで一杯になりながら附け足した、——僕、いけないと知つてゐたら……

聯隊長は輕蔑するやうにコルチャーギンを眺めた。

——一體司令官の奴、なにをしてゐたんだか判つたもんぢあないよ、犯人をかき集めたには違ひなからうがな！——そして扉口の方を向いて怒鳴り立てた、——家に歸つてもよろし、それからおとつあんに頼んで、いゝ具合にぶん殴つて貰え。さあ、おツ放しだ！

我れながら信じられないやうな氣持のコルチャーギンは、今にも胸下から跳び出すかと思はれるほど心臓をどきつかせ乍ら、床の上に投げ出してあつたドリニックの上衣をひつ捉むと扉口に向つてすつ飛んで行つた。哨舎を疾せすぎ、中から出てきたチェルニャツクの背後を通つて中庭へ、そこから潜り戸へ、通りへと滑りてた。

倉庫には不仕合せなゼリツェルがしよんぼりと取残されてゐた。かれは耐え切れない淋しさに邊りを見まはし、思はず出口の方に二三歩いて行つたが、歩哨が哨舎に入つてきて扉を閉め、錠をおろし、扉口の傍に置かれてゐる足臺の上に腰を下した。



玄關の段々のところで、チェルニャックは御氣嫌の様子で副官に向つて云つた、

——覗いて見てよかつたよ。どうだ、祿でもなしのうよく／＼してゐたこと。司令官の奴、二週間もぶち込んでくれるか。ちあ、出發するかな。

中庭では古參兵がその部隊を整列させてゐた。かれは聯隊長を見るや馳けよつて來て、報告した。

——萬事異常ありません、聯隊長殿。

チェルニャックは鎧に片足をかけてヒラリと鞍に跳び乗つた。副官は馴れ／＼しくしてくる馬の相手になつてゐた。手綱を拾ひあげながら、チェルニャックは古參兵に云つた。

——司令官にこう云つてくれ、奴がこゝに詰込んでおいたがらくたは全部おつ放してやつたとな、こゝでやらかしたことの責任として、奴を二週間ぶち込んでくれるからと傳へておけ。それからあそこに投り込んである奴はすぐ本部に移すんだ。歩哨の用意をしろ。——古參兵が敬禮をした。

聯隊長と副官の二人は、馬に拍車をくるともう閱兵式も終つてゐる廣場めがけてギャロップで疾驅して行つた。

七つ目の柵を跳びこゑるとコルチャーギンは立止つた。それ以上馳ける力もなかつた。

息苦しい風通しの悪い倉庫の數日間にかれはへト／＼になつた。家に戻ることは出来ない、さうかと云つてブルジャックのところに行けば、——誰かに知られたが最後一家中か滅茶々にされてしまふだらう。ちあどこへ行つたらよいのだ？

どうしていゝやら判らなかつたかれは野菜畑や、方々の屋敷の裏庭を後にして馳けて行つた。だれかの家の圍ひに胸をぶつけたとき、漸く我れに歸つた。

よく／＼見ると茫然としてしまつた。——高い板を張りまはした柵のかなたには營林所長の庭が始つてゐた。疲れに疲れ切つた脚はかれを何といふところに運んで來たことだらう。かれは此處に疾せつけやうと思つてでもゐたのだらうか？ いや。

しかしどうして又突然營林所長の屋敷のそばに出たのだらう？

それに答へることは出来なかつた。

どこかで一息ついて、その上でこれからの身の振り方を考へねばならない。庭には木造りのあづまやがある。あそこならだれにも見付かることはあるまい。

コルチャーギンははね上つて、板の外れに片手をかけ柵の上によち登り、やがて庭にとび落りた。樹蔭に微かに見える家の方を眺めてから、かれはあづまやに向つた。殆ど四方が開けッ放しに



なつてゐた。夏は野葡萄がからみ付いてゐたが、今はなにもかも丸裸だつた。

柵の方に向きを換へて見た時にはもう遅かつた。かれの背後には、狂氣のやうに犬の吠え立てるのが聞えた。家の方から落葉の撒き散らかされた小徑傳ひに一匹の犬がもの凄いいなり聲を庭中に響かせながらかれを目掛けて馳けよつて來た。

パーヴェルは身がまへした。

最初に襲ひ掛つてきたときは足蹴にして撃退した。しかし犬は又々飛び掛らうとする氣配を見せた。この争ひのおさまりがどうなるかと氣遣はれた折も折、パーヴェルには聞き覚えのあるよく響く聲が叫んだ。

——トゥレゾール、おどき！

トーニャが小徑を走つてきた。頸輪をひつ捉んでトゥレゾールを引離してから、かの女は柵の傍らに突立つてゐるパーヴェルに向つて云つた、

——なんだつてこゝに入つていらしたんですの？ 犬に咬みつかれるところだつたちありませんか。わたしがなんだからよかつたですけど……

かの女は口籠つた。かの女の眼は大きく押し擴げられた。知らない間に此處にまぎこんで來たこの若者はまあなんとコルチャーギンに似てゐることだらう！

柵際の人影は身動きし、小聲で云つた、

——判るかい、判りますか、ぼくが？

トーニャは叫び聲を立て、いきなりコルチャーギンの方に歩み寄つた。

——パヴルーシヤ、あんただつたのね？

叫び聲を聞いてトゥレゾールは飛び掛れといふ合圖だと思ひ込んで矢庭にひとつ跳びに前へ飛び出した。

——お行きつたら！

トーニャから二つ三つ拳固を頂戴したトゥレゾールは無念さうに尻尾を卷いて、屋敷の方へこそく歩み去つた。

トーニャはコルチャーギンの両手を握りしめながら口を切つた、

——自由の身になつたの？

——知つてゐるのかい、そんなこと？

わくわくした想ひを鎮めることの出來ないまゝに、トーニャは激しく答へた、

——あたし何もかも知つてゐるわ、リーザが話して呉れたの、でも一體どうして此處にこれたのよ？ 釋放されたの、あんた？



コルチャーギンは疲れた様子で答へた。

——間違つて釋放されたんだ。逃げて来たんだ。今頃はきつとおれを探してゐるに違ひない。思ひ掛けなくこゝにやつて来たもんだから、あづまやで休まして貰はうと思つてね、——さう云つてから詫びるやうに附け加へた、——とても疲れてしまつた。

かの女は暫くの間かれを打眺めてゐるが、やがて憐れみと燃えるやうないとしき、胸騒ぎと歡喜の情にごつちやになつてかれの手を握りしめた。

——パヴルーシャ、かわいゝゝパフカ……きつても切れない、いゝ人……あたし、あんたを愛してるわ……判つてる……あたしの頑固坊ちゃん、どうしてあん時、歸つちまつたの？　これから家にいらつしやい、あたしんとこに。どんなことがあつたつて放しやしないわ。うちは靜かだから居たい放題泊つてればいゝわ。

コルチャーギンは拒むやうに頭を振つた。

——もし君んここで見付つたが最後、どんなことになると思ふ？　出来ないよ、そんなこと。手は一段と強く一本一本の指を締めつけ、睫毛はうち慄へ、眼はキラ／＼光つた。

——もし來ないのなら、あたしの顔を見るのももうこれつ切りよ。アルチョムだつて居ないぢあないの、警備兵づきで機關車に乗せられちまつて。鐵道従業員は一人残らず動員されてゐるわ。

一體どこに行くつもりなの、あんたは？

コルチャーギンにはかの女の氣遣ひが判つた。しかし、いとしい乙女を危険に曝らしはすまいかと案ずる氣持ちがかれを押止めた。すべての過ぎ經て來た事柄が疲れを呼びおこした。休息しなかつた、飢ゑに惱された。かれは降参した。

かれがトニーヤの部屋のソファに腰を下したる間に、臺處では母と娘の間に話が取替はされてゐた。

——ねえ、お母さん。今、あたしの部屋にコルチャーギンが來てゐるの、覚えてゝ？　あたしの生徒さんよ。なにもかも隠さずに云つてしまふわ。あの人、あるポルシェヴィキの水兵を逃がしてやつたことで捕つてゐたの。逃げて來ただけど、隠れ家がないのよ。——かの女の聲はうち慄へた、——お願ひだから、お母さん、うんと云つて頂戴、これから家に泊つてゐてもいゝでせう？　娘の眼は嘆願するやうに母親を見つめた。

母親は探るやうにトニーヤの眼を眺めた。

——よろしい、反對はしませんよ。でも、どこに寢床をとつてあげるつもりだね？

トニーヤは眞赤になり、興奮しながらおづ／＼答へた。

——あたしの部屋のソファの上にとつてあげるわ。お父さんには當分云はなくつてもよかあない



こと？

母親はちつとトーニヤの眼を見つめた。

——お前さんが泣いてたわけはこれだったのかい？

——えい。

——またほんの子供ぢやないの、あの子は。

トーニヤはいらくしてブルーズの裾を摘んだ。

——そりやさうだけど、もし逃げ出して来なかつたら、大人同様銃殺されるところだったのよ。

エカチェリーナ・ミハイロヴナはコルチャーギンが家にゐるといふことでおどくしてゐた。かれが逮捕されたといふこと、トーニヤがこの少年に對して疑ひもなく同情を注いでゐること、そして又かれの素性を一向に知らなかつたといふことが、かの女を不安にした。

だがトーニヤはこまかくした心配に捉へられた。

——お湯に入れてあげなけりや駄目だわ、お母さん。あたし、すぐ用意をさせよう。本物の火夫見たひに眞黒けなの。随分永いこと、身體を洗はなかつたんですもん、あの人。

かの女はあくせく走り廻つて、風呂を焚きつけたり、下着の用意をしたりした。そしていきなり飛んで行くと、わけも話さずにパーヴェルの兩手を捉んで風呂場に引張つて行つた。

——何もかも脱いぢまはなけりや駄目よ。そら、そこに着物があるでせう。あんたの着てるものは洗濯しなけりや。ほら、これを着るんですよ、——かの女はさう云ひながら机の方を指さした、そこには縞入りの白い襟のついた青い水兵服とダブくのズボンとがきちんと置かれてゐた。パーヴェルは不思議さうに眺め廻した。トーニヤはにつこり笑つた。

——これ、あたしの假裝舞踏會の衣裳。あんたによく似合ふわ、きつと。ちあ、いゝ具合にやつて頂戴、一人きりにしておくから。あんたがお湯あびてる中に、ごほんの仕度をしとくわ。

かの女はボタンと扉を閉めた。どうもこうもなかつた。コルチャーギンはそゝくさと着物を脱いで湯ぶねにつかつた。

一時間の後には——母親と娘とコルチャーギンの三人揃つて臺處で御飯をたべてゐた。

ペコ／＼に腹が減つてゐたパーヴェルはいつの間にか三番目の皿を空にしてゐた。かれは最初の中はエカチェリーナ・ミハイロヴナに遠慮してゐたが、やがてかの女の心おきない態度を見て平氣になつてしまつた。

食べ終つてからトーニヤの部屋に集つたとき、パーヴェルはエカチェリーナ・ミハイロヴナに懇望されて自分の経てきた苦難を話してきかせた。

——これから先、どうするお積りですの？——エカチェリーナ・ミハイロヴナが尋ねた。



パーヴェルは考へ込んだ。

——アルチョムに一眼會ひたいんです。その後でこゝから逃げ出します。

——どこへ？

——ウマニへこつそり行くつもりです。でなけりやキエフへでも。自分でもまだ判らないんだけど、どんなことがあつてもこゝから逃げ出さなけりや。

パーヴェルはこのやうな目ま狂ほしい變りやうを信じていることが出来なかつた。まだ今朝までは食料品倉庫にゐたのに、今ではトーニャと並んで坐つてゐる、着物はさつぱりとしてゐるし、そして何よりも——自由。

見よ、しばし／＼轉變する生活のなんと極らないことよ、——あやめも別たぬ闇かと思れば、再び陽光が微笑みかける。この上逮捕される心配さへ迫つてなければ、かれは今仕合はせな若者であつたらうに。

しかししたつた今、こゝにゐる間にも、この大きな静かな家にゐる間にも、かれは襲撃されるかも知れないのだつた。

どこへなりと立去らなければならぬ、たゞこゝに止つてゐることだけは……

だがどうしてもこゝからは立去りたくないのだ、畜生！ 英雄ガリバルヂイの物語りを讀んだと

きはどんなに面白かつたことだらう、どんなにかれを羨しく思つたことだらう、だがそのガリバルヂイは苦しい生活をしてゐたのではないか、至る處から逐ひ出されてゐたのではないか。ところが、かれパーヴェルはたつた七日ほどひどい苦しみを嘗めたきりなのに、まるで一年間も経つたやうな氣でゐるのだ。

どうやら、かれパフカは大した英雄になれさうにもない。

——なにを考へてるの？——かれの上に身を屈めてトーニャが尋ねた。濃い青色をしたかの女の眼はかれには底なしのやうに思はれた。

——トーニャ、フリスチンカの話をしやうか……

——して頂戴、——かの女は元氣づいて云つた。

——……そして、それつきり戻つては來なかつた。——かれはやつとの想ひで最後の言葉を云ひ終つた。

部屋の中では時計のコチ／＼云ふ音が聞えてゐた。トーニャは頂垂れて、今にも泣き出しさうな様子をしながら、いやと云ふほど唇を噛みしめてゐた。

パーヴェルはかの女を眺めた。

——こゝから出て行かなければならない、それも今日の中に、——パーヴェルはきつぱりと云ひ



放った。

——だめ、だめ、今日はどこにも行かせはしないわ！

かの女のほつそりした柔い指がかれの云ふことを聞かぬ髪の毛をそつと取上げ、愛撫するやうに引張った……

——トニーヤ、僕の手助けをしてくれ。機関庫に行つてアルチョムの様子を聞かなければならぬ。いんだ。それからセリョーシカに書いたものを渡して欲しいんだ。うちの鳥の巢の中にピストルが入れてあるんだよ。自分で行くことは出来ないから、セリョーシヤにそいつを手に入れさせなくちや、やつてくれるかい？

トニーヤは立上つた。

——これからスハリコのとこに行つて、リーザをさそつて機関庫まで行つてくるわ。渡すものを書いて頂戴、セリョーシカに届けてあげるから。どこに住んでるの、その人？ で、もしもやつて来るつて云つたら、どこに居るつて云ひませう、あんた？

考へてからパーヴェルは答へた、

——夕方、自分で庭に持つて來させてくれ。

トニーヤは遅くなつて家に戻つて來た。パーヴェルはぐつすり寝込んでゐた。かの女が手を觸れ

ると眼を覺した。トニーヤは嬉しさうに微笑んだ。

——アルチョムは直ぐ來るつて。今しがた着いたばかりだつたの。リーザのお父さんが證人に立つて、一時間だけ自由にして貰つたわけなの。機関車が車庫に待つてるのよ。あたし、あんたが此處に居るつてこと、云はなかつたわ。あるとても大事な言傳つてがあるからつて云つといたんだけど。ほら、やつて來た！

トニーヤは扉口に馳けつけて行つた。自分の眼を信じられないかのやうにアルチョムは釘づけにされて扉口に立止つた。トニーヤはチブスを思つて書齋に寝てゐる父親に聞かれまいとして、かれの背後から扉を閉めた。

アルチョムが兩腕でパーヴェルを抱きかゝると、骨がメキ／＼鳴つた。

——兄弟！ パフカ！

話はきまつた。パーヴェルは明日出發することになつた、アルチョムがブルジャックに頼んでカザチン行きの機關車にかれを乗込ませることにした。

ふだんは亂暴なアルチョムも、測り知れない弟の運命を氣遣つてそわ／＼してゐた。今やかかれは



この上もなく幸福だった。

——ちや、朝の五時に材料置場にやつて来るんだぞ。薪を機關車に積みこむから、そんな時一緒に乗込んちまへ。話して行きてえんだが、歸える時間だ。明日送りに行くからな。おれ達は鐵道大隊に編制されるんだ。ドイツ軍に占領された時も同じことで、警備兵づきで動いてゐる始末さ。

アルチョムは別れを告げて出て行つた。

見る／＼黄昏が蔽ひかぶさつて來た。セリョージャは庭の圍ひのところまでやつて來ることになつてゐた。コルチャーギンは待ちわびて、薄暗い部屋の中を隅から隅へと歩き廻つた。トニーヤと母親とはトゥマーノフのところに行つた。

セリョージャと暗闇の中で出會はすと互にしつかと手を握り合つた。ワーリヤも一緒にやつて來た。三人は小聲で話し合つた。

——ピストルは持つて來なかつたよ。お前んとこの中庭にヤペトリューラの兵隊がわんさと居やがるんだ。荷馬車が並んでる上に、あちこちで火を焚いてやがるもんだから、どうしても樹によち登ることが出來なかつた。しくじつたよ、全く。——セリョージャが辯解した。

——あんなもんはどうでもいゝさ、——パーヴェルはかれを慰めた。——その方が良かったかも知んねえ。途中で見付け出されて、頭をチョン切られねえとも限らねえからな。だが、おめえは手

に入れておけよ、屹度だぞ。

ワーリヤはかれの方に身を寄せた。

——いつ出發つ、あんな？

——明日だよ、ワーリヤ、夜が明けきらねえ中に。

——でも、どうして抜け出して來られたの？ 話してきかせてよ！

パーヴェルは口早やに小聲で、自分の苦難を話してきかせた。

三人は想ひをこめて別れを惜んだ。セリョージャは冗談も云はず、興奮してゐた。

——道中氣をつけてね、パーヴェル、あたし達のことを忘れちやいやよ、——ワーリヤはやつとの想ひで云つてのけた。

後姿はすぐさま闇の中に融け込んでしまつた。

家の中はひつそりしてゐた。たゞ時計だけがはつきりと足音を刻みながら、歩みを運んでゐる。二人とも眠らうなど、云ふ考へは起らなかつた。あと六時間たてば別れなければならないのだ、そしてこれが永遠の別れとなるかも知れないのではないか。二人が自分の中に抱いてゐるあの山のやうな考へや言葉をこの僅かな間に語り盡すことがどうして出来るだらうか？

青春よ、たゞ心臓の激しい鼓動の中に漠然としたものが感じられるだけで、未だ情慾を知らず、



思はずも友の胸にうち觸れた手を愕き慄へて脇に外らし、若々しい友情が最後の一步を禦つてゐる限りなく麗しい青春よ！ 頸下を抱きしめた愛するものゝ腕ほど、——さながら電流に打たれる想ひの灼きつくやうな接吻ほどいとしいものが又とあるだらうか。

仲よしになつてから、これが二度目の接吻だつた。コルチャーギンは母親の外にはだれ一人可愛いがつてくれたものがないばかりか、却て散々殴られ通してきた。それだけに一しほ強く愛撫の情を感じた。

ぶちのめされた酷い人生にこのやうな悦びがあらうとは！ 人生の行路で行き逢つたこの乙女は——大きな幸福だつた。

かれは娘の髪の毛の香りを感じ、そしてその眼を見てゐるやうに思はれた。

——ぼくはきみが好きで堪らないんだ、トーニャ。口で話すことが出来ないくらゐ。

かれの想ひはとぎれ／＼になる。なんとなく／＼した柔い身體……だが青春の友愛はすべてのものゝ上に聳えてゐる。

——トーニャ、ごたく／＼が治つたら、ぼくはきつと機械工になるんだ。きみさへ厭でなかつたら、きみが本當に眞面目で、遊び半分にしてるんぢあなかつたら、ぼく、きみのいゝ旦那さんになつて見せるよ。どんなことがあつたつて、殴つたりなんかするもんか、もしなんか氣に障るやうなことをしたら、命でもなんでもあげる。

そして、相抱いて眠り込んでしまつたところを母親に見られでもして誤解されてはと氣遣つて、

二人は離れ／＼になつた。

忘れないで、忘れるものかと互に堅く誓ひ合つて眠りに入つたときには、夜はもうほの／＼と明けそめてゐた。

朝早くエカチェリーナ・ミハイロヴナがコルチャーギンを揺り起した。

大急ぎでじめ／＼した朝霧の中を停車場に向つた。廻り路をして薪倉に近寄つて行つた。薪を山と積み込んだ機關車の傍らで、アルチョムは今か／＼とかれらのやつて來るのを待ち疲れてゐた。遅しい機關車「かます」號がシュウ／＼音立てゝゐる蒸氣の球に圍まれながら、ゆつくり近づいて來た。

機關車のキャビンの窓からブルジャックが顔を出してゐた。

手早く別れを交はした。機關車の昇降口にある鐵の手摺りをしつかと握りしめた。上によち登つた。振り返つて見た。

踏切りのところに、よく見知つた二つの人影が立つてゐた、アルチョムのヌックとした影の傍らにトーニャのきちんとした小さな影が並んでゐる。



風が怒氣を含んで女のブルーズの襟を摘みあげ、栗色をした髪の毛の房をはたくと敲いた。かの女は手を打振った。

アルチョムは咽びあげて来るのを堪へてゐるトニーヤの方を横眼で見て嘆息をついた。

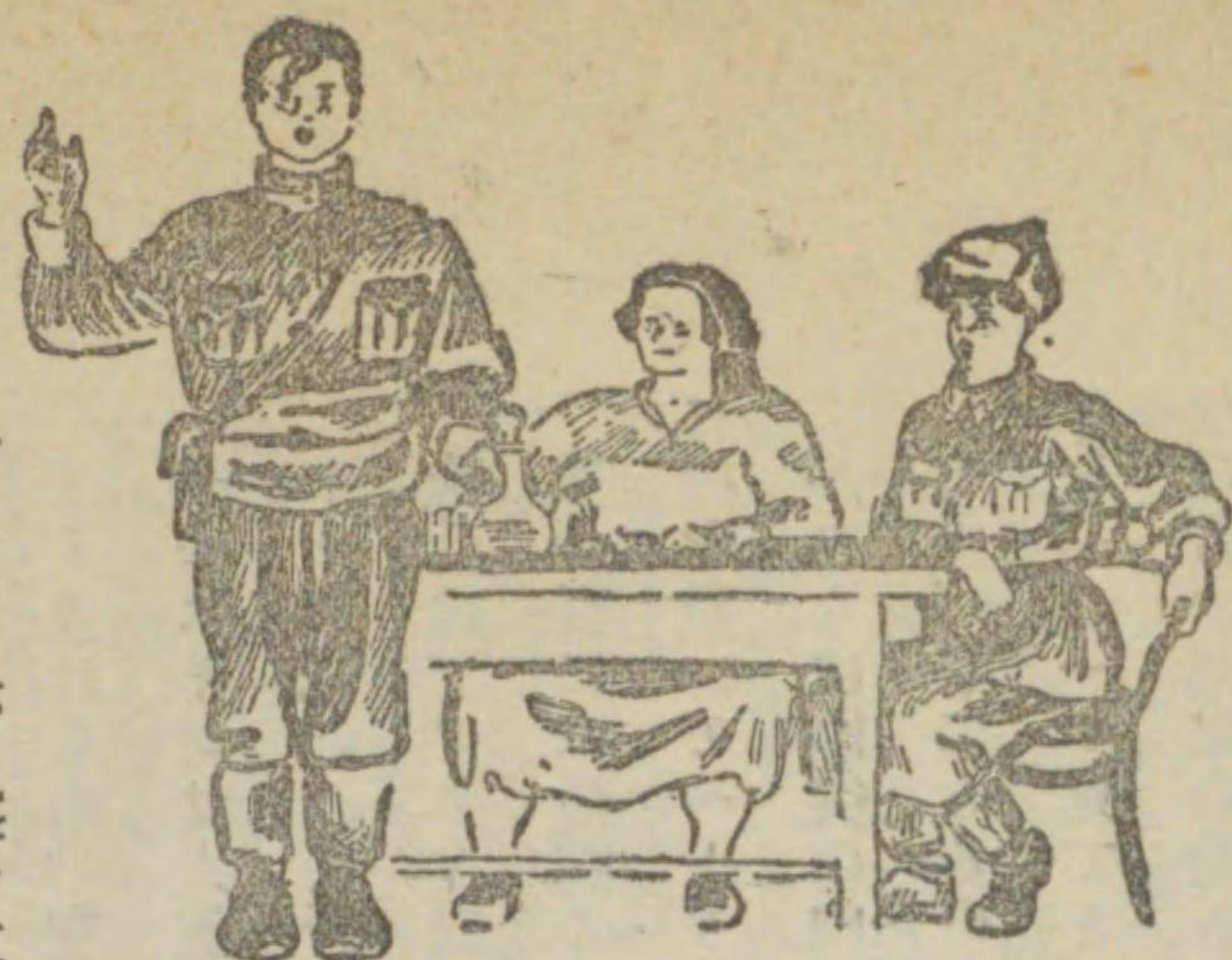
——おれがとつともねえ馬鹿か、この女のねぢが緩んでゐるか、二つに一つだ。えーい、パーヴ  
エルの奴！ 隅におけねえ野郎だ！

列車が曲り角を曲つてしまふと、アルチョムはトニーヤの方に向き直つた、

——え、どうだ、お仲間にならうぢやないか ——そして、かれのでかい手の中にトニーヤの可愛らしい手が隠れた。

遠くから速力を増した列車の響きが傳つてきた。

## 第七章



町は塹壕で取まかれ、鐵條網を蜘蛛の巣のやうに絡みつけられて丸一週間といふもの、大砲の嘆息と互に撃ちあふ銃聲の下で眼を覺ましてはまた眠りについた。たゞ眞夜中だけは静かになつた。時たま、遠てふためいた一齊射撃の音が静寂を破つた、秘密の探り合ひをしてゐるのだつた。だが夜明け時になると停車場の砲臺の傍らでは人影が蠢きはじめた。大砲の眞黒な口は忌々しげに物凄く咳をした。人々は大急ぎで新しい鉛の御馳走をした。砲手が繩を引張ると大砲は身慄ひした。赤軍が占領してゐる町から三露里離れた村の上を砲弾はシューシューと唸り聲を立て、邊りの騒音を打消しながら飛んで行き、それが墜落すると爆破された土塊がパツと舞ひ上つた。

赤軍の砲臺は古ぼけたポーランド僧院の中庭に置かれてゐた。僧院は村の眞中の小高い丘の上に立つてゐた。

砲兵隊軍事委員同志ザモスキンは飛び起きた。かれは大砲の砲架尾に頭をのせて眠つてゐた。重



たいモッセル銃を吊した革條をギョッと締めつけ、飛んで来る砲弾に耳を傾けながら、爆發するのを待つてゐた。かれのかん高い聲が中庭ちうに響き渡つた。

——明日またゆつくり寝ることにしやうぜ、同志諸君。起——き——ろッ！

砲兵隊員たちはやはりその大砲の傍らで眠つてゐた。かれらも軍事委員同様すばやく跳ね起きた。たゞ一人、シドルチュークだけがのろ／＼してゐた、かれはいや／＼眠さうな頭をもたげた。

——虫けらめ、夜が明けるか明けねえ中からもうがなり立て／＼けつかる。仕様のねえ手合だ！  
ザモスキンは大聲に笑つた。

——自覺のねえ野郎どもだよ、シドルチューク。お前のねむたいのを勘定に入れねえなんてな。砲兵はブツ／＼云ひながら起き上つた。

數分後には僧院の中庭に砲聲が殷々と轟き、町には砲弾が裂け散つてゐた。砂糖工場の乾燥煙突に板を敷いてペトリューラ軍の士官と電信係とが足場をつくつてゐた。

かれらは煙突の内部を通じてゐる鐵の階段をよじ登つて行つた。

町中が手にとるやうに見えた。こゝからかれらは砲兵の射撃を指揮した。町を包圍した赤軍の動きを一つ一つ見てとることが出来た。今日はポリシェヴィキ共はひどく活氣づいてゐる。望遠鏡には彼らの部隊の動きが見える。鐵路に沿つて一臺の装甲列車が絶え間なく砲弾を浴びせかけながら、

のろ／＼とポドリスキイ停車場めがけて動いてゐた。その背後には歩兵が散兵線を敷いてゐるのが見えた。數回に渡つて赤軍は町を手に入れやうとして突撃して來たが、近衛兵はが／＼と地下近接作業をかため、塹壕を張りめぐらしてゐた。そして塹壕と云ふ塹壕から旋風のやうな火が湧き立つた。あたり一面は氣狂ひの冗舌のやうに轟しい銃聲で満たされた。襲撃の瞬間になると冗舌は極度の緊張を來し、ひつきりない唸り聲に變つて行つた。鉛の驟雨を降り注がれたポリシェヴィキの散兵線は、人間業でない努力に耐え切れず、やがて動かなくなつた肉體を野面に取殘して後退して行つた。

今日は町をめがけて飛んで來る砲弾が次第に執拗に、數しげくなつてきた。大氣は砲撃にあつて不安げに揺れ動いた。工場の煙突の高みから見下すと、地にひれ臥し、蹴躓きながらも頑強に前へ前へと進んでくるボルシェヴィキの散兵線が眼に入つた。停車場は今少しでかれらの手に占領されさうになつてゐた。近衛兵はありつたけの豫備兵を一人残らず戦闘に参加させたが、それでも尙、停車場に生じた切れ目をつなぐわけには行かなかつた。捨身の勇を振つて、ボルシェヴィキの散兵線は停車場の通り、通りに雪崩れ込んで來た。

町外れの庭や野菜畑に最後の陣地を構へて、停車場を防備してゐた近衛狙撃兵第三聯隊のペトリュー兵は眞向からの物凄い打撃に撃退されて、バラ／＼と算を亂して町の方に退却して行つた。



思ひ返して立止る隙も與へず、赤軍の散兵線は銃剣を打振つて遮断哨所を一掃し、通りを占領してしまつた。

ブルジャックの家族は日頃仲よく附合つてゐた近所のもの達と一緒に地下室に隠れてゐたが、なんとしてもセリョージャを引止めることは出来なかつた。かれは上へ上へと曳摺られて行つた。母親の反對も耳にかけずにかれは冷えん／＼した穴藏から匍ひ出した。家の傍らを装甲自動車「射手」がガチャ／＼と音立て、八方を射撃しながら通り過ぎて行つた。その後から遽てふためいたペトリューラ兵が次から次へと隊伍を散らして走つて行つた。セリョージャの家の中庭に一人の近衛兵が馳け込んで來た。かれは遽りに罹つたやうに狼狽して、彈藥盒と鐵兜と銃とを投げすてるや、垣を跳び越えて野菜畑に身を隠した。セリョージャは通りを覗いて見やうと心に決めた。ペトリューラ兵たちが西南停車場めがけて通りを走つて行つた。装甲車がかれらの退却を掩護してゐた。町につゞいてゐる舗道はガランとしてゐた。と見るまに一人の赤軍兵士が通りに跳び出して來た。かれは地上にひれ臥して舗道の彼方を射撃した。かれに續いて第二、第三の兵士が……セリョージャが見てゐると、かれらは身を屈め、前進しながら射撃してゐた。肌襦袢の上に機關銃の革條をかけてゐる日焼けした支那人が赤ぼんだ眼を見開きながら、兩手に手榴彈を握りしめて臆するところなく馳せよつてくる。またまるで年若い一人の赤兵が一同の先頭に立つて、携帯用機關銃をかまへながら、突

貫して來る。これは町に突入して來た最初の赤軍部隊であつた。歡喜の情がセリョージャを捉へた。かれは舗道に躍り出して力の限り怒鳴つた、

——萬歲ッ！ 同志諸君！

不意を喰つた支那人は危くかれを打倒すところだつた。かれは凄じい勢でセリョージャに飛掛らうとしたが、若者の喜び勇んでゐるさまに思はず立止つた。

——ペトリューラ、どこに逃げただ？——ハア／＼云ひながら支那人はかれに訊ねた。

しかしセリョージャはかれの云ふことなどは聞いてゐなかつた。かれは驀地に中庭に飛び込んで近衛兵が投げ捨て、行つた彈藥盒と銃をひつ捉むや散兵線の後を追つて飛び出して行つた。みんなは西南停車場に雪崩れ込んだときになつて始めてかれのゐるのに氣がついた。砲彈、軍需品を満載した數臺の軍用列車を切り離し、敵を森林の中に追拂つてしまつたかれらは、休息して部隊の再編成をするためにその場に停止した。若い機關銃兵はセリョージャに近寄つて不思議さうにきいた。

——どこから來たんだ、同志？

——おれは土地のものだ、この町のもんだよ、みんなが來て來れ／＼ばい／＼にと、そればかり待つてゐたよ。

セリョージャは赤兵たちに取圍まれた。



——おれ、こいつ、知ってる、——支那人はにつこり笑つた、——こいつ怒鳴つたネ、「バンヂャイ、タワ、リ、サ！」こいつ、ボルセヴィカある、仲間、若い、ネ、——かれは有頂天になつてセリョージャの肩を叩いて言葉をついだ。

セリョージャの心臓は悦びに高鳴つた。かれは直ぐさま仲間に入れて貰へた。かれはみんなと一緒に剣付き鐵砲をひつさげて突貫し、停車場を占領したのだ。

町は湧き立つた。

生きた想ひもなかつた町の人々は地下室や穴藏から匍ひ出してきて、町に乗り込んできた赤軍の部隊を見やうと門の方に押しかけて行つた。アントニーナ・ワシーリエヴナとワリーヤは赤兵の隊伍に交つてみんなと肩を並べて行進して来るセリョージャを見付けだした。かれは帽子も被らず、彈藥盒を身につけ、銃をかついで歩いてゐた。

アントニーナ・ワシーリエヴナはハツとして両手をうつた。

セリョージャが、自分の息子が争ひの仲間入りしてゐるのだ。あゝ、そんなことをすればたゞでは済まされない！考へても見るがよい、——町中のものゝ眼の前を鐵砲をかついで通つて行くとは。あとでどんな眼に會はされることだらう？

かうした想ひに捉へられたアントニーナ・ワシーリエヴナはやがてもう矢も根も堪らなくなつて



……赤兵の隊伍に交つてみんなと肩を並べて行進して来るセリョージャを見付けだした。

かれは帽子も被らず、彈藥盒を身につけ銃をかついで歩いてゐた。



叫び出した。

——セリョーシカ、家に歸らねえか、ぐづくしねえで！ たゞちや置かねえぞ、このやくざめ、戦さならおつかあが相手になつてくれるぞ！ ——さう云つてかの女は息子を引止めやうと思つてそつちの方に向つた。

しかしセリョージャが、幾度となくかの女に耳を引張られたあのセリョージャが荒々しく母親を眺め、恥しいのと癪に障つたのとで朱を注ぎながら拒絶した。

——怒鳴らねえでくれ！ おれは此處からどこへも行きあしねえ。——そして立止りもせず通り過ぎて行つた。

アントニーナ・ワシーリエヴナはカッとなつた、

——ふん、なんてえ口のきゝやうだ、お母さんに向つて！ よオし！ そんならそれで、後になつてから家にけえつて来るなよ。

——けえつて堪るもんか！ ——振り向かうともしないで、セリョージャが曇みかけて怒鳴つた。

アントニーナ・ワシーリエヴナは茫然として、道ばたに突立つたまゝでゐた。日焼けし、埃を浴びた戦士たちが傍らを過ぎ去つて行つた。

——泣くなつてことよ、おつかあ！ 倅を委員にしてやるからな、——誰かのどつしりした、からかふ聲が聞えた。

陽気な笑ひが小隊中に撒き散らされた。中隊の先頭では力強い歌聲が一齊に湧き上つた。

同志の腕よ、

堅く結び、

同志の……よ、

高く胸うち……

各部隊は力強く歌聲の後をうけた、一同の合唱の中にはセリョージャの痛高い聲が交つてゐた。かれは新しい家族を見つけ出した。そしてその中にはかれセリョージャの銃劔も一本加つてゐたのだ。

レシチンスキイの屋敷の門前には——白い厚紙、その上には簡単に「革・委」。



それと並んで火のやうなポスター。赤兵の指先と眼が讀むものの胸にピタリと向けられる。そして文句は、

「君は赤軍に……………」

夜のうちに師團政治部員たちがこの無言の煽動者を貼つて廻つたのだ。シエベトフカ町の全勤勞者に訴へた革命委員會の最初の檄文が矢張りそこにある。

「同志諸君！ 町はプロレタリア……………」

町民諸君は

安心して欲しい。血に飢ゑた掠奪者どもは撃退された、しかし奴らが二度と再びもり返して來ないために、奴らを徹底的に撃滅するために、諸君、……………加はれ。全力をあげて……………

……………町の軍事権は守備隊長に、市民権は……………に委任される。

……………會代表 ドリンニック

レシチンスキイの屋敷には新しい人々が現れた。昨日まではそのために生命を支拂はなければならなかつた「同志」といふ言葉が今や一足進むごとに鳴り響いた。名狀しがたく……………言葉「同志」！

ドリンニックは睡眠も休息も忘れてしまった。

木工は革命政權を調節してゐた。

別荘の小さな部屋の扉口に紙片が掛けられ、鉛筆の走書きがしてある、——「…委員會」。こゝには落着いたガツチリした同志イグナーチェワがある。かの女とドリンニックは師團政治部からソヴェート政權諸機關の組織を委任された。

一日たつと、もうテーブルの廻りには協働者たちが坐り込み、タイプライターがパチ／＼音立て、糧食委員會が組織されてゐた。委員のティジッキイは氣の早い、神経質な男だつた。ティジッキイは砂糖工場の機械方見習ひをしてゐた。ソヴェート政權が堅められた最初の頃から、かれはボルシェヴィキに對して秘かに憎惡を抱いてゐた工場管理部の貴族的なお偉ら方をポーランド人獨特のねばり強さでやつつけ始めた。

かれは工場の集會で、演壇の圍ひを激昂して打叩きながら、自分を取巻いてゐる労働者に向つて、猛烈な和解し難い言葉をポーランド語で投げつけた。

——云はねえでも判つたことだが、——かれは喋舌つた、——今までのやうなことはもう二度と起りやしねえ。おれ達の親爺、又おれ達自身は一生涯、いやと云ふほどポトッキイ家のために小作して來た。おれ達は奴らに御殿を造つてやつた、ところがコサック首領の伯爵様がその御恩返しに



おれ達にどのくらゐよこしたと思ふんだ。飢ゑのために、仕事をしながら斃<sup>くたば</sup>らねえだけがギリ／＼ちやねえか。

ポトツキイ伯爵やサングーシカ侯爵の一人は一體何年の間おれ達の瘤の上に跨つて乗り廻してゐると思ふんだ？ ロシア人やウクライナ人同様、おれ達ポーランド人にもポトツキイのために鞭にかけられてゐる労働者が決してちつとやそつとぢやないんだ。ところがどうだ、労働者の間にはこんな噂が擴つてゐる、伯爵のごますり共が觸れ廻つたんだが、ソヴェート政権は労働者を一人残らずギユウ／＼壓へつけるつてんだ。

こりや、恥知らずの中傷だ、同志諸君。いろんな民族の労働者が今見たいに……獲たことは一度だつてありやしなかつた。

すべてのプロレタリアは……、だが紳士様がたは取つちめてくれるぞ、その點は受合ひだ。

——かれの手は弧を描いて又もや演壇の圍ひの上に落ち掛る。——おれ達いくつもの民族の間を……ゐたのはだれた？ 兄弟たちの……流させたのは何處のどいつだ？ 昔から王様や貴族めらがポーランドの百姓をしよびいて行つてトルコ人に敵對させたのだ、そしていつでも一つの民族が外の民族に襲ひ掛つて、掠奪をほしまゝにした——一體どれだけの民族が破滅し、どれだけの不幸が起つたと思ふ！ そして、それが……立つと云ふのだ、おれ達の……立つたと云

ふのか！ だが、そんな事はもう直き何もかもお仕舞ひだ。あの蝮<sup>むし</sup>どもの年貢の納めどきをやつて來たんだ。ボルシェヴィキはブルジョアにとつて……言葉を全世界に投げかけた、「……！……！……！」これこそおれ達の救ひだ、幸福な生活に對するおれ達の希望だ、……同志諸君、……

今にポーランドは共和國になる、たゞしポトツキイめらの居ない……共和國にだ、奴らは根こそぎにして仕舞はなければ駄目だ、そしておれ達自身がソヴェート・ポーランド……になるんだ。君たちの中でプロニク・ブタシンスキイを知つてないものはあるか？ かれは革命委員会によつておれ達の工場委員に任命された。インターナショナルの……なるだらう。そしておれ達の……がやつて來るだらう、だが同志諸君、あの猫の皮をかぶつた蛇どもの云ふことを聞くのだけは止めてくれ！ で、もしおれ達労働者が信頼しあひ援けあふならば、……兄弟になることが出来るのだ。

ワツラフはかれの率直な労働者的な心臓の奥底から、こうした新しい言葉を吐き出した。

青年たちは思はず同感の言葉を洩らしながら、かれが演壇から降りて行くのを見送つた。たゞ年輩の男共は口に出して云ふのを怖れた。明日ボルシェヴィキが退却しないとだれが保證することが出来るやう、さうすれば自分の喋舌つた一言、一言に對して支拂ひをしなければならなくな



なのだ。絞り首になるのは免れたとしても、工場からおん出されるのは云はずものことだ。

教化委員は——瘠せて、きちんとした恰好をした教師のチエルノビスキイだった。かれは目下のところ、土地の教員の間でボルシェヴィキに身を獻げてゐる唯一の男だった。革命委員會の向ひ側には特別任命中隊が陣取つてゐた。その赤兵たちが革・委の當直をした。日が暮れると入口側の庭に緊張したマクシム式機關銃が据ゑつけられ、その保彈帯はうねつて受け付けまで匍ひ寄つてゐた。

銃をもつた二人の兵士がそれと並んで立つてゐた。

同志イグナーチエワが革・委に向つて歩いて行く。かの女は年若い一人の赤兵に眼を止めて尋ねる。

——あなたいくつ、<sup>クワリシチ</sup>同志？

——十七です。

——この土地の人？

赤兵がにっこり笑ふ。

——え、おとつ、パン／＼やつてる最中に入隊したんです。  
イグナーチエワはかれを見つめる。

——お父さんは何してゐるの？

——機關手助手です。

ドリンニツクがどこかの軍人と一緒に潜り戸に入つて来る。イグナーチエワはかれの方を向いて云ふ。

——この通り、あたしが………地區委員會の親玉を見付け出しといた。この土地のもんだつて。

ドリンニツクはチラリとセルゲイの方に眼をやつた。

——どこの子だ？ あ、ザハールの伴か？ よし、やつてくれ、若い連中を堅めてくれ。

セリョージャはけ／＼んさうにかれを眺めた。

——ぢや、中隊の方は？

もう階段の方に馳けて行つたドリンニツクが投げつけた。

——そつちの方はおれ達がなんとかやるよ。

二日目の晩方にはウクライナ………委員會が創られてゐた。

思ひがけなくも、急速に、新しい生活が突入して來た。それはかれのすべてを満した。どうにもしやうのない渦巻の中でぐる／＼廻つた。セリョージャは自分の家がどこか直ぐそばにあつたにも係らずそんなことは忘れてしまつた。



かれセリョージャ・ブルジャックは——ボルシェヴィクだ。そしてかれはこれでもう十回も細長い白紙をポケットから引張り出しては眺めた。ウクライナ……（……………）委員会の用紙の上にはかれセリョージャが……員で委員会書記であることが書かれてゐるのだ。だがそれでも信用しないならば、詰襟服の上からかけられた革條に、親しいパフカの賜り物である見事なマンリッヘル銃が、防水布でつくられた並製のケースに入れられてぶら下つてゐるのを見るがよい。これほど確かな……章が又とあらうか。あゝ、残念なことには、パヴルーシヤが居ない！

セリョージャは毎日ぶつづけに革命委員会から委任されたことで飛び廻つた。今も今、イグナ・チエワがかれを待つてゐる。二人は革命委員会宛の文書と新聞を受取りに停車場の師團政治部に行くところなのだ。かれは足早やに表に飛びだして行く。政治部員の一人が革命委員会の門前で、自働車を用意して待つてゐる。

停車場までは遠い。停車場の列車の中にはソヴェート・ウクライナ第一師團の本部と政治部が置かれてゐた。イグナ・チエワは車に乗つてゐる間を利用してセリョージャに質問を浴せかける。

——あんた、若い連中の間でどんな仕事をしたの？ 組織は出来あがつた？ 仲間の労働者の子供を……らなけりや。近々の中に、……的な青年のグループをまとめる必要がある。明日、……を作つて、印刷しやう。それから劇場に青年を集めて、集會を開く、——とにかく

政治部でウスチノヴィッチに紹介してあげやう。あんたの仲間の間で仕事がやれる女だわ、屹度。

ウスチノヴィッチといふのは濃い髪を断髪にした十八の娘で、カーキ色の眞新しい詰襟服を着、細い革條を腰にしめてゐた。セリョージャはかの女から新しいことを山ほど教つた、そして仕事の手傳ひをしてもらふ約束をした。別れしなに、かの女は文書の入つた包みをかれに背負はせた。その中には……の綱領や規約を書いた小冊子が特に澤山交つてゐた。

夜おそく、二人は革・委に戻つてきた。ワリーヤが庭で待つてゐた。かの女はセルゲイにとび掛つて苦情を云つた。

——呆れた子だね、この子は！ どうしたんだい、家とはすつかり縁切りをしたつて云ふのかい？ お母さんはお前のことで毎日泣き通しだし、お父つあんはお父つあんで、ブリ／＼してゐるぢあないか。たゞぢや濟まないよ。

——大丈夫だつてえことよ、ワリーヤ。家に歸る隙がねえんだ。ほんとのとこ、隙がねえんだ。今日も歸らねえぜ。さうだつて、おめえとは話があるんだ。おれんところに行かう。

ワリーヤはこれが自分の弟なのかと思つた。かれは見違へるほど變つてしまつた。まるで誰かに電氣でも掛けられたやうだつた。姉を椅子に坐らすと、セリョージャはすぐさま、ハキ／＼した調



子で口を切った。

——話つて云ふのは外でもないが………にお入りよ。判らない？ ……だ。おれはそ  
の方の議長代理をしてるんだぜ。信用しねえのか？ それ、読んでみる！  
読み了つたワリーリヤは當惑して弟を見た。

——あたしが同盟なんかに入つて、なにをするつて云ふの？

セリョージャは両手をひろげた。

——なんだつて？ 何もすることがないだ？ 姉さん！ おれはこうして幾晩も眠つちや居ねえ、  
………必要があるんだ。イグナーチエワはみんなを劇場に集めて、ソヴェート………の話をしやうつ  
て云ふんだ。そいから、このおれに是非演説をしろつてえんだ。で、おれにはつまり荷がきつすぎ  
るんだよ。それでだ、どうだい、同盟の方のことは？

——あたしには何とも云へないわ。そんなことをした日にはお母さんがそれこそ怒つちまふよ。

——お母さんの事なんぞ考へるな、ワリーリヤ、——セリョージャが反駁した、——お母さんには  
この事は判らねえんだ。自分の子供が膝下に居さへすりやと、その事ばつかに氣を使つてるんだから  
な。お母さんだつて………ちつともしてやしねえ。それどころか、同感し  
てゐるんだ。たゞし、自分の倅たちだけは戦争に行つてくれるな、外の連中がやつてくれ、ばい、

にと思つてるんだよ。だが、それが一體正しいことだらうか？ ジュフライがおれ達に話してくれ  
たことを覚えてゐるか？ パフカを見ろ、お母さんの方を振り向きもしなかつたぢあないか。ところが  
が今ぢやおれ達は思ひ通りに世の中で生活する權利を持てるやうになつたんだ。なア、ワリーリヤ、  
まさか斷りやしめえな？ こうなりやとでもいゝぢやねえか、お前は娘たちの中で、おれは若  
者たちの中で仕事をするやうになつたらよ。赫毛のクリムカの奴は今日にでも歸り道待ちぶせ  
てとつ捉まへるつもりだ。ねえ、どうする、おれ達の仲間に入るか、入らねえか？ ほら、こ  
に本があるぜ、その事を書いたもんだ。——かれはそれをポケットから取出して、かの女に渡した。  
ワリーリヤは弟から眼を離さず小聲で尋ねた。

——でも、又ベトリユラ軍がやつて來たら、どうなるの？

セリョージャは始めてこの問題に想ひ及んだ。

——おれは、無論、みんなと一緒に立退く。だが全くお前はどうしたらいゝだらうな？ それこ  
そお母さんを不幸な眼に合はすことになるな。——かれはおし黙つた。

——お母さんに知られないやうに、誰にも知られないやうにして、あたしを仲間に入れておいて  
おくれ、セリョージャ、あたしとお前だけの間のことにしておいて………何でも手助けしてやるから、  
その方がいゝよ。



——全くだ、ワリーヤ。

イグナーチエワが部屋の中に入つて来た。

——これ、姉さんのワリーヤです。同志イグナーチエワ、二人で主義のことを話し合つたんです。とても適任なだけけれど、たゞ、その、家のお母さんはやかましましやなんですよ。だれにも知らせないやうにして入れてやるわけには行かないでせうか？ おれ達がもしものはなし、退却するやうになつたら、おれは無論、銃をとつて出掛けるが、姉さんはその、お母さんが可哀いさうだと云ふんでね。

イグナーチエワはテーブルの片隅に腰を下して、じつとかれの云ふことを聞いてゐた。

——いゝです。その方がいい。

町にぶらさげられた集會開催の知らせを見て集つてきた若者たちは劇場をギッシリ詰めにし、ガヤ／＼喋舌つてゐる。砂糖工場の労働者バンドが奏でられてゐる。廣間の大部分は學生だつた——中學生、女學生、高等小學の生徒。

かれらすべては集會に來たといふよりも、むしろ芝居見物の積りでこゝに惹きつけられて來た連中だつた。

やつとの事で幕が上ると、今しがた郡から到着したばかりの郡委員會書記長同志ラージンが壇の

上に姿を現はした。

瘦せた小男で、尖つた鼻をしたかれは満堂の注目を一身によせ集めた。一同は固唾かたづを呑んでかれの演説を聞いてゐた。かれは國中を捉へてゐる鬭争について語り、青年よ、………周圍に集れと呼びかけた。かれは本格的な演説家口調でしやべつた、かれの演説中には「正統派マルクス主義者」だの「社會シヨヴィニズム」だのといふ勿論みんなには判らない言葉が多すぎた。

演説が終ると、かれは嵐のやうな喝采で酬たまゐられた。かれはセリョージャに話を譲つて出掛けて仕舞つた。

セリョージャの心配してゐたことが持ち上つた。うまく喋舌れなかつた。「なにを喋舌つたもんだらう、何のことを？」かれは言葉を探し求めても探し出すことができずに苦んだ。

イグナーチエワが救ひ舟をだして、机の向ふ側から小聲で囁いた。

——………のことをお話し。

セリョージャは一足飛びに實際方法の問題に移つた。

——同志諸君、諸君はもう何もかも聞いて知つてゐるから、今度は………を作ることが必要だ。諸君の中でそれに賛成してくれるものは居るか？

廣間はしらけて仕舞つた。



ウスチノーヴィッチが助けにやつて来た。かの女は聴衆に向つて、モスクワの青年組織の話をした。セリョージャはモチ／＼して傍らに立つてゐた。

細胞組織に對するみんなの態度を見てムカ／＼したかれは、いま／＼しげに廣間を眺め廻した。ザリワーノフがウスチノーヴィッチの方を輕蔑したやうに見ながら、リーザ・スハリコに何ごとかを囁いた。前列には鼻先きにお白粉をくつつけた女學校の上級生がづらりと並んで、狡るさうにチラ／＼方々に眼を走らせながら、お互に話し合つてゐた。舞臺入口の片隅に若い歩兵が群らがつて立つてゐた。セリョージャはその中に顔見知りの若い機關銃手が交つてゐるのを見てとつた。かれは脚光フットライトの際に腰を下ろし、神経質に落ちつかぬ様子で、めかし込んだリーザ・スハリコやアンナ・アドモフスカヤを憎々しげに眺めてゐた。女たちは邊り憚らず自分の取巻き連と話してゐた。

みんなが自分の話を聞いてないといふことを悟つたウスチノーヴィッチはあつさり演説のくぎりをつけて、イグナーチエワに場處を譲つた。イグナーチエワの落着いた演説に聴衆は鳴りを静めた。

——青年諸君、——かの女は云つた、——みんながこゝで耳にしたことをよく考へて判斷して戴きたい、そしてこの中には……單なる見物人ではなく、その積極的參加者となる人々があるといふことを私は信じて居ます。扉は諸君のために開かれてゐる、ひたすらに諸君を待つてゐるのだ、

どうかどし／＼意見を述べて戴きたい。われこそはと思ふ人はありませんか。

廣間は又もや沈黙に襲はれた。と突然、後列から聲が響き渡つた。

——おれに話さしてくれ！

そして、ほんの一寸藪にらみで、小熊のやうな格好をしたミーシャ・レフチュエーコフが人波を押して舞臺の方に向つて来た。

——さういふことなら、………しなければならんと思ふ、おれは反對しないぞ。

おれの事はセリョーシカが知つてゐる。おれはコムソモールに入る。

セリョージャは喜ばしげに笑つた。

——これを見てくれ、同志諸君！——かれはいきなりつか／＼と、舞臺の真中に飛び出した。

——おれの云つた通りだ、このミーシカはおれ達の仲間だ、奴の親爺は轉轍手で、列車の下敷きになつて殺されてしまつた、そのためにミーシカは學校に通ふことさへ出来なかつた。ところがどうだ、奴は中學校も終へちやないが、おれ達の仕事のことは直ぐに呑み込んだちやないか。

廣間はざわめき立ち、叫び聲が聞えた。藥局の俵で、懸命に髪の毛を縮らした中學生のオクシフが發言を求めた。詰襟服を引張つてから、かれは始めた。

——失敬だけど、タワリシチ、僕らに何を要求してゐるのか、僕には判らないんだ。僕らに政治を



やれつて云ふのか？ そんな事をすりや、いつ勉強したらいゝんだ？ 僕らに必要なことは中學校を出ることだ。それもスポーツの會や、集つて本でも讀めるやうなクラブかなんか創らうといふんなら話は別だ。ところが政治をやつた揚句の果は、首を緘られるのが落ちだ。眞平御免だ。そんな事に賛成するものなんか一人も居ないと思ふなア、僕は。

廣間では笑ひ聲がひゞき渡つた。オクシヨフは舞臺から飛下りて腰を下した、若い機關銃手がかれに替つて突立つた。荒々しく帽子を額の上にグイと引張り、ズラリと坐んでゐる連中に怒りに燃えた眼差しを投げかけたかれは力一杯怒鳴つた。

——なにがおかしいんだ、蟲けらめ？

かれの眼は——燃えしきつた二つの炭火のやうだつた、身内に深く息を吸ひ込んだかれは憤怒に身慄ひしてしやべり出した。

——おれは熱火のイワンつてえもんだ。おれは親爺もおふくろも知らぬ浮浪兒だつた、乞食をして柵の下でごろ／＼してゐた。腹はいつもベコ／＼で、どこに身を休める處もなかつた。お前たちお坊ちやんとはわけが違つて、犬ッころ見たいな暮しをして來たもんだ。ところが今ちや様子がすつかりかはつて、おれは赤兵にして貰つた。小隊中のものが吾が子のやうに可愛いがつてくれ、着物はきせてくれる、靴ははかせてくれる、學問は教へてくれる、中でも一番大切な人間の意味を教

へて貰つた。おれはみんなのお蔭でボルシェヴィキになつた。そして死ぬまで變らぬつもりだ。おれは何のために闘ひが行はれてゐるのかをよく知つてゐる、おれ達のために、貧乏人のために、労働者……のためにだ。それにどうだ、お前たちは種馬みてえにヒン／＼云ふばかりで、大切なことを忘れてしまつてゐるんだ、この町の地下には二百人の同志が眠つてゐるんだぞ、永久に滅んでしまつたんだぞ……——熱火の聲はピンと引張つた絃のやうに響き出した。——おれ達の幸福のために、おれ達の仕事のために、惜しげもなく、生命を投げ出してくれたんだ……國中いたる處で、あそこの戦線でも、こゝの戦線でもみんなが生命を投げ出してゐるつて云ふ時に、貴様らはこゝで木馬に乗つて馬鹿騒ぎでもしてゐる積りで居やがるのか。奴らに呼びかけたところで何になる、同志諸君、——かれは突然、幹部席の方に向き直つた。——こんな奴らに、——かれは廣間を指さした。——奴らに判つて貰へるとでもいふのか？ とんでもない！ 腹の張つてるもんと、滅つてるもんとちや手は繋げねえ。こゝで見付け出した仲間はずつた一人だ、といふのも奴が貧乏人でみなし兒だからだ。貴様らなんかなしでも結構やつて見せるぞ、おれ達は、——かれは猛り立つて、集つてゐる連中に叩きつけた、——手前らに頼んだりするもんか、えれえ奴らに出喰はしたもんだ。こんな手合ひは機關銃で縫ひつけてくれるに限る！——息を弾ませながら、最後の言葉を怒鳴り散したかれは舞臺から馳け下りて、誰れにも眼もくれず出口の方に向つた。



幹部席の中で夜まで残つたものは一人もなかつた。革・委についたとき、セリョージャはがつかりしたやうに云つた。

——えらいことになつたもんだ！ 熱火のイワンの云ふ通りだ。あんな學生を相手にしたところで何の足にもなりやしなかつたよ。却てやらねえ方がよかつた。

——當り前のことさ、——イグナーチエワがかれを遮つた。——こゝにはプロレタリア青年は殆ど居ない。大部分が町人根性の小ブルジョアか都市インテリゲンチヤぢあないか。労働者の間で仕事をしなければ駄目だ。製材所と砂糖工場に足場をつくるんだ。だけど、集會はとにかく役に立つたわ。學生の中にもいゝ同志があるから。

ウスチノヴィツチがイグナーチエワを支持した。

——あたし達の課題は、セリョージャ、一人、一人の人間の意識の中にあたし達の思想、あたし達のスローガンを浸み込ませることにあるんぢやないの。新しい事件が持ち上る毎に……は全労働者に注意を向ける。あたし達は次から次へと集會や會議や大會を開いて行く事になるでせう。師團政治部は停車場で夏季劇場を開催するわ。二三日中に煽動列車がやつて来るから、さうすりやどんどん手を伸ばすから……覚えてゐて、レーニンはこう云つたでせう、——我々は幾百萬の労働者大衆を……引入れることなしには……することは出来ない、つて。

夜遅く、セルゲイはウスチノヴィツチを停車場に送つて行つた。別れ際にかれは堅く手を握り、一寸の間それを放さなかつた。ウスチノヴィツチは殆ど氣づかないくらの微笑んで見せた。

町に戻つたセルゲイは自分の家に立寄つた。セリョージャは黙つた儘、口答へもせず、母親の喰つてかゝるのを我慢してゐた。しかし、父親が口を出し始めるや、セリョージャはこつちから攻勢に出て、瞬く間にザハール・ワシリエヴィツチを雪隠づめにしてしまつた。

——なあ、父つあん、父つあん達がドイツ軍の下でストライキをやつたり、機關車の番兵をぶち殺した時にや家のことは考へてなかつたつて云ふのか？ 考へては居た。だがそれでもやつてのけたちやねえか、と云ふのも、労働者としての父つあんの良心がものを云つたからだ。おれだつて、家のことを考へないぢやねえ。退却するやうなことになるや、おれのお蔭で家のもんが苦しい目に遭はされることも、おれにや判つてゐるよ。だがその替りだ、もしもおれ達が勝てばおれ達の……になるんだぜ。おれはノウ／＼と家に坐つてゐるわけにや行かねえ。お前には、そのこと、よく判つてる筈ぢやねえか、父つあん。何を四の五の云ふことがあるんだ？ おれはいゝ事をしてるんだぜ。おれを應援してくれてもよかりさうなもんだ、手を貸してくれてもよ、それをよ、騒ぎ立てるんだからな。なあ、父つあん、仲直りしやう、さうすりやおつ母もおれのことで金切り聲を立てなくなるし。——かれは自分の正しさを信じるものゝやうに懐しさうに、笑ひながら、澄んだ空色の眼で



父親を眺めた。

ザハール・ワシリエヴィッチは腰掛けの上で不安さうにモヅ／＼してゐたが、やがてバリ／＼と濃い口髭と剃刀を當てゝない小さな顎鬚との間から、黄ばんだ齒を覗かせてにつこり笑つた。

——理屈で責めつけやうつてえんだな、こすい野郎だ。ピストルを突きつけてくりや、こちららに革條で引叩かれねえでも濟むと思つてゐるのか？

しかし、かれの聲音には威嚇の影は消え失せてゐた。かれは稍々ためらつた後、息子の方に皺だらけの手をグイと突出しながら附け足した。

——進んで行け、セリョーシカ、一旦氣負ひ立つたからにや、止め立てはしねえ。だがおれ達のとこもけざらひしねえで、やつて来いよ。

夜。軽く開けられた扉口から光の縞が階段の上に横つてゐる。絹綿天鵞絨を張りつめた長椅子があちこちに置かれてゐる大きな部屋では、五人のものが幅広い辯護士用の机を圍んでゐる。……の會議だ。ドリンニク、イグナーチエワ、たつぷりした上衣を着て、キルギス人に似た非常委員會代表ティモシエンコ、及び二人の革命委員——大男の鐵道従業員シュデークとベチャンコの鼻をした機關庫労働者のオスタブチック。

机越しに身體を曲げ、イグナーチエワをぢつと見つめたドリンニクは嘎れ聲で一言、一言割るやうに云つた。

——戦線では糧食が必要だ。労働者は食はねばならん。おれ達がやつて来るが早いか、小商人や市場の山師どもは物價を暴騰させた。ソヴェート紙幣は受けつけない。古いニコライ紙幣か、ケレンスキイ紙幣で取引してゐる。今月にでも公定價格を決めやう。しかし公定價格で商賣するやうな山師は一人だつて居はしないだらう。その事はおれ達も充分に知つてゐる。奴らは隠し立てするに違ひない。さうなれば、家宅搜索をやつて、慾深めらのところにある品物を全部徵發してしまはう。何だかだと云つてゐる場合ぢやない。おれ達は労働者がこの上飢ゑに苦むのを見逃しにするわけには行かん。同志イグナーチエワはおれ達がやり過ぎないやうにと前以て警告してゐる。おれに云はせれば、そりやインテリ的な弱腰だ。憤慨するなよ、ゾーヤ、おれは有り體を云つてゐるんだ。おまけに問題は小商人のことぢやない。實は今日知らせが入つたんだが、居酒屋のボリス・ゾーンのところに秘密の地下室があつて、その地下室にはまだペトリューラ軍が来る前から、大商人たちがどえらい品物を仕舞ひこんでおいたといふ話なんだ。——かれは刺げのある嘲笑を漂はせて、意味ありげにティモシエンコを眺めた。

——どこから聞き込んだんだ？——こちらは呆氣にとられて問ひ返した。かれティモシエンコ



は自分が眞先きを知つてゐなければならぬ報知を何もかもドリニンニクに先を越されたのが口惜しかった。

——ヘッ、ヘッ！——ドリニンニクが笑つた。——おれ様の眼につかないことがあるもんかよ、兄弟。おれの知つてゐるのは地下室のことだけぢあねえ、——おれは續けた、——昨日、お前が師團司令部長の運轉手と一緒にゐて、どぶろくの壘を半分あけちまつたことも知つてゐるぞ。

ティモシエンコは腰掛けの上でモヅ／＼し出した。かれの黄ばんだ顔は赤味を帯びて來た。

——悪い病氣だよ、全く！——かれは夢中になつて押出すやうに云つた。だが苦い顔をしたイグナーチエワをチラリと見て口をつぐんでしまつた。「仕様のねえ木工だ、こいつは！ お抱への非常委員會を持つてやがる」と革命委員會代表を眺めながらティモシエンコは考へた。

——セルゲイ・ブルジャックから聞いたんだ、——ドリニンニクは續けた。——奴の友達に食堂で働いてゐる男がゐるんだ。でその男がコツクから聞いたところによると、ゾーンは以前は入用なもの全部に無制限に糧食を支給したといふことだ。昨日セリョージャの手に入つた正確なレポによると穴庫があるのだから、それを見付け出しさへすればよいといふのだ。で、ティモシエンコ、若い連中とセリョージャを連れて行つてきてくれ！ 今日にでも全部見付け出せるやうにな！ 成功したら労働者と師團經理部に配給しやう。

半時間後には武装した八人が居酒屋の亭主の家に入り込み、二人が入口ぎわの道路に残つてゐた。四斗樽のやうにづんぐり肥つた男で、赫い剛い毛をモジャ／＼生やした亭主は義足をカタ／＼鳴らしながら、入つて來た連中にへいこらし、噎れた、喉にかゝる低い聲で尋ねた。

——なんの御用で、タワーリシチ？ なんでまあ、こんな遅く？

ゾーンの背後には娘ちがティモシエンコの突きつけた手さげ電氣の光りに瞬きしながら、寢着を引かけて立つてゐた。隣りの部屋ではでつぶりした妻君が歎息をつきながら着物を着てゐた。

ティモシエンコは一言で説明した。

——家宅搜索だ。

床の四角は一つ一つ調べられた。挽かれた薪の積んである廣い納屋、物置、臺處、大きな穴庫と一々念を入れて搜索された。しかし秘密の穴藏の跡方一つ見付からなかつた。

臺處横の小ッぼけな部屋には、酒場の亭主の女中がぐつすり寢込んでゐた。あまりぐつすり寢込んでゐたので、部屋の中に入つて來られても氣がつかなかつた。セリョージャは用心深くかの女を呼び覺ました。

——此處に勤めてゐるのか、君は？ ——かれは寢ぼけ眼の娘に尋ねた。



肩の上に蒲團を引掛け、片手で燈りを遮りながら、何のことやら皆目合點の行かない娘はげさうに答へた。

——わし、勤めてるもんです。で、あんた方はなんだね、一體？

セリョージャはわけを話し、着物をきるやうにと云つて出て行つた。

廣い食堂ではティモシエンコが主人を調べてゐた。酒場の亭主は息をはづませ、唾をとばしながら興奮して云つた。

——なんてことを仰言るんだね？ あつしんところには別に穴藏なんか御座んせんよ。無駄な時間つぶしですが。あつしの云ふことに間違ひはありやせん、お無駄ですがよ。あつしも元は居酒屋を開いてやしたが、今ちや素漢貧で……。ペトリューラ軍の奴らに掠奪された上に、今ちつとで殺されるどころでした。ソヴェート政權は大賛成で御座んすが、あつしの持つてるものと來たら御覽の通りですがよ、——さう云つてかれはそのづんぐりした太い手を擴げた。だが血膜の見える眼は非常委員會代表の顔からセリョージャへ、セリョージャからどこかの片隅や天井に馳せ廻つた。ティモシエンコはいら／＼して唇を噛みしめた。

——ちや、相變らず隠しつゞける積りだね？ これ以上は云はない、穴藏のありかを教へてくれ給へ。

——あれ、あんたはなにをまあ、軍人さん、——居酒屋の女房が口を入れた、——わたし共御本尊が食ふや食はずでさ！ 洗ひざらひ持つてかれちまつて。——かの女は泣き出さうとしたがうまく行かなかつた。

——食ふや食はずで女中のお抱へか、——セリョージャが一本入れた。

——あれまあ、女中だなんて！ かわいさうな娘を置いてやつてるだけでござんすよ。どこにも寄邊のない女でして。なんならフリスチンカの口から御聞き下せえまし。

——よし、——耐え切れなくなつたティモシエンコが叫んだ、——仕事に掛らう！

中庭はもう晝になつてゐたが、居酒屋の亭主の家では未だに頑強な搜索がつゞけられてゐた。十三時間も探し廻つた揚句の失敗にカン／＼になつたティモシエンコは家宅搜索を打切ることに腹をきめやうとしてゐた、ところが小さな女中部屋から今にも立去らうとしてゐたセリョージャは突然娘が小聲で囁くのを耳にした。

——きつと、臺處の煖爐の中だよ。

十分後にはバラ／＼にされたロシア式の煖爐の中から昇降口の鐵蓋が姿を覗かせてゐた。更らに一時間たつた頃には、樽や袋を満載した二噸積みのトラックが啞然とした群衆に取り巻かれてゐる居酒屋の亭主の家から出發して行つた。



暑いある日のこと、マリヤ・ヤーコヴレヅナが小さな包みを抱へて停車場から戻つて来た。かの女はアルチョムからパフカの話を書きいてひどく泣いた。かの女には暗鬱な日がつゞいた。口を糊する術すべともなかつたので、マリヤ・ヤーコヴレヅナは赤兵たちのよれものを洗つてやり、その替りに軍隊用の食券を心配して貰ふことに話をきめた。

ある日の暮れ方、アルチョムがいつもより足早に窓下をコツ／＼やつて来た。そして扉を押し開けながら、閨口から投げかけた。

——パフカから便りがあつたぜ。

「尊敬する兄貴アルチョム、——パフカは書いてゐた、——大好きな兄貴に知らせる、おれはひどく健康たうしやとは云へないが生きてゐる。腰に一發喰つたが癒る。醫者の話では、骨に傷はついてないさうだ。おれのこと、心配しないでくれ、何とかなる。野戦病院を出たら休暇をとつて歸るかも知れない。おふくろには出喰はさなかつたが、今ちやおれは同志コトフスキイ騎兵旅團の赤兵だ、同志コトフスキイの勇名はみんなも多分知つてだらう、おれは未だこんな人を見たことがない。そして旅團長を非常に尊敬してゐる。おつかさんは戻つて来たか？ 家にゐるや

うだつたら、末ッ子からくれ／＼もよろしくと云つてくれ。それから心配をかけて濟まなかつた。お前の弟。

アルチョム、營林所長のところに行つて、手紙のこと話してほしい」

マリヤ・ヤーコヴレヅナは涙をポロ／＼こぼした。役立たずの倅は寝てゐる病院の番地さへ書いてはよこさない。

セリョージヤは停車場に停車してゐる緑色の客車をちよく／＼訪ねて行つた、そこには「師團政治部煽動宣傳部」と書きつけられてゐた。この小さな特別室の中ではウスチノーヴィッチとメドヴェーチェワとが仕事をしてゐる。メドヴェーチェワは年がら年中齒の間に巻煙草を喰へながら、狹るさうに齒の片隅で笑ふ。

同盟地區委員會の書記は知らず／＼の間にウスチノーヴィッチと親しくなつてゐた、そして文書や新聞の包みと一緒に、ほんと一寸の間でも顔を合はしたといふぼんやりした喜びの感情を抱いて停車場から戻つて行つた。

師團政治部の公開劇場は毎日労働者と赤兵でぎつしりだつた。線路には目も醒めるやうなポスタ



一を張りめぐらした第十二軍の煽動列車がおかれてゐた。煽動列車は完全に朝から晩まで活氣立つてゐた。印刷所は仕事をつゞけ、新聞やビラや宣言を出してゐた。戦線は眞近にあつた。ある晩ブラリと劇場に顔を出したセリョージャは赤兵たちの中に交つてゐるウスチノーヴィツチを見付け出した。

夜も更けてから、師團政治部員たちが泊つてゐる停車場にかの女を送つて行く途中で、セリョージャは思はずもかう尋ねてしまつた。

—おれはしよつ中、君を見て居たいんだけど、どうしてなんだらう、同志リーク？ —そして附け加へた。—君と一緒にだと、とても嬉しいんだ！ 逢つた後はいつもより元氣が出て、際限なしに仕事をしたくなるんだ。

ウスチノーヴィツチは立止つた。

—ねえ、同志ブルジャック、これから先きのこと、決めて置きませう、抒情詩に溺れるのはよしにして頂戴。そんなの感心しないわ、あたし。

判決を下されたセリョージャは小學生のやうに眞赤になつた。

—おれは友達として君に云つたんだ、—かれは答へた、—それを君つたら……おれが何か反革命的なことでも云つたつて云ふのか？ 勿論、これつきり云やあしないよ、同志ウスチノー

ヴィツチ！

そしてそゝくさとかの女に手を差出すと、まるで馳けるやうにして町の方に立去つた。

引續き數日間といふもの、セリョージャは停車場に姿を現さなかつた。イグナーチエワに呼ばれたときもかれは仕事を口實にして斷つた。事實またとても忙しくもあつたのだが……。

ある晩のこと、シューヂックが家に歸りしなに、砂糖工場の高級社員のポーランド人が特に澤山住つてゐる近邊の道路で射撃された。それに連關して家宅搜索が行はれた。ファシスト同盟「射手」の武器や書類が発見された。

革・委の會議にウスチノーヴィツチがやつて來た。かの女はセリョージャを脇に呼んで、靜かにきいた、

—どうしたのよ、小市民的な自尊心に溺れてるの？ 個人的な話を仕事にまで及ぼすつもり？ そんなこと何の役にも立ちやしないわ、同志。

するとセリョージャは又もや機會を見て緑の列車に通ひ始めた。

郡會議に出席した。二日間猛烈な討論をやつた。三日目には—總會に集つた全員と一緒に武装して、河向ふの林に分け入つて、幾晝夜も幾晝夜もペトリューラ頭目の殘黨ザルドヌイ一味を追っかけ廻した。戻つて來てイグナーチエワのところまでウスチノーヴィツチを見付け出した。かの女



を停車場まで送つて行つて、別れ際に堅く／＼手を握つた。

ウスチノーヴィッチは怒つて手をもぎ離した。するとかれは又もや永いこと煽動宣傳部の列車に顔を出さなかつた。必要なときでさへも、わざとリータとは顔を合はせなかつた。そして、どうしてそんな態度をとるのかわけを話せと、かの女がしつこく要求するとづけ／＼と云つてのけた。

——君となにを話すことがあるんだ？ 又ぞろ小市民性か労働者階級の裏切りの太鼓判でもおす積りなんだらう。

停車場にコーカサス……師團の軍用列車が到着した。淺黒い顔をした三人の司令官が革・委にやつて來た。浮彫細工のバンドをギユッと締めた丈の高い瘡せぎすの男が、ドリンニクのところにつか／＼と歩みよつた。

——なんにも云はずに、秣を馬車に百臺だけ都合してくれないか。馬が斃りかゝつてるんだ。

セリョージャは二人の赤兵と連れ立つて、秣を手に入れるために派遣された。とある村で富農の徒黨に出喰はした。

赤兵たちは武装解除され、半死半生になるまでどやしつけられた。セリョージャは外の連中より僅かしか喰はされなかつた。年が若いといふので勘辨されたのだつた。貧農委員會の連中がかれら

を町まで運んで行つた。

部隊が村に派遣された。秣は翌日になつて手に入った。

セリョージャは家のものに心配をかけたくなかつたので、イグナーチエワの部屋で長い間寝てゐた。ウスチノーヴィッチがやつて來た。その晩始めて、かれは相手の愛撫するやうな堅い握手を感じた、全く思ひ掛けないことだつた。

暑い眞晝間、列車に馳けつけたセリョージャはリータにコルチャーギンの手紙を読んできかせ、仲間の話をした。歸りしなに投げ出すやうに云つた。

——森に行つてくるぜ、湖水で水浴びするんだ。

ウスチノーヴィッチは仕事の手を放して引止めた。

——待つてゝ。一緒に行きませう。

鏡のやうに静まり返つた湖水の傍らで二人は立止つた。すが／＼しい、温い透き通つた水がおいで／＼をしてゐた。

——道の出口に行つて待つてゝ、あたし、浴びて來るから、——ウスチノーヴィッチが、命令した。



セリョージャは小橋のかたへに置かれた石に腰を下して太陽に顔を向けた。  
かれの背後では水がパチャ／＼音たてゝゐた。

木の間越しにかれは、トーニャ・トゥマーノヴァと煽動列車の軍事委員チュジャーニンとが道を歩いて来るのを見付けた。ハイカラなフレンチ服に革條の澤山ついた劔差を締めつけ、キヌ／＼と鳴る色つきの長靴をはいた美男のかれはトーニャと腕を組んで何ごとか話しながらやつて来た。

セリョージャはトーニャに気がついた。あゝ、あの女だ、バヴルーシヤの手紙を持って来たことのある……かの女の方でもちつとかれを見てゐた——どうやら気がついたらしかつた。二人がすれ／＼になつたとき、セリョージャはポケットから手紙を取出してトーニャを呼び止めた。

——ちよつと、同志<sup>タクリシチ</sup>。僕は、いくらかあなたとも關係のある手紙を持つてゐるんですが……

かれはギツチリ餘すところなく書き込まれた紙片をかの女の方につき出した。手を放してトーニャは手紙を読んだ。紙片がその手で氣づかれぬほど微かに踊つた。トーニャはそれをセリョージャに返しながら尋ねた。

——この外に何か御存知ありませんか、あの人のこと？

——いや、——セルゲイが答へた。

背後ではウスチノーヴィッチの脚の下で丸石がギシ／＼鳴つた。チュジャーニンはリータに氣が

つくとトーニャの方に向つて囁いた。

——行きませう。

ひやかすやうな、輕蔑したやうなウスチノーヴィッチの聲がかれを引止めた。

——同志チュジャーニン！ 列車ちあ一日中あなたを探していますよ。

チュジャーニンは素氣なくかの女の方を横目で見た。

——なあに、おれが居なくなつてやつて行けるさ。

トーニャと軍事委員の後姿を見送り乍ら、ウスチノーヴィッチが云つた。

——見てゐろ、このベテン師め、今に追ん出してくるから！

森は椈の木の堂々たる帽子を打振りながらざわ／＼と音立てゝゐた。すが／＼しい湖水が呼び招いてゐた。セリョージャは水を浴びたくなつて来た。

水浴を済ませると、ウスチノーヴィッチは森の小徑から程遠からぬところに打倒れてゐる椈の木に腰をおろしてゐた。

二人は話し合ひながら森の奥深く入り込んで行つた。丈の高い生々した草の生え繁つた小さな草原で一休みすることにした。森は靜かだつた。椈の木が何ごとか囁いてゐる。ウスチノーヴィッチは柔い草の上に横になり、腕を折り曲げて頭の下に敷いた。つぎだらけの小さな古靴をはいたかの



女のすらりとした兩足は丈高い草に隠されてしまった。セリョージヤは見るとはなしに、かの女の足に眼をやると、靴の上の几帳面なつぎが眼に入った。自分の長靴には仰山な穴があいてゐて、そこから指が覗いてゐるのを見て笑ひ出した。

——なによ、あんた？

セリョージヤは長靴を指さした。

——こんな靴をして、一體どんな具合に戦はうつてえのかな、おれ達は？

リータは答へなかつた。草の莖を噛みながら、かの女は別のことを考へてゐた。

——チュジャーニンは……よくない………だわ、——かの女は遂に云つた、——あたし達のとこの政治部員はみんなボロを着て歩いてゐるのに、あいつたら自分のことばかり心配して。あんな奴は吾々のなまぢや異分子だわ……殊に戦線では重大問題よ、全く。あたし達の國は永い間、頑強な戦闘に耐えなければならぬことになるんぢやないの。——そして一寸黙つてゐてから附け足した——あたし達は、セルゲイ、言葉と銃剣とで行動しなければならなくなるわ。あんた中央委員會の決定を知つてゐて、××のメンバアの四分の一を戦線に動員するつて云ふ？ あたし、かう思ふんだけど、セルゲイ、こゝに留つてゐるのも長いことはないわ。

セリョージヤはその聲の中に何時いつにもない調子があるのをいぶかり乍ら、かの女のはなしを聞いて

ゐた。かの女の黒味が、つた潤ひにてり映えた眼はかれの上に注がれた。

かれは危く我れを忘れて、かの女の眼は鏡のやうで何もかも手にとるやうに見えるといふことを話さうとしたが、やつとの處で思ひ止つた。

リータは肘をついて身を起した。

——あんたのピストルはどうしたの？

セルゲイは残念さうに何もなくなつたバントに手を觸れて見た。

——村で富農の一味にふんだくられちまつたんだ。

リータは詰襟服のポケットに手を差し込んで、ピカ／＼光るブローニングを引張り出した。

——ホラ、あすこに櫛の木があるでせう、セルゲイ？ ——かの女は、そこから二十五歩ほども離れてゐるだらうか、一面溝の入つた幹の方を銃口でさし示した。そして片手を眼の高さに投げあげ、殆ど覗ひもつけずにブツ發した。打破られた樹皮がとび散つた。

——ホラね？ ——満足さうにさう云ふと、又々ブツ發した。又もや、樹皮が草に觸れて音立てた。

——さあ、——ピストルをかれに渡しながら、リータはからかふやうに云つた、——お手並拜見。三發撃つた中で、セリョージヤは一發だけのを外した。リータは微笑んだ。



——もつと下手だと思つてゐたのに……

かの女はピストルを地上において、草の上に横たわつた。詰襟服の布地越しに、はじけるやうな胸がふつくと浮び上つた。

——セルゲイ、こつちにいらつしやいよ。——かの女が小聲で云つた。  
かれは女の方に身を寄せた。

——空が見えるでせう？ 青い色。あなたの眼もおんなじ色ね。よくないわ、そんなの……あなたの眼、灰色でなくちやいや、鋼鐵のやうなんでなくちや、青い色つて——とてもなんだか優しすぎるわ。

さう云ふと、いきなりかれの艶のある頭を抱きしめギョッと唇をおし當てた。

二ヶ月が過ぎ去つた。秋がやつてきた。

黒いヴェールを樹々に蔽ひかぶせて、夜がこつそりと忍びよつてきた。モールス記號の破片をまき散した電信機の上に身を曲げた師團本部付きの電信技手は、指の下から細いリボンのやうに匂ひ出して来る電送紙を捉へた。かれは點と横線を組合はせた文句をすばやく白紙の上に書き寫した。

「シエペトフカ町革・委議長のコピー、第一師團本部司令官へ。この電報着手後十時間以前に當町の全機關を撤退することを命令する。市内には一大隊を残し、鬭争根據地を指揮するN聯隊司令官の命に従ふこと。師團本部、師團政治部、全軍事機關はバラランチェフ停車場に移動せよ。師團長に結果報告。署名。」

十分後に一臺のオートバイがアセチリン燈の眼を輝かせて、沈黙した町の街路を疾驅して來たかと思ふと、喘ぎながら革・委の門前に停つた。操縦者は革・委議長ドリニックに電報を手渡した。やがて人々が馳け出し始めた。特別中隊が整列した。一時間たつた頃には革命委員會の持ち物を満載した車が町をガタコト音立てゝゐた。ポドリスキイ停車場で車輛に積み込まれた。

セリョージャは電報をきゝ終ると、操縦者のあとを追つて飛び出した。

——同志、停車場まで乗せて行つてくれないか？ ——かれは運轉手に聞いた。

——後に腰かける、たゞし、しつかりしがみ付いてるんだぞ。

もう聯結されてゐる車輛から十歩ほど離れたところで、リータの肩に手をかけたセリョージャは、何か値をつけることも出来ないほど高價なものを失ふやうな感じを受けながら囁いた。

——さよなら、リータ、ぼくの大事な同志！ いづれまた逢ほう、たゞぼくの事を忘れないで。



——かれは慄然とした気持ちで、今にも聲をあげて泣き出しさうになつた。立去らなければならなかつた。かれはそれ以上話す力もなく、たゞいやと云ふほど両手を握りしめるだけだつた。

朝になると、町も停車場もガランとして静まり返つてゐた。最終列車の機関車が別れを告げるかのやうに汽笛をふき鳴らした、そして停車場の彼方には、町に踏み止つた大隊の防禦線が道の兩側に敷かれてゐた。

黄ばんだ木の葉がハラ／＼と飛び散り、樹木を裸にしてゐた。風がクル／＼巻きの木の葉を捉へて、静かに通りを轉がして行つた。

セリョージャは赤軍の外套を着込み、布製の彈藥盒を身體一杯しめつけて、十名餘りの赤兵と共に砂糖工場わきの十字路に頑張つてゐた。ポーランド軍を待つてゐたのだ。

アフトノム・ペトロヴィッチは隣りのグラシム・レオンチェヴィッチにノックをした。まだ着換へしてなかつたこちらの男は窓から首をつき出した。

——なにか起りやしたかな？

銃を構へて通り過ぎて行く赤兵たちを指さしながら、アフトノム・ペトロヴィッチは友達に目

くばせした。

——退却ですぜ。

グラシム・レオンチェヴィッチは心配さうにかれを眺めた。

——あんた知りませんか、ポーランド軍の印はどんなんですい？

——たしか一頭の鷲だ。

——どこで手に入れたもんだらう？

アフトノム・ペトロヴィッチはいま／＼しさうに頭の後を搔いた。

——結構な話だ、奴らは、——かれは暫く考へ込んでからさう云つた、——やれ占領だ、やれ退却だ。だがこちとらは政權が變る毎に、調子を合はせるのに頭をひねくらなければならぬて。

沈黙を破つて機關銃がカタ、カタ、カタツと響きを立て始めた。停車場わきで突然機関車が汽笛を鳴らした、やがてそつちの方角から重々しい砲聲がドカンと轟いた。重たい砲弾は唸り聲をあげて、空高く大氣を突き刺した。工場のかなたの路上に墜落すると、暗藍色の煙を蒙々と立て、道ばたの叢をひつ包んでしまつた。赤軍の散兵線は顔を擧め、おし黙つたまゝ後を振り向き／＼、街路を退却して行つた。

セリョージャの頬をエメラルドのやうな涙の粒がひんやりと流れた。遠ててその跡を拭ひとつた



かれは同志たちを振返つて見た。いや、誰にも見られはしなかつた。

セリョージャと並んで、製材所から来た背の高い瘠せ男のアンテク・クロボトフスキイが歩いて行つた。かれの指は銃の撃鐵にかけられてゐた。アンテクは心にかゝる事があるらしく、ムツツリとしてゐる。かれの眼がセリョージャの眼差しにぶつかると、アンテクは自分の胸の中をぶちまける……

——おれ達の家のもんはひどい目に合はされるだらうな、中でもおれんところは……。『ポーランド人のくせして、ポーランド軍團に手向ひやがる』つて吐かしてな。爺さんは製材所から追出された上に、鞭繩で散々にひつばたかれるだらう。おれ達と一緒に行かうと爺さんに話しては見たんだが、親爺には家のもんを置き去りにして行くだけの元氣が出ねえんだ。エーイッ、畜生、早えとこ奴らと一合戦出来たらな！——こう云つてアンテクは眼の上に落ちかゝつて来た赤軍の鐵兜を苛立たしさうに直した。

……さよなら、きたならしい、むさ苦しい小ツほけな町よ、不恰好な家々、凸凹した舗道！ さよなら、親しい人々、さよなら、ワリーヤ、さよなら、地下にもぐつた同志たち。赤の他人の、悪辣な、情容赦も知らぬ白系ポーランドの軍團が迫つてゐるのだ。

重油に燻つたシャツをつけた機関庫の労働者たちが悲しげな眼差しで赤兵を見送つてゐる。

——おれ達は又戻つて来るぞ、同志諸君！ ——胸とどろかせてセリョージャは叫んだ。



## 第八章



河は夜明け前の薄霧の中でどんよりと光り、岸邊の小石に當つてサラ／＼と音立てゝゐる。岸から真中頃までの河は穩かで、水面はまるで停止してゐるやう、灰色をしてキラ／＼と光つてゐる。河の中流は美しくおごそかな姿である。ゴーゴリの比べもののない「美しのドニエプル……」はこの河のことを書いたのだ。聳え立つた右岸は絶壁を形作つて水中に馳せ入つてゐる。岸邊は山をなしてドニエプルに衝き當り、あだかも河幅に動きを遮られて立止つてゐるかのやうに見える。遙か下方に見える左岸は斑らな砂に蔽はれてゐる。春の氾濫を終へたドニエブルがもとの河岸に戻つて行く途中で残して行つたものだ。

河邊の狭くろしい塹壕に身を埋めて、五人のものが地中に隠れてゐる。一同は突先きの鈍い「マキシムカ」機關銃の傍らに仲よく横になつてゐる。それは第七射撃師團の「前衛」秘密部隊だつた。機關銃のちきそばには、セリョージャ・ブルジャックが河に顔を向けて、腹匍ひになつてゐた。

ひつきりない衝突に力を失ひ、ポーランド砲兵隊の旋風のやうな砲火に撃退されて、キエフは昨

日占領されてしまつた。左岸へむけて移動が行はれた。陣地は堅められた。ポーランド軍もドニエブルを渡つて前進して來ることは許されなかつた。

多大な喪失をうけて退却をし、とう／＼キエフを敵の手に渡してしまつたことは戰士たちに重苦しい影響を與へた。勇躍圍みを突いてでた第七師團は森を通つてマリーン停車場附近の沿線に現れ、停車場を占領してゐたポーランド部隊に猛烈な打撃を加へて四散させ、森の中に追ひまくつてキエフに通ずる通路を自由にした。

美しの街を明渡してしまつた今となつては、赤兵たちも暗い顔をしてゐた。

ポーランド軍はダルニツァから赤軍部隊を撃退し、鐵橋ぎわの左岸にある小さな陣地を占領した。

しかしいかに一生懸命になつても、猛烈な逆襲をうけて、それ以上進むことは出来なかつた。

セリョージャは河の流れ行く様に見入つてゐる、そして勢ひ、想ひは昨日のことに馳せてゐた。

昨日の眞晝頃、一同を捉へた激怒に驅り立てられて、かれも亦白系ポーランド軍めがけて逆襲して行つた。昨日始めてかれは口髭のない一人の軍團兵と白兵戦を演じたのだつた。ポーランド兵はサーベルのやうに長いフランス式銃劍をつけた鐵砲を突出し、何ごとかつちつまの合はぬことを怒鳴り散らしながら、かれを目掛けて兎のやうに飛び掛つて來た。一瞬間、セルゲイは憤怒にカッと



開かれた眼を見つめた。もう一瞬間、そしてセルゲイは銃剣の先でポーランド兵の銃剣を殴りつけた。と、フランス式のキラ／＼光った刃はかたへに投げとばされた。

ポーランド兵はぶつ倒れた……

セルゲイの手は震へなかつた。かれは自分がこの先まだ／＼人を……すだらうといふ事を知つてゐる、あのやうに優しく愛することが出来、あのやうに厚い友情を持つことの出来るかれセルゲイが……。かれは悪辣な、残酷な若者ではない。しかしかれは世界の寄生虫どもに驅り立てられ、偽瞞され、悪意を以て咬し立てられたこれらの兵士が……。共和國に向つて野獸のやうな憎惡に燃えてのし掛つて來たのだといふことを知つてゐる。

そして、かれセルゲイは地上のものが互に殺し合ふことを止める日を近づけるために、殺してゐるのだ。

パラモノフが肩を叩く。

——行かうぢやねえか、セルゲイ、ちぎりに交替だ。

もう一年もの間、パーヴェル・コルチャーギンは輜重車や、大砲の前車や、片耳をもぎり取られた灰色の馬に乗つて故國をめぐつてゐた。大人になり、ガッチリして來た。數々の悩み、悲みの中に成長した。

重い彈藥盒で血がにじむまで摺りつけられた皮膚もいつの間にか元通りになつたし、銃の負草でできた胼胝の痕はもうゴツ／＼になつていつまでも残つてゐた。

この一年間にパーヴェルはさまざまの恐ろしいものを見て來た。自分同様、ボロ／＼の、裸も同じ恰好こそしてはゐるが、自分たちの……の政權を護つて鬭争しようとする消し難い炎に燃えた數千といふ他の戰士たちと共に、自分の故國を徒歩で前へ進み、後に退きして歩き廻り、旋風から離れてゐたのは僅かに二回きりだつた。

最初は腹部に負傷したため、二度目は一九二〇年二月の極寒の最中に執念深い激烈なチブスにやられた時だつた。

發疹チブスはポーランド軍の機關銃よりも猛威を振つて、ポーランド部隊と第十二軍の諸師團を襲つた。軍隊はポーランド軍の前進を阻んで、ほとんど全北ウクライナ一面の莫大な領野に散らばつてゐた。パーヴェルは癒つたかと思ふと直ぐさま、もとの部隊に戻つて行つた。

今、聯隊はカザチン、ウマニ間の支線にあるフロントフカ停車場附近に陣地を構へてゐた。

停車場は森の中にある。停車場の大きからぬ建物の傍らに、住民たちに投げ棄てられ、うち毀された小さな家々が身を寄せてゐた。この土地で生活することは不可能になつた。戦火が靜まつては湧き立ち、湧き立つては靜まるやうになつてからもう三年目だ。この間にフロントフカはありと凡



ゆる人々を見てきた。

又もや大衝突の機運が熟してきた。ひどく人員を失ひ、その一部は崩壊してしまつた第十二軍が、ポーランド軍の追撃に耐えかねてキエフに退却して行つた間に、プロレタリア共和國は勝利の美酒に酔ひしれてゐる白系ポーランド軍に徹底的打撃を加へる用意を整へてゐた。

遠い北コーカサスの彼方から、戦争史上曾て見たこともないやうな行進をつゞけて、戦火に鍛へられた第一騎兵隊所屬の諸師團がウクライナに馳せ参じてきた。第二、第四、第六、第十一、及び第十四砲兵師團が續々とウマニ地方に乗込んで来てわが戦線の後方に群れをなし、最後の闘ひに向ふ行きがけの駄賃にマフノの一味徒黨を路上から追拂つた。

一萬六千五百刀のサーベル、草原の炎熱に焼きつけられた一萬六千五百の戦士。赤軍の總司令部及び西南戦線司令部はこうした決死的打撃を準備してゐることを、ピルスツドスキイ將軍の部下に嗅ぎつけられないやう、凡ゆる注意を注いだ。共和國と各戦線の主脳部はこの騎兵の大集團を注意深く隠しておいた。

ウマニ區域では積極的行動をとることは禁止された。モスクワからハリコフの戦線本部へ、そこから又第十軍、第十二軍本部へと直通電信がひつきりなしに打續けられた。モールス機は細い電送紙の上に暗號命令をうち出した。「騎兵隊の集合にポーランド兵の注目を向けさすな」。ポーランド軍

が前進してきて、ブジョンヌイ騎兵師團を戦鬪に巻き込む危険が生じた時にだけ、積極的に戦火が交へられた。

焚火が赭いポロ布のやうに動いてゐる。煙が激しい輪をつくり、グル／＼螺旋状をなして消えて行く。煙の嫌ひな小蠅がすばやい群をなして、せか／＼と忙いで飛び去る。

遠く離れたところに、戦士たちが火を圍んで扇形をなしてゐる。焚火がかれらの顔を銅色にはてらしてゐる。

焚火ぎわの青みが、つた灰の中に小鍋が暖められてゐた。その中では湯が沸立つてゐる。燃えさかつた薪の奥から、狡猾な炎の舌が忍び出てきて、その先ッぽでだれかのモジャ／＼の頭の上を嘗めつけた。頭はふり拂はれ、不氣嫌ながなり聲が聞えた。

——エーイッ、畜生！

邊りのものは笑ひ出した。

ラシヤの詰襟服を着、刈り込んだ口髭をつけた年寄つた赤兵が、今しがた銃口の検査を終へ、太い聲で云つた。

——見ろ、若えのは學問に夢中で、火に焼かれても知らん顔をしてやがる。

——おい、コルチャーギン、何を讀んでたんだ、話してきかせい。



若い赤兵は焦げた髪の毛にさわつて見ながら微笑した。

——たいした本だぜ、同志アンドロシチューク。一度手にしたら最後、どうしても手放せねえ。コルチャーギンの隣りで背囊の負革を一生懸命にいちつてゐた鼻先のとがった若者は、齒で荒糸をくひちぎりながら、好奇心に驅られて尋ねた。

——で、だれのことを書いてるんだい？——そして軍帽のうち込んだ針に糸のきれ端を巻きつけながら附け加へた、——お色氣のことならとても好きなんだが、おらあ。

周りのものが腹を抱へて笑ひ出した。マトヴェイチユクがはりねづみのやうに削つた頭をもたげ、づるさうな眼を意地悪げにパチクリやりながら、若者に向つて云つた。

——當りめへよ、お色氣はえゝもんだ、セレダ。お前はいゝ男だ、繪に描いたやうだぜ！ お前に逢つた日にやどこの娘つ子だつて、踵を踏み外すこと、受合ひだ。たゞ一つ、鼻先きのとんがつてるのが玉に瑕だよ。だが、そりや手入れすりや直せるぜ。鼻ッ先に十フントもあるノヴィツキイ手榴弾をぶら下げてよ、一晚中垂らしておくんだ。

どつと湧き返る笑ひ聲に、機關銃車に繋がれてゐた馬がびつくりして鼻を鳴らした。

セレダは物懶げに振り向いた。

——お面めんなんか問題ぢやねえ、このお鍋かまが問題よ、——かれは意味ありげに自分の額を叩いてみ

せた、——現にお前ときたら、イラクサみてえな舌をしてやがるくせして、御本尊が大馬鹿三太郎だ。何をきいたつて判りやしねえぢやねえか。

今にも掴み合ひをおつばじめやうとした仲間をク、リノフが引離した。

——おいゝ、みんな何だつて咬み合ふんだ？ それよか、コルチャーギンに本でもよんで貰つたがいゝぞ、面白いもんならよ。

——やれゝ、バヴルーシャ！——四方から聲が起つた。

コルチャーギンは火のそばに鞍を近づけてそこに腰を下し、膝の上に小さい厚い本をくり擴げた。

——この本は、同志諸君、「オヴォード」つてえんだ。大隊軍事委員のところを手に入れたんだがね。おれはこの本に夢中になつてるんだ。おとなしく坐つてくれゝば、讀んでもいゝ。

——喋しゃべちよくれ！ どうした！ だれも邪魔なんかしやあしねえぞ。

軍事委員と一緒に聯隊長の同志プツィレフスキイが氣づかれないやうに焚火に近寄つて來たときには、十二對の眼は讀み手の上じつと注がれてゐた。

プツィレフスキイは軍事委員の方に頭を向けて、片手で兵士の群れを指さした。

——あそこに聯隊づき偵察兵の半數がある。あの中にある四人のコムソモルはまだほんの子供だ



が、どいつもこいつも、立派な騎士なみの役に立つ連中だ。ほら、あそこにある二人な、本を讀んでゐると、もう一人の奴はソレ、見えるだらう？ 狼みたいな眼をした奴だ。ありやコルチャーギンと熱火のイワンつて云つてな、いゝ相棒だ。だが二人はどうも胸の中で嫉妬し合つてゐておさまりが着かないんだ。以前はコルチャーギンがおれの第一の偵察兵だったが、今ぢや大いに危険な競争相手が出てきたわけだ。で今御覽の通り、眼立たぬやうにして政治活動をやつてゐるんだが、影響は實に大きい。かれらのためにいゝ言葉を考へ出したよ、——「青年親衛隊」。

——あの本をよんでゐるのが偵察兵の政治指導者か？——軍事委員が尋ねた。

——いや。政治指導者はクラメルだ。

ブヰイレフスキイは馬を進めた。

——今日は、同志諸君！——かれは大聲で叫んだ。

一同は振り返つた。鞍からヒラリと身を躍らした聯隊長は坐つてゐる兵士たちの方に歩み寄つた。

——焚火かね、みんな？——かれはゆつたりした微笑みを浮べて笑つた。と、いくらかモンゴリヤ人的な細い眼をしたかれの男らしい顔から荒々しさが姿を消した。

一同は仲のいゝ相棒のやうな様子で、親しく心から聯隊長を迎へた。軍事委員は更に先きに進まうとして馬上に止つてゐた。

ブヰイレフスキイはモウゼル銃の入つたケースを後に投げやり、コルチャーギンと並んで鞍の上に腰を下してから、さて口を切つた。

——一服やるか？ 役に立つタバコを持つとるぞ。

巻煙草を喫してから、かれは軍事委員に向つて云つた、

——先きに行つてくれ、ドロニン、おれは此處に残つてゐるから。もし本部に用ができたら知らせしてくれ。

ドロニンが行つてしまふと、ブヰイレフスキイはコルチャーギンに向つて申し出た、

——つゞけて讀んでくれ、おれも聞かう。

パーヴェルは終りの數頁をよみ了へると本を膝の上に置き、想ひに沈みながら炎に見入つた。

數分の間、だれ一人として一言も口をきくものはなかつた。みんなはオヴォードの死から受けた印象を忘れかねてゐた。

ブヰイレフスキイは巻煙草をスバ／＼やりながら、みんなが意見をだすのを待つてゐた。

——悲惨な話だ、——セレダが沈黙を破つた。——つまり世の中にはあんな人間もゐるつてえわけだ。人間はあんなに我慢出来るもんぢやねえだらうが、主義のためだとなると、何でもやらかせるもんだな。



かれは可成り興奮して話した。かれはこの本から大きなショックをうけた。

ペーラヤ・ツエルコフイ出身の靴屋の徒弟、アンドリュースャ・フォーミチェフは悲憤慷慨して叫んだ。

——坊主の野郎に逢へさへしたら、十字架で唇を切りさいてくれるになあ、あの糞野郎をその場でお陀佛にしてくれるになあ！

アンドロシチュークは棒片れで鍋をつゝいて、もつと火のそばに押しやつてから、はつきりと云ひ放つた。

——ちやんとした目当てがあつて死ぬつてえ事は大したもんだ。さうなると、人間てえもんには力が出て来る。もしも手前のやつてることが正しいこつたと思ふなら、我慢してでも死なゝけりやならねえくらゐだ。さうすりや勇氣も湧いて来るつてえもんだ。おれの知り合ひにある若造がゐるがな、ボライカつてえ名前の男だつた。で奴さんめ、オデッサで白軍にふん捕ると、いきなりカン／＼になつて小隊めがけてぶつかつて行つたもんだ。奴、銃剣を喰はない中に、自分の足下に手榴弾を叩きつけた。自分も粉微塵になつた替りに、邊りにゐた白軍の奴らを一塊りに打倒した。ところが奴と来た日にや、一寸見では何の役にも立たねえやうな男だよ。奴のことはだれも本に書いちやくれねえが、書くだけの事はあるぜ。おれ達の兄弟んちには立派な手合が山ほどゐるよ。

鍋を匙でかきませ、唇をとんがらかして匙で茶をすゝつてみてから話しつゝけた。

——だが犬死つてえ奴もある。名譽も何もねえ、汚らしい死にざまだ。イズヤスラフルつてえ、まだ御大名の時代に建てられた古めかしい町の城下で戦つたときの話したがな、ゴリン河にまたがつてる處だ。そこにポーランド寺院があつたが、要塞みてえでまるで近寄ることが出来ねえ。散兵線を敷いて、曲りくねつた小路を傳つて近づいて行く。おれ達の右翼はラトヴィア兵が守つてゐた。おれ達は舗道に飛び出して覗いてみると、鞍をおいた二頭の馬が、とある庭の柵に繋がれて立つてゐるぢやねえか。

で、おれ達あ、勿論こう思つたさ、——一つポーランドの野郎をふん捕へてやるぞつてな。おれ達は全部で十人ほどゐたが、中庭めがけて飛んで行つた。ラトヴィア軍の中隊長がモウゼル銃を握つて眞先きかけて遮二無二走つて行く。家まで馳せつける、扉が開く、中に入る。ポーランドの奴と思つてゐた當てが外れて、その反対よ。そこで何かやつてゐたのは味方の斥候でな。おれ達より一足先きに跳び込んでゐたんだ。見るとどうだ、ひどく面白くねえことが起つてゐるぢやねえか。證據は歴然、目の前で女を虐めてゐるんだ。そこはポーランド士官の家だつたもんで、奴の阿女を地べたにギユック／＼やつてたところなんだ。この一ぶ仔じゆうを見たラトヴィア士官はなにか國の言葉で怒鳴つた。そこにゐた三人はふん捉つて、中庭に引きづつて行かれた。おれ達ロシア人は二人つ



きりで、あとは全部ラトヴィヤ人だった。指揮官の名前はブレディスと云った。おれにはラトヴィヤ語は珍ブン漢ブンだが、見ると片をつけやうとしてる事だけは確かだ。このラトヴィヤ人てえのががつちりした鐵火な連中ときてる。奴らは石造の厩に引づつて行かれた。なみあむ、屹度あつさりやられちまふに違ひねえと思つたよ、おれは。ところが、ふん捉つた奴の中に、煉瓦みてえな面をしたとてものがつちりした若造がゐて、そいつが命ごひをして、バタ／＼もがくんだ。御恩は代々忘れませんとヘイコラやらかす。女のことと銃殺されるなんて！　ほかの二人も口を揃へて憐みを請ふ。

おれは一から十まで見てゐてゾツとした。ブレディスに馳けよつて云ふ、「同志中隊長、奴らは裁判處に裁かせたらどうだ。何だつて、奴らの血で手を汚すことがあるんだ？　町ぢあまだ戦闘は終つちや居ねえのに、こゝで奴らの勘定をつけやうつてえのか」。奴はおれの方を振り返つた拍子にしまつたことを云つちまつたと思つたね。奴ときたら、虎みてえな眼をしてゐる。モウゼル銃を齒に突きつけやがつた。おれは七年間戦つてゐるが、悪い具合に怖氣づいちまつた。この様子ぢや、うんもすうもねえ、殺されちまひさうだ。奴はおれに向つてロシア語でどなつたよ。ろくに聞きとれねえやうな言葉で、「旗は血に染つてるのに、こいつらはどうだ——全軍の恥ッさらした。盜賊の仕拂ひは殺されることだ」と、こゝうだ。

おれは耐らなくなつて中庭から通りに飛び出した。後の方で銃聲が聞えた。勿論、だらうぜ。散兵線に入つてつた時には、町はもうおれ達のものになつてゐた。まあさう云ふわけさ。犬死したつてえもんだ。その斥候ははれ、メリトポリー附近でおれ達の味方に加つた連中の中から出て居たんだがな。仕様のねえならすもんで、以前マフノの反動のところで働いたことのある奴らだ。

アンドロシチュークは足下に鍋をおろし、パンを入れた袋をひろげ始めた。

——おれ達の中によ、あゝ云ふやくざがブラ／＼してやがるんだ。やつぱり革命のために懸命になつてるやうな振りをしやがつて、そのくせ、みんなの面よこした。だが、見てるのは辛かつたよ。今でもまだ頭から抜けきらねえ、——かれは茶にとり掛りながら話を了へた。

騎兵偵察隊がやつと眠りについたので夜も更けてからだつた。眠り込んでしまつたセラダは鼻をならして慄へ聲を立てた。ブヰイレフスキイは鞍に頭をもたげて眠つた。政治指導者クラメルは何ごとか手帳に書きつけてゐた。

翌日、偵察から戻つてきたパーヴェルは馬を樹につなぐと、今しがた茶を飲み了へたばかりのクラメルをそばに呼んだ。

——なあ、君、こゝういふことをどう思ふね？　おれは第一騎兵隊に乗り換へやうと思ふんだ。あそこぢあこれから先、猛烈な働き場處があるからな。あそこに、あんなに一杯集つてきた連中は息



抜きに來たんぢやねえ。ところがおれ達と來た日にや、こゝで明けても暮れても一ツところにモゾ／＼してなけりやならねえんだ。

クラメルは呆れた顔をしてかれを眺めた。——乗り換へやうとはなんのこつた？ 赤軍と活動寫眞をごつたにするつもりか？ なんてえ眞似をするんだ？ おれ達がみんな、部隊から部隊へと跳び歩いたら、さぞかし面白いことになるだらうよ！

——おんなじ事ぢやねえか？ どこで戦つたつて？——パーヴェルがクラメルを遮つた。——ここだらうが、向ふだらうが。おれは戦線から脱走するつてえんぢやねえんだ。

クラメルは斷乎として反對しだした。

——ぢや規律はどうすると云ふんだ？ お前は、パーヴェル、萬事しつかりした男だ、だがどうもアナキーなどころがあるぞ。やりたい事をやつてのける。だが………は鐵の規律の上に築かれてゐるんだ。……—すべての上にある。そして各自は自分の氣の向いたとこにはなく、必要などころに行かなければならないんだ。プツィレフスキイに移動を禁止されたのか？ ぢやおしまひだ。

黄ばんだ顔をした脊の高い瘠せぎすのクラメルは興奮して咳き込んだ。印刷工場の鉛をふくんだ埃が肺の中にしみ込んでしまひ、頬は病身らしく紅を帯びることが屢々だつた。

クラメルが落ついたとき、パーヴェルは大きくはないが、はつきりした聲で云つた、

——全くその通りだ、だがおれはブデヨンヌイ騎兵隊に移る——さう決めたんだ。

あくる晩、パーヴェルはもう焚火の廻りには居なかつた。

隣り村の小學校わきにある小高い丘の上に騎兵たちが廣い圓を描いて集つてゐた。輜重車の尻に軍帽をせい一杯あみだにかぶつた元氣さうなブデヨンヌイ兵が手風琴を荒々しく引張つてゐた。手風琴が調子外れの喚き聲をあげると、ブカ／＼の眞赤な騎兵ズボンをはいて、得意になつて氣狂ひのやうにゴパック踊りをやつてゐた騎兵が足取りを亂して邊りの圓周の方によるめき出た。

物好きな娘や村の若者たちはたつた今自分たちの村に入りこんで來た騎兵旅團の勇ましい踊り手を見やうと、輜重車やとなりの籬の上によぢ登つた。

——頼むぜ、足なが！ しつかり踏みつける。さあ、やれ／＼、兄弟！ 手風琴屋、一發喰はせう！

だが、手風琴彈きの鐵蹄でもひん曲げさうな大きな指はのろ／＼とキイの上を動いた。

——クリャブコ・アフアナシイがマフノ軍に斬り殺されさへしなけりやなあ、——日焼けした騎



兵が残念さうに云つた、——一流の手風琴弾きだつたな。中隊の右翼を守つてゐたつげが。惜しい男だ。いゝ闘士だつたが、手風琴も大したもんだつたよ。

周りの輪の中にパーヴェルがまぎつてゐた。最後の言葉をきくと、かれは輜重車に飛んで行つて、片手を蛇腹にかけた。手風琴はおし黙つてしまつた。

——なんだ、てめえ？——手風琴弾きが横目でにらんだ。

足ながは立止つた。ブツ／＼云ふ聲が廻りに聞えた、

——どうしたんだ？ 何で止めたんだ？

パーヴェルは負革に手を伸した。

——貸してくれ、ちつとばか、捻つて見るぜ。

ブジョンヌイ兵は見知らぬ赤兵を疑はしげに眺めながら、ぐづ／＼と肩から負革を外した。

パーヴェルは慣れた手つきで手風琴を膝の上に投げかけた。波形をなした蛇腹がひらり／＼と振ちまげられ、或は高く、或は低く、手風琴の息のつゞく限り弾きまくつた。

おい／＼林檎、

どこへ行く？

非常警察

戻つちや來れぬ。

足ながは飛び廻りながらお馴染みの節を捉へた。そして両手を振り廻して、8の字を描いたり、勇ましく長靴の脛や、膝や、頸下や、額や、靴底やを掌でイヤといふほど叩き、最後には口を開いてポンと打ちながら、輪のふちを踊り廻つた。

手風琴は荒々しい酔ひしれたリズムで調子をとつて迸り出した。と足ながは狼のやうに輪のまはりを跳びはねながら、兩足を投げあげ／＼、ハア／＼息をはづませて云つた。

——イヒ、アハ、イヒ、アハ！

一九二〇年六月五日、數度の火の出るやうな短い衝突の揚句、ブジョンヌイ第一騎兵隊はポーランドの第三軍と第四軍の接合點で敵の戦線を突破し、通路を護つてゐたサヴィツキイ將軍の騎兵旅團を撃滅して、ルージンの方角に前進して行つた。

ポーランド司令部は戦線の裂け目をつなぎ合はせやうとして、目も止まらぬやうな早さで撃發部



隊をつくりあげた。ボグレピシチエ停車場のプラットフォームから下されたばかりの装甲タンクが五臺並んで衝突の現場に急行した。

しかし、騎兵隊は攻撃の用意を備へてゐたザルドニツアを迂回して、ポーランド軍の後尾に姿を現した。

第一騎兵隊の後をコルニツキイ將軍の騎兵師團が追撃してきた。ポーランド司令部は第一騎兵隊がポーランド後尾の最も重要な戦略的地點であるカザチンを目掛けてゐるに違ひないと考へたので、それを後方から撃滅する命令を與へてゐたのだつた。しかしそのために白系ポーランド軍の情勢は挽回しはしなかつた。翌日、戦線に開けられた穴は縫ひ合はされ、第一騎兵隊の後方の戦線は密閉されてしまつたが、後方陣地に強力な騎兵集團が現れ、敵の後方根據地を全滅させ、ポーランド軍のキエフ集團に襲ひ掛らうとしてゐた。騎兵師團は前進して行く途中、小さな鐵橋を爆發したり、線路を破壊したりしてポーランド軍が退却する途を奪つてしまつた。

捕虜の口から、ジトミールに軍本部があるといふこと——事實は戦線本部さへそこにあつたのだが、——を聞き知つた騎兵隊指揮官は重要な鐵道集中點であり、行政中心地であるジトミールとベルディチエフを占領することに決めた。六月七日の明け方には、早や第四騎兵師團がジトミール目掛けて突進してゐた。



すばらしい手風琴弾きを失つてしまふのを残念がつた戦士たちは集團的嘆願をだして、かれを中隊に採用して貰つた。



ある騎兵中隊に編入されたコルチャーギンは死んだクリャプコの替りに右翼に加つて疾駆して行つた。すばらしい手風琴弾きを失つてしまふのを残念がった戦士たちは集團的嘆願をだして、かれを中隊に採用して貰つた。

猛り立つた馬を馳りたて、ジトミール附近で扇のやうに散開した。サーベルが陽の光で銀色にピカ／＼閃き出した。

大地は震動し、馬は息をはづませ、戦士は鎧の上に突ッ立ち上つた。

地面が足下を見る／＼走り去つた。そして大きな町と庭とが師團を迎へて近よつて來た。町外れの庭々を跳び越え、中心地に突入して行つた。死神のやうに恐しい、もの凄い「やっつける！」の叫び聲が大氣をうち慄はした。

茫然としてしまつたポーランド兵は殆ど抵抗も試みなかつた。その土地の守備兵は撃碎された。

馬の頸筋にしがみつきながら、コルチャーギンは疾駆して行つた。かれと並んで、すんなりした脚の黒馬を飛ばしてゐるのは足ながだつた。

パーヴェルの眼の前で、勇敢なブチヨンヌイ兵が容赦ない一撃を加へて、銃を肩に投げかける隙も與へず軍團兵を……つた。

打鍛へられた蹄鐵がギシ／＼音立て、舗道の石をうつた。と突然、十字路の真中に機關銃が姿を現した。空色の軍服を着、四角いポーランド帽をかぶつた三人がそれにしがみついてゐた。襟にこみ入つた金モールをつけてゐる四人目の男は疾駆して來る連中を見ると、モッゼル銃を握つた手を突き出した。

足ながもパーヴェルも馬を引止めることは出來ず、死神の爪に引掛けられるやうに機關銃めがけて飛掛つて行つた。士官はコルチャーギンを覘つて發砲した……彈丸は頬の傍らを雀のやうに轉つて通り過ぎた、そして馬に真正面から衝突した中尉は、頭を石にうち突けて仰向けにぶつ倒れた。

その瞬間に、機關銃は熱病にかゝつたやうに遽てふためいて、奇妙な笑ひ聲を立て始めた。と、足ながは數十匹の山蜂に噛まれたやうに、黒馬もろともドオとばかりに打倒れた。

パーヴェルの馬は怖氣づいて鼻を鳴しながら、後足で逆立つと、打倒されてゐる人々の上を越えて、いきなり一ツ跳びに機關銃わきの兵士めがけて乗手を連れて行つた。と劍は火花を散らし弧を描いて、空色をした四角の軍帽にグサリと突き刺さつた。

再びサーベルが宙を切つて飛び、あはやもう一つの頭上に打下されやうとしたが、いきり立つた馬は傍らに跳ねのいてしまつた。

まるで山中を荒れ狂ふ河のやうに、騎兵中隊は十字路に流れ込んできた。そして幾十刀とないサーベルが宙にのぼされた。



牢獄の長い狭い廊下に叫び聲がひびき渡つた。

監房毎、超満員に押し込められた人々の疲勞困憊した面に動搖が起つた。町では戦ひが始つてゐる——だがそれは自由の知らせだ、何處からともなく味方のものが侵入して來たのだ、などとどうして信じてゐることが出來やう。

もう中庭に銃聲がきこえる。廊下を突走る人々。と突然、懐しい、何んとも云へないほど懐しい聲が、——「同志、出て來い」。

パーヴェルは小つぼけな窓のある閉めきつた扉口にかけ寄つた、幾十とない眼がそこに注がれてゐた。かれは憤然として銃床で銃前を殴りつけた。一撃、又一撃。

——さて、おれが爆弾でやる、——ミローノフがパフカをおし止め、ポケットから手榴彈を取出した。小隊古參兵のツイガルチェンコが手榴彈をもぎ取つた。

——待て、氣でも違つたのか？ いま鍵を持つて來るとこだ。爆破するわけにやいかねえ、鍵で開けるんだ。

さう云つてゐる間に監守共が、鞭で追立てられながら廊下傳ひに連れて來られた。廊下はボロボロの着物をき、身體を洗つた事もない人々で一杯になつた。かれらは氣も狂はんばかり喜び合つた。

大きな扉を開けたパーヴェルは監房の中に飛び込んで行つた。

——同志諸君、釋放されたぞ。おれ達はブヂョンヌイの部下だ。町はおれ達の師團に占領されてゐるんだ。

涙に眼を曇らしたどこかの女がパーヴェルに飛びつき、身内のものか何かのやうに抱きしめると、よよとばかりに泣きくづれた。

ポーランド軍のために石の牢屋に叩き込まれ、銃殺か絞首臺かと待つてゐた五千七十一人のボルシェヴィキと二千百の赤軍政治部員を救ひ出したことは、師團の戰士たちにとつて凡ゆる勝杯、勝利よりも尊いものだつた。七千の革命家にとつて、光のない夜は一躍して陽の燦々と輝いた六月の暑い日と變つた。

監禁者の一人で、レモンの皮のやうに眞黄色な顔をした男が喜ばしげにパーヴェルに跳びついた。それはシェベトフカの印刷工場で働いてゐた植字工のサムイル・レッヘルだつた。

パーヴェルはサムイルの話聞いた。かれの顔は見る／＼灰色に蔽はれた。サムイルはなつかしい町で起つた流血の慘事を話してきかせた、そしてかれの言葉は鏗解した金屬の一滴、一滴のやう



に心に落ち掛つてきた。

——おれ達は夜中にみんな一度にふん捕つた、味方のふりをしてゐた犬に裏切られたんだ。おれ達はみんな戦時憲兵の袋の鼠にされた。ひどい殴り方をしやがつたよ、パーヴェル。おれは一番少ししか苦しまなかつた。殴られたかと思ふと死んだやうになつて、床の上につんのめつちまつたんでな。だが外の連中はもつとガツチリしてゐた。何一つ隠立てすることもなかつた。おれ達のことには洗ひざらひ憲兵隊に筒抜けになつてゐたんだ。おれ達の足取りまでちやんと知られてゐたんだ。仲間中に裏切者がゐるのに気がつかなくつたんだからな！ おれにや、あの時のことを話すわけにやいかねえ。パーヴェル、お前の知つてゐる大勢のもんがゐるたよ、ワリーヤ・ブルジャック、郡内のある町から来た十七のまだほんの娘つ子のローザ・グリツマン、人を信じるやうな眼をした娘だつた。それからサーシャ・ブンシャフト、ほら、おれ達のとこで植字をやつてゐたひどく元氣な若造よ、しよつ中、親爺のボンチ畫を描いてゐた奴だ。うん、その奴さんとまだ中學生が二人、ノヴォセリスキイとトゥジツツ。みんな、お前の知つてゐる連中だ。郡内の町や地方から來てゐたもの全部だ。やられた者はみんなで二十九人、その中女が六人ゐた。みんなは獸物のやうに痛めつけられた。ワリーヤとローザは最初の日にもう手ごめにされてしまつた。みんなで寄つてたかつて、げじくめ、思ふ存分慰みもんにしやがつたんだ。半死半生になつて監房に曳づつて來られた。それからと云

ふもの、ローザは妙なことを口走り出したが、四五日たつとすっかり氣が變になつてしまつたんだ。氣が變になつてもまだ本氣にされず、たらをやつてゐるんだと云ふんで、取調べ毎にひどい目に合はされた。銃殺された時ときたら、恐ろしくつて見ちや居られなかつた。顔はぶん殴られた跡がどす黒くなつてゐる、妙な氣の狂つた眼をしてゐる——まるで婆さんだ。

ワリーヤ・ブルジャックは最後の瞬間まで頑張り抜いた。みんな立派な闘士として死んで行つた。どうしてあんな力が出たのか、おれには判らねえ位だ、だがパーヴェル、みんなの死様が話せるとでも思ふのか？ そんな事は出來やしねえ。何ともかんと云ひやうのねえほど、むごたらしい死様だつたよ……ブルジャックは一番危険なことに關り合つてゐた、つまりポーランド本部の電信手と連絡をつけてゐたんだ。奴は郡内に連絡のために派遣されたが、ガサを喰つて手榴彈を二挺とブラッキング一挺發見されたんだ。例の犬から手渡しされた手榴彈だ。本部爆破の陰謀計劃をデツチあげる手順がちやんと出來上つてゐたわけだ。

おい、パーヴェル、最後の日のことはおれには話せねえ、だがそれでもと云ふのなら話さう。戦時裁判が確定した、ワリーヤと外二人は絞殺、残りの同志たちは銃殺。

おれ達が仕事をして廻つたポーランド兵たちはそれより二日前に判決を下された。

戦時前ロツジイで電氣組立工をしてゐた無線電信係の若い伍長スニェグールコは、祖國を裏切り、



兵士の間で………の宣傳を行つた廉で銃殺の刑を云ひ渡された。かれは助命嘆願書も出さず、宣告をうけてから二十四時間内に銃殺された。

ワーリヤはかれの事件の證人として召喚された。ワーリヤの話によると、スニェグールコは………の宣傳をしたことは認めるが、祖國に對する裏切りの罪を負はされるわけには行かぬと、きつぱり云ひきつたさうだ。奴はこう云つたさうだよ、——「おれの祖國はポーランド………：………國だ。さうだ、おれはポーランド………員だ。おれは無理やり………にされた。で、貴様らの手でおれと同じやうに戦線に驅り立てられて来た………たちの眼を開けてやつたのだ。そのためにおれの首を絞ることは出来るだらう、だがおれは斷然祖國を裏切つたことはないぞ。たゞお互の祖國が違ふのだ。貴様らの………祖國、おれのは………：………。そしておれは深く信じてゐる。このおれの祖國はやがてやつて来るだらう。そしてこの祖國においては、おれを裏切り者と呼ぶものなどは一人もなくなるだらう」。

判決を下した後、おれ達はみんな一緒に監禁された。そして死刑執行前に監獄に移された。夜中に監獄の向ひの病院ざわに絞首臺の用意がされた。絶壁になつてゐる道路から僅かばかり離れた森の直ぐそばに銃殺の刑場に選んだ。おれ達を一緒くたに投げ込む穴もそこに掘られた。町には判決文が貼付けられ、みんなに知れ渡つてゐた。ポーランド人は白晝群衆の面前でおれ達

の制裁をやることに決めた、みんなに見せつけて怖氣づかせやうと云ふのだ。そして朝つばらから絞首臺めがけて町から群衆を驅り立てた。怖いもの見たさに出掛けて行つた。絞首臺の邊りには物凄しい群衆が集つた。見渡すかぎり人の頭、頭。監獄は丸太の柵がめぐらされてゐるんだ。その監獄わきのところは絞首臺をいくつもおつ立てやがつたんで、ワア／＼いふ人聲がおれ達に聞えて来るぢあないか。道路の後に機關銃を備へつけ、近邊の憲兵は馬に乗つてゐるものも、ゐないものも一人残らず驅り集められた。全大隊が野菜畑や通り通りに散兵線を敷いてゐた。絞殺の宣告をうけたものを入れる特別の穴が絞殺臺のすぐわきに掘られた。おれ達はたまに一言二言交はすだけで、黙つたまゝ最後を待つてゐた。前の晩に何もかも話し合ひ、同時に別れの言葉も交はし合つた。たゞローザだけが監房の隅でなにかわけのわからぬことを口ずさみながら獨り言を云つて居た。手ごめにされ、殴りつけられ、責め訶さいなまれたワーリヤは歩くこともならず、大概は寝てゐた。地方の女………は生みの姉妹のやうに抱き合つて別れを惜んでゐたが、耐えきれなくなつたか聲をあげて泣き出した。郡のステパーノフは力士のやうに強い若者で、捕まるときにも逃げ廻りながら憲兵を二人も傷けた剛の者だが、女の同志たちに根強く云つてきかされた、「涙を見せちや駄目だぞ、同志諸君！泣くんならこゝで泣いておけ、向ふに行つてからは泣くなよ。血みどろな犬めらを喜ばすこたあねえ。どつち途、容赦されつこはねえんだ、どつち途死ななきやならねえんだ、だから立派に死なう



ぢやないか。おれ達の中から、へえつくばる奴なんか一人も出さねえやうにな。同志諸君、覚えておけよ、立派な死様を見せるんだぞ」。

やがておれ達を連出しにやつて来た。變態性慾で、狂犬のやうな諜報部長のシュワルコフスキイが先頭に立つてゐた。かれは自分が………にするか、でなければ、憲兵たちに………おいて楽しんで見てゐるやうな男だつた。監獄から道路を越えて絞首臺に行く道は憲兵の人垣が築かれてゐた。黄色い肩章をかけてゐるので「カナリヤ」と呼ばれてゐた憲兵どもは諸刃の劍を露き出しにして並んでゐた。

銃床で叩かれ、監獄の中庭に逐立られたおれ達は四人づゝ整列させられると、門が開いておもてに曳き出された。おれ達は絞首臺の正面に突立たされた、同志の最後を見物させられ、やがてこつちの番がやつて來るといふ仕組みなのだ。太い丸太を組み合はせた絞首臺は高々と聳えてゐる。その上には太い撚り繩の結び目が三つぶらさがり、段々のついた臺がとつばらひになつてゐる。柱に寄せかけてある。人波がざわ／＼とかすかな音を立て、揺れ動く。眼といふ眼がこつちに注がれてゐる。知合ひのものが見えるくらゐだ。

かなり離れた入口の段々の上にはポーランドの小貴族連が雙眼鏡を手にして集つてゐる、その中には士官もまざつてゐる、ボルシェヴィキの首をくゞられる様を見物に來たのだ。

足下にはやんわりした雪、森は眞白になり、樹々は綿を撒きかけられたやう、ヒラ／＼舞ふ雪片はゆつくりと落ちて來て、おれ達のほてつた顔にあたつては消えて行く。絞首臺も雪に吹き曝されたまゝだ。おれ達みんなは殆ど着物も脱がされてゐたが、だれ一人骨を刺すやうな寒さを感じるものはない。ステパーノフなどは靴下一枚で立つてゐたが、それに氣付きさへしない。

絞首臺の傍らには軍事檢察官と上官たちが並んでゐる。ワリーヤともう二人の絞殺に決められた同志が最後に監獄から引張り出されてきた。三人は一緒に腕を組んでゐた。歩く力もないワリーヤを眞中に挟んで同志たちが抱きかゝへてゐた、だがワリーヤは「立派な死様を見せるんだぞ」といふステパーノフの言葉を想ひ起して眞直ぐに歩いて行かうと懸命になつてゐた。編んだジャケット一枚で、外套も着てなかつた。

シュワルコフスキイは腕を組んで行くのが癪に障つたのか、歩いて行く連中を突き飛ばした。ワリーヤは何ごとか口走つた、とその言葉の仕返しに、馬に乗つた憲兵が力一杯鞭を振つてかの女の顔を殴りつけた。

群集の間にまざつてゐた一人の女がもの凄いい叫び聲をあげたかと思ふと、氣狂ひのやうに怒鳴りつゞけながら警戒線を突破して、歩いて行く同志たち目がけて飛びだして行つた、しかしその女は引捉へられ、どこかに曳きづつて行かれた。きつとワリーヤのおつかさんだらう。絞首臺が眞近に



迫つたとき、ワーリヤは歌を歌ひだした。おれは生れてからあんな聲を聞いたことはない——あんなに熱情をこめて歌のうたへるものは死に立向つて行く人間だけだ。「ワルシャワ……」を歌ひ出すと、二人の同志たちもそれに聲を合はせた。騎兵の鞭がとんだ。思ひやりもなく猛り立つた奴らに散々殴りつけられた。だが三人はいくら殴られても、まるでこたへないやうだつた。ぶつ倒されて、づた袋かなにかのやうに絞首臺に曳づつて行かれた。大急ぎで宣告文が読みあげられ、結び目に………始めた。その時おれ達は歌ひ始めた、

.....

四方八方からおれ達めがけて飛びついて来た、一人の兵士が銃床をぶちつけて柱を臺から引離すと、三人とも結び目に………のを、おれはやつとの想ひで見ることが出来た………

おれ達十人は壁際に突立たされたときになつて、大赦によつて死刑を免除し、二十年の懲役に處すといふ宣告文を読みあげられた。外の十七人は銃殺された。

サムイルは自分の首を絞められたかのやうにシャツの襟をひきむしつた。

………三日間も下ろさなかつた。絞首臺のわきには晝も夜も警備兵が立つてゐた。や

がておれ達の監房に新たに逮捕された仲間が連れてこられた。奴らはこういふぢやねえか——「四日目に一番重たい同志トポリチンが落つこちた、で漸くほかの死體も外してその場に埋めてしまつた」。

だが絞首臺はいつまでも立てられてゐた。おれ達はこゝに連れて來られる途中それを見た。こんな具合に結び目をぶらさげ、新しい犠牲を待つて突立つてゐやがるんだ。

サムイルはどこかあらぬ方をちつと見つめて、口をつぐんだ。パーヴェルは話が終つたのにも氣づかなかつた。

かれの眼の中には、物凄い頭を斜め後ろに垂れかけたまゝ、黙つて揺れ動いてゐる三人の………まざくくと浮び上つてきた。

通りでは激しく集合喇叭が吹き鳴らされてゐた。

——出やう、サムイル！

捕虜にされたポーランド兵が騎兵隊に取圍まれて通りを歩いて行つた。監獄の門前に聯隊軍事委員が立つてゐて、軍隊手帖に命令を書きつけてゐた。

——これを持つてつてくれ給へ、同志アンチーポフ——かれはぶんぐりした中隊長に書きつけを渡した。——出發の用意をして、捕虜は全部ノヴォグラトド・ヴォリンスクの方角に向けてくれ給



へ。負傷者は手當てをし、馬車にのせて、同じ方角に向はすこと。町から二十露里ほどの地點まで引張つて行つたら逃がしてやるが、奴らに掛り合つては居られん。捕虜の取扱ひには注意して、亂暴なことは絶対にしないやう。

鞍に跨りながらパーヴェルはサムイルの方を振り向いた。

——おい聞いたか？ 奴らはおれ達の仲間の首を縊りやがるつてえのに、こつちぢや奴らを亂暴しないやうにして、仲間のところに送り届けやうつてんだ！

聯隊長はかれの方に頭を振向けてヂツと見つめた。パーヴェルは聯隊長が獨り言のやうな風をして、斷乎とした調子で吐き出すやうに云つたのをきいた。

——武装解除された捕虜に亂暴な眞似をする奴は銃殺する。おれ達は白軍とはわけが違ふ！

やがて、門前から出發して行きながらパーヴェルは、全聯隊の前で讀み上げられた革命軍事ソヴェートの指令の最後の言葉を想ひだした。

「労働者農民の國は……軍を愛してゐる。國は……軍を誇りとしてゐる。國は軍旗に唯一つの汚點もつかない事を要求してゐる。」

——唯一つの汚點も、——パーヴェルの唇が嚼く。

第四騎兵師團がジトミールを占領した丁度同じ頃、オクニヴォ村方面では同志ゴリコフの突撃集團に編成されてゐる第七射撃師團第二十旅團がドニェブル河を堅めてゐた。

第二十五射撃師團とパンキール騎兵旅團とから編成されてゐた集團はドニェブルを涉りイルシ停車場附近でキエフ・コロステニ間の鐵道を遮斷せよといふ命令をうけてゐた。この作戦でポーランド軍はキエフから退却する唯一の通路を切斷されてしまつた。この渡渉の際、シェペトフカ青年同盟組織の一員、ミーシャ・レフチュニコフは人知れぬ最後をとげた。

危つかしい船橋を傳つて馳けて行つたとき、山向ふから物凄しい音を立て、飛來した砲彈が頭上を飛びこえて水を八つ裂きにした。と、その瞬間に船橋のボートの下にミーシャの姿が消えた。水はかれをガブリと呑み込んだまゝ二度と戻してはくれなかつた。たゞ底の毀れた軍帽をかぶつた白つ茶けた毛のヤキメンコといふ番兵が愕いて叫び聲をあげただけだつた。

——なにボヤ／＼してゐるだよ？ ミーシュカが牛みてえにペロ／＼水喰ほうとして、はまり込んだぞ！——かれは愕然として暗い水を見つめて立止らうとしたが、後から突つかけて來た連中がかれを押しやつた。

——何をポカンと口開けてやがるんだ、間抜け？ 前へ進んだり！

同志のことを思ひ込んでゐる場合ではなかつた。旅團はそのために遅れてしまつた、外の部隊は



もう右岸を占領してゐた。

そしてセリョージャがミーシャの最後を知つたのは四日後のこと、旅團が戦闘の結果ブッチャ停車場を手に入れ、戦線をキエフの方に向け、コロステン突破を企てたポーランド軍の猛烈な襲撃を持ち耐えてゐた最中にだつた。

セリョージャと並んで、ヤキメンコが散兵線を敷いて横たわつてゐた。氣も狂はんばかりの射撃を中止し、やつとのことで赤熱した銃の遊底を開け、頭を地上に屈めながら、セリョージャの方に向き直つた。

——鐵砲も中休みしてえとよ、まるで火みてえだ！

セルゲイは銃聲に妨げられて、辛うじてかれの云ふことを聞いた。幾分鎮つたとき、ヤキメンコはなぜか、かいつまんで報告した、——ときに、お前の仲間がドニエプルで溺れただぞ、おらあ仕舞えまで見ることも出来んかつたがの、間違えて水ん中さ落っこちただ、——かれは話し終へると、片手で遊底に觸つて見、背囊から鐵環を引張り出すと、機敏にそれを銃につめ込み始めた。

ベルヂーチェフ占領に向けられた第十一師團は町でポーランド軍の死にももの狂ひの抵抗に出喰はした。

街々では血腥い戦闘が開始された。機關銃が縫ふやうに彈丸を降りそゞいで、騎兵隊の道を阻ん

だ。だが町は占領され、撃滅されたポーランド軍の殘黨は逃走した。停車場の列車編隊が捕獲された。しかしポーランド軍にとつて最大の打撃はポーランド戦線の火力の據り所である幾百萬といふ砲彈を爆破されてしまつた事であつた。町の硝子は細かい粗石のやうにまき散らされ、家々は爆發に逢つて、ボール紙作りのやうに打慄へた。

ジトミールとベルヂーチェフの打撃はポーランド軍にとつて搦め手からの打撃だつた、でかれらは鐵の輪のやうな包圍を破り、捨身になつて血路を開いて、キエフから二筋の奔流をなして遶てふためいて退却して行つた。

パーヴェルは切り離された個人といふ感じをなくしてゐた。この間中、火の出るやうな合戦が續けられた。かれコルチャーギンは大衆の中に熔け込んでしまつた、戰士たちの誰でもがさうであるやうに、「自分」といふ言葉は忘れられ、たゞ「自分たち」だけが残つた。自分たちの聯隊、自分たちの中隊、自分たちの旅團。

そして事件は次から次へと旋風のやうな速さで運び去られた。毎日、新しい事件が運んで來られた。

ブヂョンヌイ騎兵隊は雪崩れをうつて、立て續けに一撃また一撃、全ポーランド後方部隊を撃破して行つた。勝利に酔ひしれ、猛りに猛り立つた騎兵師團はポーランド後方部隊の心臓、——ノヴ



伸びあがつて、後を振りむいた。その瞬間にパーヴェルはまるで風に吹き飛ばされたやうに馬から跳び降りた。

——アルチョム、兄貴！

身軀中、重油だらけとなつた機關手は大急ぎで油差しを下に置くと、若い赤兵を熊のやうに抱きしめた。

——パフカ！ この野郎！ お前だつたのかよ、これが？——かれは自分の眼を疑ふやうに叫んだ。

装甲列車指揮官はびつくりして、この光景を眺めてゐた。砲兵隊の赤兵たちは笑ひ出した。

——見ろよ、兄弟出會ひの場だ。

八月十九日にリヴォフ地方で行はれた戦闘の最中に、パーヴェルは軍帽を落してしまつた。かれは馬を止めた、だが前方では數個中隊がポーランドの散兵線と白兵戦を演じてゐた。狭間の叢の間をデミードフが飛んできた。河つぶちに馳け下りながら怒鳴り立てた、

——師團長がやられたぞ！

パーヴェルは愕然とした。レトツノフが戦死した、あの男々しい師團長が、この上もなく勇敢な同志が……。師團長を失つて氣も狂はんばかりの憎惡に燃え立つた全中隊は、ポーランド小隊を滅多斬りにした。

逃走するものを追つて野原を突走つて行つた、だがその時には既に砲兵隊が敵兵めがけてぶつ放してゐた。榴霰弾が死を灌ぎかけながら、大氣を引裂いた。

パーヴェルの眼の前で緑の炎がマグネシウムのように閃き、耳を劈くやうな轟音が聞えたかと思ふ間もなく、赤熱した鐵が頭を焼いた。大地はもの凄い勢で妙な具合にぐる／＼廻り出し、やがて横ッ倒しに回轉しだした。

パーヴェルは藁屑かなにかのやうに鞍から叩き落された。鹿毛馬の頭ごしに轉げ落ちると、いやと云ふほど、地面に身體をぶつけた。

間もなく夜がやつてきた。



第九章



猫の頭ほどもあると思はれる赤黒い眼を飛び出さした章魚、真中は緑色をしてゐて、生々した光がチカ／＼輝いてゐる。章魚は何十本もある脚を蠢めかしてゐる。鱗皮をガサ／＼と動かして嫌な音を立てながら蛇の塊りのやうに、のらりくねりする。章魚は動きだす。眼のすぐそばに見える。章魚の脚が身體中を匍ひ廻つた、冷たいくせに、いら／＼のやうに灼きつける。章魚は螫を引伸ばす、螫は蛭のやうに頭に吸ひつき、ぶる／＼慄へて身を締めながら、血を吸ひとる。かれは自分の體内の血が章魚の胴に流れ込み、相手がみる／＼膨らんで行くのを感じる。螫はいつまでもいつまでも吸ひあげる。そして螫に吸ひつかれたところは頭が堪らなく痛い。どこか遠い／＼とところで人聲が聞える。

—今、脈はどうかね？

と、もつと小聲で女の聲が答へる。

—脈は百三十八。體温は三十九度五分。謔言を云ひつゞけてゐます。

章魚は姿をかき消したが、螫でやられた痛みは抜けない。パーヴェルはだれかの指が、かれの首から上に觸れてゐるのを感じる。かれは一生懸命に眼をあげやうとするが、眼が重くてそれを引離す元氣もない。身體の中は火のやうに苦しい。

水、あゝ水がのみたい。かれは直ぐにも立上つて鱗腹のみたい。だがどうして立上らないのだ？動かうとはして見たものゝ、他人の身體のやうに云ふことを聞かない、自分の身體ではない。おツかさんが直ぐ水を持つて来てくれるだらう。かれはかの女に向つて云ふ、「水がほしい」。何ものかが直ぐそばでござ／＼する。また／＼章魚が忍びよつて來るのではあるまいか？ ほら見ろ、ほら、真赤な色をした章魚の眼……遠くから、かすかな聲が聞える。

—フローンヤ、水を持つてきてくれ！

「だれの名前だらう、あれは？」パーヴェルは想ひださうと努めるが、懸命になつてゐる中に暗がりの中に落ち込む。そこから浮び出して來ると、又もや想出すことは——「水がのみたい」。人聲が聞える。

—この分なら氣がつくだらう。

と、今度は優しい聲がもつとはつきりと、近くで、



——水がのみたいんですか、患者さん？

「まさかおれが患者だなんて、それともありアおれに云つたのぢやないのかしら？ さうだ、おれはチプスに罹つてるんだ、さうだつたんだ。」そして三度また臉をあげやうと努めた。とう／＼思ふやうになつた。細く開かれた眼の中に映つた最初のは頭の上の赤い球だつた。だが見てゐる間になにか薄暗いものが蔽ひかぶさり、かれの方に身を屈める、と唇はコツプの堅い縁を感じる、つづいて潤ひ、生き返るやうな想ひの潤ひ！ 体内の火は鎮まる。満足げに囁いた。

——これによしと。

——患者さん、私が見えますか？

かれの眼の前に立つてゐる薄暗いものがさう囁いてゐるのだ、と早や眠り込まうとしながらも、それでもやつとの想ひで答へることが出来た。

——見えないが、聞える……

——この男が盛り返さうとは思へなかつたよ、誰でも。だが、見給へ、命にしがみついて取止めたぜ。丈夫な體質だ、全く驚くよ。ニーナ・ウラデーミロヴナには自慢されても仕方ないな。文字通り生き返らせたんだから。

と、興奮した女の聲が、

——あゝ、あたし、とても嬉しくつて！

十三日間の人事不省の後、コルチャーギンは意識をとり戻した。

若々しい肉體は死にたがらなかつた、そして力は次第々々に流れ込んで行つた。それは二度目の誕生だつた。すべてが新しく、物珍しく思はれた。たゞ頭だけはどうにもならないやうな重さで、ギプスの箱の中にじつと横へられてゐて、そこから動くだけの元氣は出なかつた。しかし肉體は感覺を取戻し、手の指も伸ばしたり縮めたり出来るやうになつた。

附屬衛戍病院で働いてゐる年少の女醫ニーナ・ウラデーミロヴナは眞四角な自分の部屋におかれた小さな机に向つて、ライラック色の蔽ひをした手帳をバラ／＼めくつてゐた。そこには短い覺えが右下りの字で細々と書き込まれてゐる。

「一九二〇年八月二十六日



今日、病院列車から重傷者の群が運んで來られた。窓際の隅にある寢臺に、頭を割られた赤兵を寝かした。やつと十七才の少年だ。ポケットの中に入れてあつたかれの書付けの束を、醫者の覺えがきと一緒に封筒に入れて渡された。名前はパーヴェル・アンドレーヴィッチ・コルチャーギン。中に入つて居たもの、——ポロ／＼になつたウクライナ………員章第九六七號、引裂かれた赤軍手帳、聯隊命令の寫し。そこには、勇敢に偵察を遂行した赤兵コルチャーギンに對し感謝の意を表すると書かれてゐる。それから持ち主の手で書かれたらしい紙片、

「同志諸君に頼む、おれが戦死したときには、内のものに知らせてくれ、シエベトフカ町、機關庫内、アルチョム・コルチャーギン宛。」

八月十九日、破片に當り負傷、人事不省。明日、アナトリーイ・ステパーノヴィッチの診察がある筈。

八月二十七日

今日、コルチャーギンの傷を見た。非常に深く、頭蓋が破壊されてゐる。そのために頭の右側が

全部痲痺してゐる。右眼に出血、眼は腫れ上つてゐる。

アナトリーイ・ステパーノヴィッチは炎症を避けるため、眼を抉り出さうとしたが、私は腫れがひく望みがまだあるからと云つて、さうしないやうに頼んでみた。賛成してくれた。

私はことさらに美的感情に曳かれた。青年は生き返るかも知れない。眼を抉つて片輪にすることはない。

負傷兵はうはごとを云つて七轉八倒するので、徹夜で付き切つて居なければならぬ。私は多くの時間を献げる。私にはかれの若さが可哀いさうでならない。出来ることなら、死の手から若さを奪ひ返してやりたい。

昨日、交替後、數時間病舎ですごした。かれが一番重い。うはごとを聞く。まるで正氣のやうなうはごとを時々云ふ。私にはかれの生活をいろ／＼と知ることが出來た、しかし、時々恐しい悪口をつく。その罵りかたの物凄さときたら。かれの口からそんな物凄しい悪口をきくと、なんだが胸が痛む。アナトリーイ・ステパーノヴィッチの話だと助らないと云ふ。爺さんはブツ／＼憤慨してゐる。——「わしには判らん、まるで子供みたいなのを軍隊に入れるなんて、全く堪らん。」



八月三十日

コルチャーギンは相變らずまだ正氣づかない。助かりさうにもない連中を收容した特別病舎にゐる。看護婦のフローシャが殆ど一時も離れないやうにしてゐる。フローシャはかれを知つてゐることが判つた。いつかずつと以前に一緒に働いてゐたことがあるのださうだ。ほんとに親切にあの患者の面倒を見てくれる。今となつては、絶望状態だといふことを私も感じる。

九月二日

午後十一時。今日はすばらしい日だ。私の受けもつてゐるコルチャーギンが正氣づいた、生き返つた。峠は越えた。この二日間、家に歸らなかつた。

今はこの悦びを傳へることが出来ない、また一人助つたのだ。私たちの病舎では死人が一人減つたのだ。眼の廻るやうな私の仕事の中で、一番うれいのは患者が恢復してくれることだ。みんな、子供のやうに私に頼つてゐるのだもの。あの連中の友情は誠實で、飾り氣がない、そして別れると

きにはいつも泣けてしまふ。一寸おかしい話だが、これは本當のことだ。

九月十日

家の人宛にコルチャーギンが出す最初の手紙を今日代筆した。輕傷で、すぐに癒るだらうから、そしたら歸ると書いた。たくさん出血したので、綿のやうに青白く、まだとても衰弱してゐる。

九月十四日

コルチャーギンが始めて笑つた。いゝ笑顔だ。ふだんは年に似ず亂暴だが……。驚くべき勢で恢復して行く。フローシャとは仲がよい。よくベットに寄り沿つてゐるのを眼にする。どうもフローシャが私のことを話したらしい。勿論ひどく褒め立てたらしい、だもんだから患者は私が入つて行く、ほんの氣がつくくらゐ、笑つてみせる。昨日こんなことを訊いた。



——そりアどうしたんですか、先生、手の黒いあざは？  
私はそれがかれの指痕だといふことを云はすにゐた、うはごとの最中、いやと云ふほど私の手を握り占めたその痕なのだ……

九月十七日

コルチャーギンの額の傷はよくなつた。患者が繃帯を換へるときの底知れぬ辛抱強さには、私たち醫者仲間もほと／＼感心してゐる。

普通なら、かういふ場合には随分呻いたり、我儘を云つたりするものなのに、あの人ときたら黙つてゐる。傷口にヨードを塗られると、絃のやうに身體を張りきらせる。よく意識を失ふことはあるが、さうでない時はこれまでに呻き聲一つ立てたことがない。

みんなも知つてゐることだが、コルチャーギンが呻き聲をあげたら、意識を失つた證據になつてゐる。どこからあんな頑張りが湧いてくるんだらう？ 私には判らない。

九月二十一日

コルチャーギンが車に載せられて、始めて病院の大バルコニーに連れ出された。片眼で庭を眺めたあの様子、すが／＼しい空気を食るやうに吸ひこんだあの様子！ 薄布で頭をぐる／＼捲きにした中に、眼の玉が一つだけ出てゐる、このキラ／＼したすばしい眼はまるで生れて始めてのものを見るやうに、世の中を見廻してゐた。

九月二十六日

今日、呼ばれたので下の應接間に行つてみると、二人の娘さんが私を待つてゐた。一人の方はとても綺麗な人だ。コルチャーギンに面會させてくれと頼まれた。二人の名前は——トニーヤ・トゥマーノワにタチャーナ・ブラノフスカヤ。トニーヤの名前はかねてから知つてゐた。コルチャーギンがうはごとの中でよく繰返しては口にした。面會許可。



十月八日

コルチャーギンが始めて一人立ちで庭を散歩する。いつになったら退院できるかと、いくども私に尋ねた。もうぢきだと答へておいた。女の友達は二人とも面會日毎に患者を見舞ひにくる。あの人が呻り聲を出さなかつたわけが判つた、何も病氣のときに限らないのだ。

私がいきて見たら、かう答へた。

——「オヴォード」といふ小説をよんでごらんさい、さうすれば判るから。

十月十四日

コルチャーギン退院。心から名残りを惜んで別れた。眼の繻帯をとる、残つてゐるのは額のだけ、片一方の眼は視力を失つたが、外見は少しも變つてない。このよき友と別れるのは私にとつて、とても辛かつた。

いつもかうだ。癒れば私たちの處から立去つてしまふ、二度ともう顔を合はさぬことも珍しくはない。別れ際にこんなことを云つた。

——左の眼が見えなくなつた方がよかつたになア。これからどうして鐵砲をうつかな？

まだ戦線のことを考へてゐるのだ。

衛戍病院を出てから當分の間、パーヴェルはトーニヤの滞在してゐたブラノフスキイの家で日を送つた。

すぐ様かれはトーニヤを共同の仕事に引張り込めようと試みた。町で開かれる……の集會に出るやうにすゝめた。トーニヤは賛成したものゝ、着換へを了へて部屋から出てきた姿を見て、パーヴェルは唇を噛みしめた。とてもハイカラで、ひどく垢ぬけのした身装りをしてゐるので、自分の仲間のところに連れて行く氣にはなれなかつた。

その日始めて衝突をやらかした。どうしてそんな恰好をしたのだと訊かれて、かの女は憤慨した。

——あたしはみんなと調子を合はせるのなんか大嫌ひ。一緒に行くのが體裁が悪いつて云ふのなら、あたしは残つてゐるわよ。



その日クラブに行つたかれは色褪せた詰襟服やジャケットの間に交つてゐるトーニャの盛装した姿を見るのが辛かつた。みんなはトーニャを他人扱ひにした。それに感づいたかの女は輕蔑するやうな、挑戦するやうな態度で一同を眺め廻した。

ひどい防水布のシャツをきた、年の若い肩幅の廣い積込人夫のパンクライトフは、荷物波止場の同盟書記をやつてゐる男だつたが、パーヴェルを片隅に呼びつけた。

——君か、あの別嬪を連れこんだのは？

——うん、おれだ、——コルチャーギンは激しく答へ返した。

——ふむ、さうか……——パンクライトフは引伸して云つた。——あの女の様子はこちとら向きぢやない。ブルジョアジーそつくりだ。なんだつてあんな女を連れて來たんだ？

パーヴェルは顚顚をヅキ／＼ならした。

——ありやおれの同志だ。だから此處に連れてきたんだ。判つたか？ おれ達に敵愾心を持つてゐるやうな女ぢやない、たゞあの身なりだけは全くその通りだ、だが着物を見ただけでレットナルを貼ると、間違ふこともあるぜ。おれだつてだれを此處に連れて來ちやならねえかぐらゐは知つてゐる、なにも狙ひ撃ちにするこた／＼ないよ、同志。

かれは何かもつとひどいことを云ひたかつたのだが、パンクライトフはみんなの意見を口に出し

て云つたのだといふ事が判つてゐたので、ちつと我慢した。そして自分の憤激を何から何までトーニャの上におつかぶせた。

「だから云はないこつちやないんだ！ あんなに氣取りやがつて何の役に立つてえんだ？」

この晩をきつかけに、二人の友情は崩折れて行つた。

あのやうに堅く／＼結ばれてゐると思はれた友情が、打碎かれて行くさまを歎きと愕きの情を抱いてパーヴェルは見守つてゐた。

さらに數日が過ぎ去つた、逢ふたび毎に、話をするたび毎に、二人の間は遠ざかつて行き、さだかならぬ反目が生れてきた。パーヴェルはトーニャの安つばい個人主義が堪らなく厭になつてきた。決裂しなければならぬことは二人にはつきりと判つてゐた。

今日、かれらは互に最後の言葉を述べ合はうと、クペーチェスキイ公園に連れ立つてきた。邊りは枯れた焦茶色の木の葉に蔽はれてゐた。二人は絶壁の欄干の傍らに立つた。眼下には洋々たるドニエブルの流れが灰色に輝いてゐた。一隻の蒸氣船が兩側の車輪で疲れたやうに水を打ちつけながら、巨大な橋かけから現れたと思ふと、太鼓腹の舳を二艘も曳き連れ、流れに逆つて匍ひ上つて行つた。沈み行く太陽はトゥルハノフ島を黄金の筆で染め、家々のガラスを燃えるやうな炎で色どつてゐた。



トーニャは黄金色の光をうち眺めてゐるが、やがて深い悲しみをこめて口を切つた。

——あたしたちの友情も消え去つてしまふのかしら、今消え去つて行くあの太陽のやうに？

相手をちつと見つめたまゝ、眼を離さなかつたかれはギョッと眉を吊りあげると小聲で答へ返した。

——トーニャ、そのことはもう話したぢやないか。勿論、知つてゐるだらうが、おれはきみを愛してゐた、そして今でもまだおれの愛情は取戻すことが出来る、だがさうするには、きみがおれ達と一緒にならなければ駄目だ。おれは今では以前のまゝのバヴルンシャではない。おれが先づ最初に君のものであり、その次にXのものでなければならぬと云ふのなら、おれは祿な夫にはなれないだらう。だが、おれはまづXのものだ。それからきみのものであり、外の親しい人たちのものなのだ。

淋しさうに河の青みに見入つてゐるトーニャの眼には涙が溢れてゐた。

パーヴェルはよく知つてゐるかの女の横顔や濃い栗毛色の髪の毛を眺めてゐる中に、嘗てはあのやうに尊く、親しかつた乙女に對する憐愍の波動がヒタ／＼と胸下に打寄せてくるのを感じた。

かれは氣を配りながら片手を女の肩にのせた。

——きみを縛りつけてゐるものを何もかも投げ出すんだ。おれ達と一緒にならう。力を合せて紳

士たちを打ち倒さうぢやないか、おれ達の中には立派な娘たちが大勢ゐる。おれ達と一緒にあらゆる困難に打克つて無慈悲な闘争に耐え、おれ達と一緒にあらゆる不自由を忍んでゐる娘たちが……あの連中は、きみのやうに學問はないかも知れない、だがどうして、どうしてきみはおれ達と一緒になりたがらないんだ？ チュージャーニンに無理矢理ものにされさうになつたと云ふが、奴は闘士どころか屑ぢやないか。無愛想な扱ひを受けたと云ふが、そんなら何故あのとときブルジョアの舞踏會にでも行くやうな恰好をしたんだ？ 汚らしい詰襟なんかの御相伴は眞平だ、などと強慢なことを云つて……。君には労働者を愛する元氣はあつたが、思想を愛することは出来ないんだね。きみと別れるのは辛い、だがせめて楽しい氣持で君のことを想出せたらなア。

かれは口を噤んだ。

翌日、通りで指令を見たパーヴェルは縣非常委員會代表ジュフライといふ署名があるのに氣がついた。かれの心臓は打慄へた。やつとのこととで水兵のゐるところまで辿りついたが、通してはくれなかつた。と、かれは何とも云ひやうのない騒ぎをおつ始めたので、歩哨がかれをひつ捉へやうとしてバラ／＼集つてきたほどだつた。それでも目的を達することは出来た。

フョードルと顔を合せて、互に喜び合つた。フョードルは砲彈に當つて片手を打落されてゐた。すぐに仕事のことと話がきまつた。



——當分戦線に出るのは無理だらうから、こゝでおれと一緒にたつて反革命の息の根を止めてやらうぢやないか。明日やつて来いよ、——ジュフライが云つた。

白系ポーランド軍との戦ひも終りを告げた。赤軍はワルシャワ真近に迫つてゐたが、基本部隊との連絡を失ひ、物質的にも肉體的にも全勢力を費ひ果してしまつたため、最後の境界を突破できず、後退を餘儀なくされた。ポーランド人が赤軍のワルシャワ放棄のことを呼んでゐる所謂「ヴィスレの奇蹟」が起つた。貴族の白系ポーランドは壽命を保つた。ポーランド・ソヴェート社會主義共和國の空想は當分の間、實現されずに終つた。

血に浸つた國はしばしの憩ひを必要とした。

バーヴェルは家のものに逢ふわけには行かなかつた。といふのはシェベトフカ町は又もや白系ポーランド軍に占領され、戦線の臨時境界線になつてしまつたからだつた。媾和談判が行はれた。バーヴェルは日も夜も非常委員會にゐて、さまざまな命ぜられたことをやつてのけた。かれはフォードルの部屋に寝泊りしてゐた。町がポーランド軍に占領されたことを知つたバーヴェルは、がっかりし出した。

——どうなるんだ、フォードル、もしこのまゝで媾和するとすると、おふくろは外國に居残ることになるのか？

だが、フォードルはかれを宥めるやうに云つた、

——多分、國境はゴリンを越えて河添ひにきまるだらう。だから、町はおれ達のものになるわけだ。もうぢきわかる。

ポーランド戦線から南方に向け、師團は移動して行つた。息抜きを覘つて、ウランゲリ將軍がクリム地方からのそゞろ匍ひ出して來た。そして共和國がポーランド戦線に全力を注いでゐた間に、ウランゲリ將軍の一味はドニエプル河に沿つて、南から北へ、エカチェリノスラフ縣に向けて動き出して來た。

國はポーランド軍との戦争終結を待つて、この最後まで残つた反革命の巢窟を一掃しやうとクリム目がけてその軍隊を急送した。

人、車、兵站、砲を積み込んだ幾臺もの軍用列車がキエフを通つて南方に向つた。非常委員會運輸部では眼の廻るやうな仕事が續けられた。この後から、押しよせる兵員は「糞づまり」になり、停車場は至るところ超満員を極め、一つとして空いてゐる線がなくなつたために、前進が妨げられた。電信機は最後の要求を打電した電送紙のリボンをつきつゞけた。そこには、これ／＼の師



團のために路を開ける、といふ指令が書かれてゐた。トン・ツツを打ちつけた電送紙の流れはいつ果てるとも見えなかつた、そしてどの電報にもきまつて、——「順序繰り合ハセ……戦時命令……直チニ路ヲ開ケロ……」、そして履行せぬときは罪あるものとして革命軍事裁判に引渡すといふことがその中の殆どすべてに述べられてゐた。

「糞づまり」の責任は非常委員會運輸部が負つてゐた。

各部隊の指揮官がピストルを振廻しながらこゝに乗込んできては、これ／＼の司令官の電報通りに、何號とかによつて、その列車を直ちに運轉してくれと要求した。

そんなことは不可能だと云つても、誰一人耳を傾けやうとはしなかつた。「斃つてもいゝから前へ進めろ！」。そして物凄い悪口を吐いた。特に問題が纏れた場合には遽でテジュフライに出て貰つた。すると激昂の餘り今にも打ち合ひをおつ始めやうとしてゐる連中もおとなしくなつた。

ジュフライの落ちつき拂つた鐵のやうな姿と、口答へを許さない張り切つた聲とが一旦抜き出したピストルをもとのケースに収めさせた。

刺されるやうな痛みを頭に覺えた。パーヴェルは部屋を抜けだして表階段に出た。非常委員會の仕事がひどく神経に徹へた。

あるとき、パーヴェルは彈藥箱を満載した車の上にセリョージャがゐるのを見つけ出した。ブル

ジャツクはかれを目がけて貨車から跳びおり、危く地べたに押し倒さうとしながら堅く／＼かかれを抱きしめた。

——バフカ！ 畜生、おれゝ直ぐに氣がついたぞ。

二人の親友は互に何をきゝ合つたらいゝのやら、何の話をしたらいゝのやら判らなかつた。それまでの間に、餘りにも多くのことを過ぎ経て來たではないか。何か尋ねては相手の返事も待たずに、また自分で答へ返した。汽笛が鳴らされたのにも氣づかなかつた。列車がノロ／＼と動き出した時に始めて抱き合つた腕をもぎ離した。

どうしやうがあらう？ めぐり逢つたと想ふ間もなく、別れねばならなかつた、列車は次第に速力を増して行つた。セリョージャは友に向つて何ごとか別れの言葉をどなると、溫暖車の開いた扉口にしがみ付き乍らプラットホームを走つた。幾本もの腕がかれを捉へ列車中に引摺りこんだ。パーヴェルは突立つたまゝ、後を見送つてゐた。そしてやつと今になつて、セリョージャが姉ワリーヤの最後を知つてないことを想ひだした。セリョージャは故郷の町には居なかつたのだ。だが、かれパーヴェルは想ひがけない出遭ひに面喰つてそのことを話すのを忘れてしまつた。

「落着いた氣持ちで行つてくるがいゝ、知らせないでいゝことをした」とパーヴェルは考へた。流石のかれもこれが友の見納めだとは知らなかつた。秋風を激しく胸にうけて、列車の屋根に突立つてゐる



たセルゲイも亦自分が死に向つて進んで行くのだとは露知らなかつた。

——坐れよ、セリョージャ、——春中の焼けてゐる外套を着たドロシエンコといふ一人の赤兵がかれを説き伏せやうとした。

——なァに、おれは風の子だ。思ふ存分、吹かせるがいゝさ、——セリョージャはニツコリとして答へた。

そして一週間後には、秋のヒタ／＼と染み通つた草原ステツツの戦闘で真先きに最後を遂げてゐた。遠くから、もの凄い勢でめくら弾丸だまが飛んで來た。

ガンとやられたかれは身を打慄はした。胸を抉られ、灼きつくやうな痛みを覚えて、一步踏み出したがよろ／＼した、聲も立てず虚空をかき抱き、両手をしつかと胸に押當てるとまるで跳躍の用意でもするかやうに前屈みになつたが、やがて鐵のやうに強張つた身體はドオとばかりに地上に打倒れた、そしてかれの空色の眼は涯しない草原の彼方をちつと見詰めてゐた。

非常委員會の仕事が神経に徹へるのはパーヴェルがまだ健康になり切つてない證據だつた。打撲傷の痛みがそれに加はり、二晩の間一睡も出來なかつた揚句、とう／＼意識を失ふまでになつた。

その時になつて、かれはジュフライに向つて云つた。

——どう思ふかね、フォードル、おれは外の仕事に移つても構はないだらうか？ おれは腕に覚えのある方面の大工場に行きたくつて堪らないんだ。こゝちやどうもぬじ換子がうまく合はない事がおれにもよく判るんだ。おれは軍務には適さないと委員會で云はれたが、戦線に行く方がこゝよりまだました。この間二日掛つてステイリの一味を片附けたときも、おれはすっかり參つてしまつた。おれは少し鐵砲の打合ひを休まねば駄目だ。さうだらう、フォードル、足下のふら／＼してゐるおれが立派な非常委員になれる筈はないよ。

ジュフライは心配さうにパーヴェルを眺めた。

——うん、様子がよくない。もつと早く樂にさしてやる可きだつたな、その點はおれが悪かつた、仕事にかまけて氣づかずにゐて。

こうした話しの結果、パーヴェルは書類を手にして……………縣委員會に姿を現した、書類によればかれは委員會の指令を貰ひにきたのだつた。

鳥打帽子を無頓着に鼻の頭にかぶつたせか／＼した少年が書類に眼に走らせ、元氣さうにパーヴェルに向つて眼くばせした、

——非常委員會からか？ 愉快的仕事だな。承知した、仕事ならすぐにでも世話しやう。みんな



飢しい想ひをしてゐる。どこに行きたいね？ 縣糧食委員會はどうだ？ いやだ？ ぢや仕様かねえ。波止場の煽動本部に行くか？ いやだ？ おい、勿體ない話だぜ、いゝ口だがな、働きによつちや随分食糧も出るぜ。

パーヴェルは若者を遮つた。

——鐵道の大工場に行きたいんだ。

若者は訝しげにかれを見つめた。

——大工場？ ふむ……大工場からはこゝには人を要求して来てないよ。とにかくウスチノーフイッチのところに行つて見るといゝ。どこかに世話してくれるだらうから。

淺黒い娘と簡単に話しあつた結果、パーヴェルは大工場の同盟集團書記になること、しかも職場から離れないことが決められた。

丁度この頃、クリム地方の門口で且てその韃靼人とドニエプル南方のコサックとの境界線をなしてゐた半島の狭い喉首のところに立つてゐた白衛軍の城砦——「横壕」が新たに、もの凄しい堡壘を築いてゐた。

横壕の彼方のクリムでは、國の隅々から追立てられて来て、滅亡の運命に瀕してゐる舊い世界が酒やけに酔ひしれてゐた。

じめ／＼したある秋の夜、シワーシニ河を暗い中におし渡り、堡壘を満してゐる敵の背後を突かうと、幾萬といふ……民衆の子らが海峡の冷え／＼する水の中に入つて行つた。その幾萬の中には頭の上に自分の機關銃を後生大事にのせて運んで行く熱火のイワンもまざつてゐた。

そして夜明けと共に横壕が熱病にかゝつたやうに沸き立ち狂ひ、數千のものが障害物を越えてリトフスク半島の白軍の搦め手を襲撃してゐた頃には、シワーシニを渡つた先頭縦隊はもう向ふ岸に攀上つてゐた。

砒土を含んだ向ふ岸に匍ひ登つた最初の部隊の中には熱火のイワンの姿も見かけられた。まだ會て見たこともないやうな無慈悲な戦火が燃え上つた。白軍の騎兵隊は水から匍ひ上つた連中目掛けて野獸のやうに狂ひ立つて突進して行つた。熱火のイワンの機關銃は一時も休むことなく死を振り灌いだ。と鉛の雨にあたつたものは人馬もろ共、重なり合つて倒れた。眼も止らぬ速さでイワンは次から次へと新しい保彈帯をさし込んだ。

横壕では幾百とない砲聲が沸き立つた。大地も底なし沼に落ち込むかと思はれた、そして死を乗せた數千の砲弾がキーンと奇妙な唸りを立て、飛んで行つては、細々に碎けて飛び散つた。爆破し傷ついた大地は、パッと舞ひ上り、眞黒な深淵で太陽を蔽ひ隠した。

大蛇の頭は押し潰され、赤い流れがクリムをめぐけて迸つた。第一騎兵師團が最後の物凄い打撃



を加へながら逆つて行つた。恐怖に襲はれ身慄ひした白衛兵は遠てふためき、汽船に乗込んで波止場を離れた。共和國は、すぐ下で心臓が高鳴つてゐるゴロ／＼の詰襟服の胸に、圓い金色の赤旗章を縫ひつけた。そしてその中には機關銃手コムソモル熱火のイワンの詰襟もまぎつてゐた。

ポーランド軍との媾和も締結され、町はジュフライの望み通りに、ソヴェート・ウクライナのものとなつた。町から三十五キロメートルの處にある河が國境になつた。一九二〇年十二月の記念すべき朝、パーヴェルは見覚えのある土地に到着した。

雪に蔽はれたブラットホームに立ち出で、「シエトフカ」と書かれた驛名をちらりと眺めてから、すぐに左に轉じて機關庫に向つた。アルチョムを尋ねたが、鐵工は居なかつた。外套の裾をギョツと締め合はせると、森を抜けて町に向つた。

マリヤ・ヤーコヴレヅナは戸を叩く音に、お入りと云ひながら振返つた。そして戸口から顔を出した雪だらけの男が懐しい倅だと判ると両手で心臓を押へたまゝ餘りの悦びに口も聞けなかつた。瘠せこけた身體ごと倅の胸により沿ひ、その顔に數限りない接吻を浴せかけながら嬉しなきに泣いた。

パーヴェルは母親を抱きかゝへたまゝ、想ひ焦れ、待ち疲れて皺だらけになつたその顔を打眺め

てゐた。そして何も云はずに母親の氣の鎮まるのを待つてゐた。

疲れ果てた女の眼には又もや幸福が輝き始めた。そしてその間中母親は、二度ともう逢へやうとも思はなかつた倅を捉へては何やかやと話しかけ、眺め廻してゐたが、いつまでたつても果てしなかつた。その上、三日ほどしてから、夜中に行軍袋を肩にしたアルチョムがのつそりと入り込んで來たときには、かの女は喜びではち斷れさうになつた。

コルチャーギン一家のさゝやかな住居にはその主人たちが戻つてきた。

苦しい試練と不幸の後、滅亡を免れた兄と弟は一緒になつた……

——で、これからどうする積りだね、おまへたち？ ——マリヤ・ヤーコヴレヅナは息子たちに訊ねた。

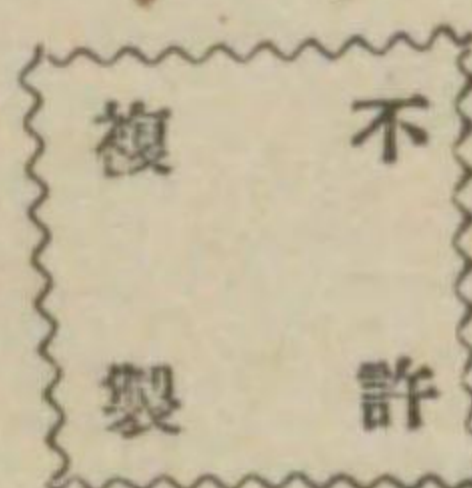
——また職場につくぜ、おっかさん！ ——アルチョムが答へた。

だがパーヴェルは二週間家で暮してからキエフに戻つて行つた。仕事がかれを待つてゐた。



鋼鐵はいかに鍛へられたか

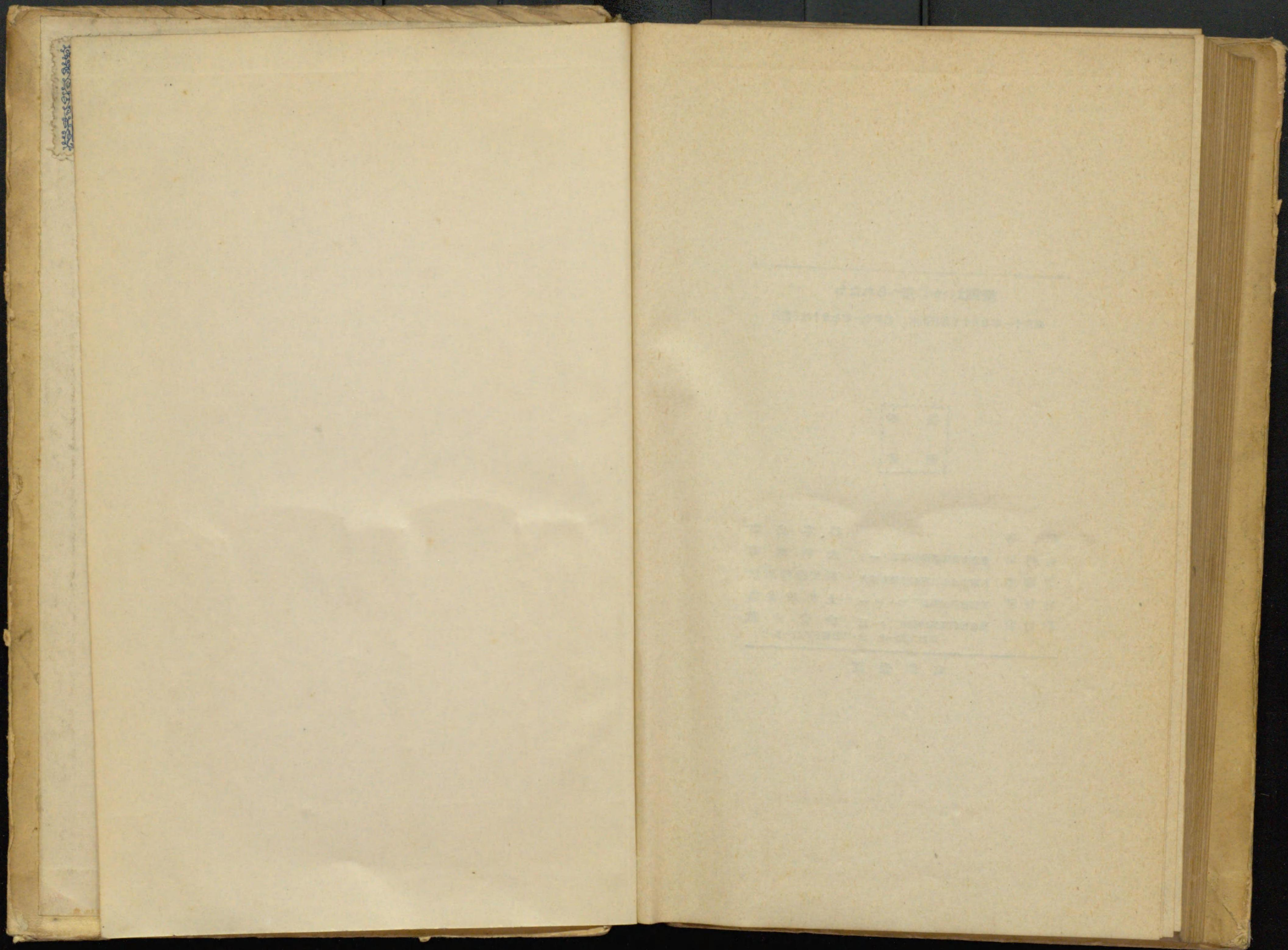
昭和十一年七月十日印刷納本 昭和十一年七月十四日發行



譯者 杉本良吉  
發行者 大竹博吉  
印刷所 和交社印刷所  
發賣所 上田屋書店  
發行所 ナウカ社  
電話九段一七二三・振替東京八〇一四七

定價壹圓

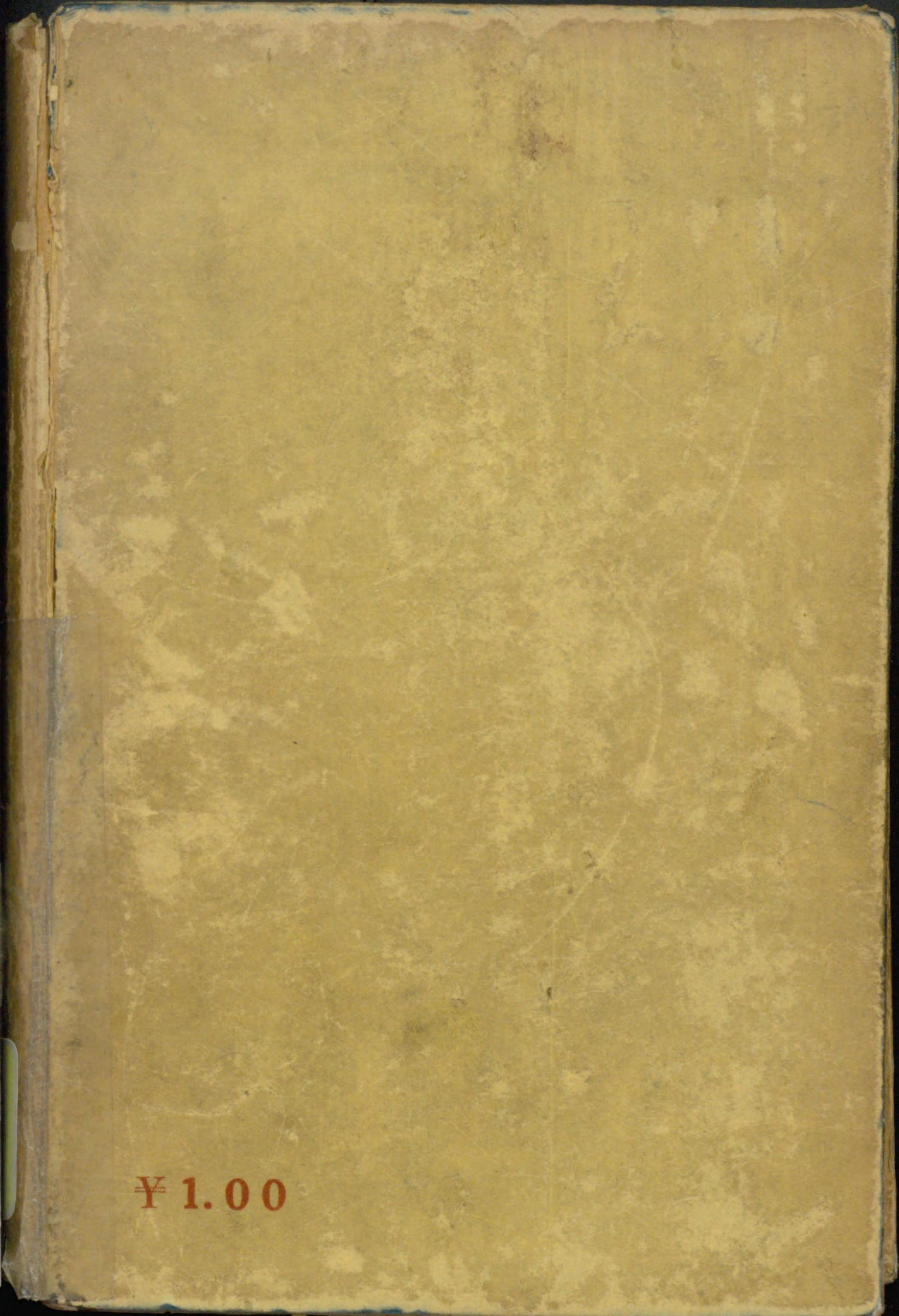






710  
141





¥ 1.00

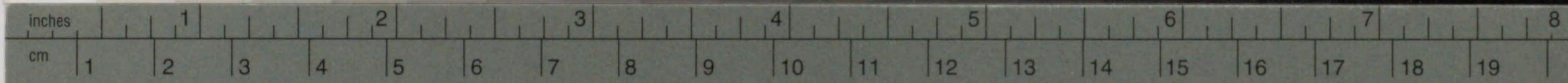


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

